宜野湾市文化財調査報告書　第61集

赤道渡呂寒原古墓群
神山後原丘陵古墓群
宜野湾シリガーラ流域古墓群
宜野湾後原遺物散布地

平成30年度・令和元年度

市道宜野湾11号整備における埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２３（令和５）年２月

沖縄県　宜野湾市教育委員会

宜野湾市文化財調査報告書　第61集
赤道渡呂寒原古墓群　神山後原丘陵古墓群
宜野湾シリガーラ流域古墓群　宜野湾後原遺物散布地
二〇二三（令和五）年二月　沖縄県　宜野湾市教育委員会

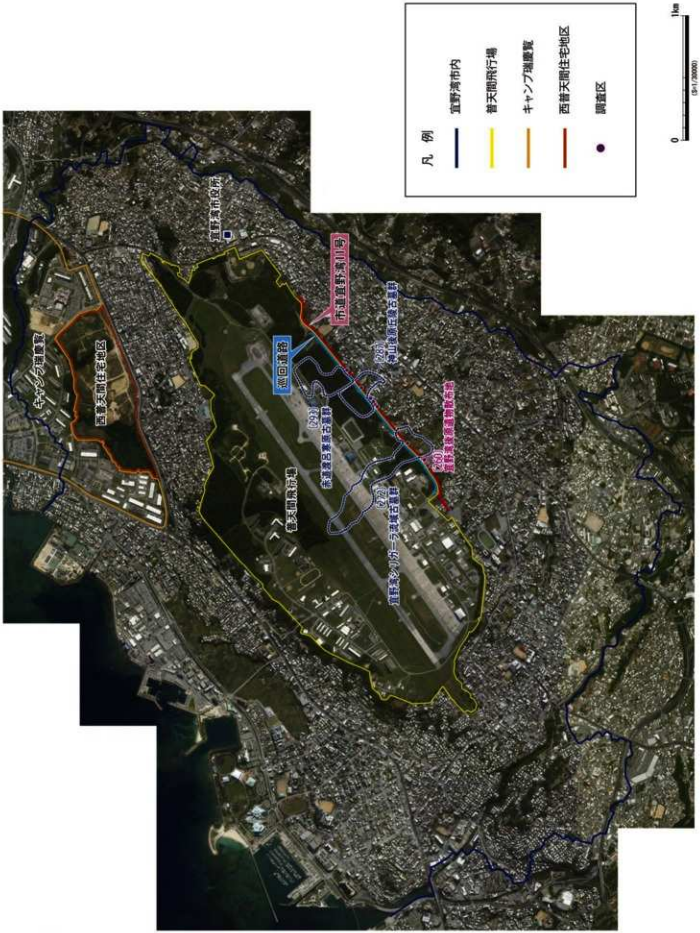
赤道渡呂寒原古墓群
神山後原丘陵古墓群
宜野湾シリガーラ流域古墓群
宜野湾後原遺物散布地

平成30年度・令和元年度

市道宜野湾11号整備における埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２３（令和５）年２月

沖縄県 宜野湾市教育委員会



巻頭図版１　報告書所収調査地位置

巻頭図版２　A-1 区　AS-068 ～ AS-072 検出状況〔西から〕

巻頭図版３　A-2 区　AS-001 ～ AS-004 検出状況〔南西から〕

巻頭図版４　C-1 区　溝跡 完掘状況〔南から〕

巻頭図版５　C-1 区 全景〔北東から〕

巻頭図版６　Ｅ区 全景　調査終了状況〔北東から〕

巻頭図版７　Ｂ区 123号墓 墓口検出状況〔南から〕

巻頭図版８　Ｂ区　69 号墓　厨子安置状況

巻頭図版９　Ｂ区　69 号墓 墓口検出状況〔南から〕

巻頭図版 10　D 区　前景〔北西から〕

巻頭図版 11　D 区 庭囲い石積 検出状況〔北東から〕

序

本報告書は、平成30年度から令和元年度にかけて宜野湾市教育委員会が実施した市道宜野湾11号整備予定地における埋蔵文化財発掘調査の成果報告です。

市道宜野湾11号整備予定地は平成29年度に返還されるまで普天間飛行場の一部であり、当該地区は字宜野湾、字神山、字赤道、字中原をまたがる地域となっております。基地として接収される前は、住宅やお墓、畑などがありましたがそのほとんどは基地建設に伴う造成工事で消失しました。

今回の調査によって、近世～近代にかけての遺跡が確認されております。特に字宜野湾の集落跡となる宜野湾後原遺物散布地では、建物に関係すると見られる柱穴や、その周辺から多くの陶磁器が出土しています。

また、戦前に作られた古墓も良好に残っており、基地接収によって失われた4ヶ字の生活の一端が垣間見える成果が得られております。

本調査成果が、広く市民の皆様に過去の歴史や文化を学ぶ教材として、また学術資料として沖縄の歴史学等の解明に広くご活用いただければ幸いに存じます。

末尾にはなりますが、調査にご協力いただいた沖縄防衛局ならびに関係部署の皆様に対して厚く御礼申し上げます。また、多大なご指導賜りました関係各位に対しまして、心から感謝申し上げます。

令和5年（2023）2月

沖縄県　宜野湾市教育委員会
教育長　仲　村　宗　男

例　言

1．本報告書は、普天間飛行場（東側沿い）（以下市道宜野湾 11 号整備予定地）において沖縄防衛局の支障除去措置に伴い、宜野湾市教育委員会が平成 30 年・令和元年度に実施した緊急発掘調査の成果を収録したものである。

2．本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図(1:2,500)を使用しており、他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営している GIS データを主に使用している。

3．本書で使用した土色は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色調』に準じた。

4．本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系（旧座標系）第ＸＶ座標系の座標北を用い、層位・遺構は海抜高（那覇）を基準とした高さである。

5．本書の執筆は翁長和佳子の協力を得て、金城りお・池原悠貴・長濱健起が行った。

6．現地調査で得られた実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量図等の各種調査記録は、全て宜野湾市教育委員会に保管している。

凡　例　1

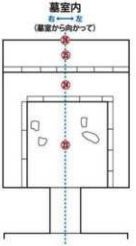
1 墓型式

分類		墓型式	特徴	代表例／市内例	模式図
Ⅰ	a	ガマバカ 洞穴墓	自然洞穴を利用する墓。 洞穴開口部を石積みによって塞ぐものを「洞穴囲込墓」と呼ぶ。	・久米島町ヤッチのガマ ・宜野湾市喜友名山川原丘陵古墓群 プトゥキアブ洞窟	
	b	岩陰墓	自然の岩陰を利用する墓。 岩陰前面を石積みによって塞ぐものを「岩陰囲込墓」と呼ぶ。	・浦添市伊祖の高御墓 ・宜野湾市喜友名前原第一古墓群 岩陰A・D	
Ⅱ	a	ティンチャー 掘込墓 （正面装飾なし）	斜面や岩盤を掘り込んだ墓。 概ね、石積みや漆喰で入口が塞がれるのみで、正面は装飾されない。ただし、屋根を構築するものや、例外的に正面のみを亀甲墓状に飾るものもある。	・宜野湾市小禄墓 ・宜野湾市奥間ノロ墓	
	b	ファーフー 破風墓	正面を装飾した掘込墓で、屋根が破風形(切妻形)になるもの。 墓の背面が露出するものもある。	・那覇市玉陵 ・糸満市幸地腹門中墓	
	c	ヒラフキバカ 平葺墓	正面を装飾した掘込墓で、平屋根を構築するもの。 屋石は直線状。	・浦添市伊祖の ん め御拝領墓 ・浦添市内間西原近世墓群1号墓	
	d	ターミチナーバカ 亀甲墓	正面を装飾した掘込墓で、屋根が亀甲形になるもの。平地に建てられるものもある。 袖回りが省略されて、亀甲の盛り上がりが強調されるものを「ボージャーバカ」と呼ぶ。	・那覇市銘苅古墓群 「伊是名御殿内の墓」 ・宜野湾市大山東方第Ⅴ丘陵古墓群 「大山上江家古墓」	
Ⅲ	a	ヤーガノバカ 家形墓	平地に建てられた墓で、外観が家の形を呈するもの。 屋根は概ね破風形(切妻形)であるが、中には亀甲形のものや塔を建てるものがある。	—	
	b	カリバカ 仮墓	平地に建てられた簡易的な墓。 概ね小型で、市販のものと構築されたものがある。中にはやや大きなものもあり、「箱形墓」と呼ばれるものもある。	—	

『宇地泊西原丘陵古墓群』（宜野湾市教育委員会編 2008）より転載

2 亀甲墓の部位名称

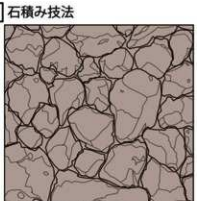
宜野湾市史編集委員会編 1985「宜野湾市史」第5巻 資料編4 参考



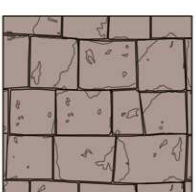
①御香炉石（ウコーロイシ）
②門石（ジョウイシ）
③横石（ヨコイシ）
④縦横石（ヨコタテイシ）
⑤門冠い（ジョウカムリ）
⑥横石（ヨコイシ）
⑦崩（ハ）
⑧臼（ウス）
⑨子臼（コウス）
⑩ヌンチャ
⑪ボージ（ボージャー）
⑫童の手（ワラビ）
⑬袖回り（ヒデマワリ）
⑭袖石（ヒデイシ）
⑮庭積み（ニワ）
⑯庭囲い（ニワ）
⑰三味台（シミセン）
⑱カピアンジ
⑲墓庭（ハカニワ）
⑳墓の門（ハカ）
㉑仮墓（カリバカ）
㉒墓道（ハカ）
㉓シルヒラシ
㉔一番ダナ
㉕二番ダナ
㉖イケ

＊本報告では、この枠とする

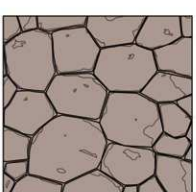
3 石積み技法



野面積み



布積み



相方積み

凡　例　2

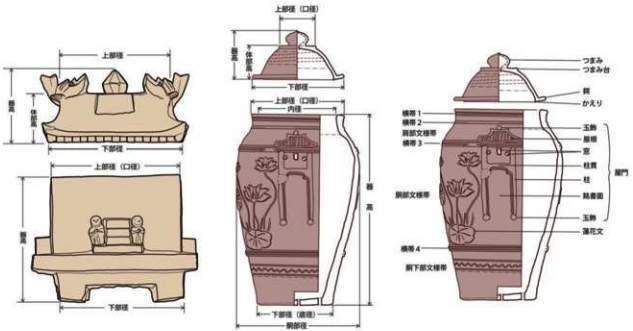
・沖縄では、洗骨後の骨を納めておく甕のことを一般にジーシガーミ（厨子甕）というため（上江洲1982）、本書でも蔵骨器に「厨子」の表記を用いている。

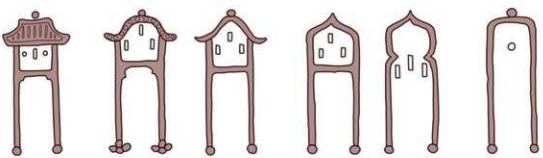
・厨子の分類は、基本的に上江洲均（上江洲1982）・浦添市教育委員会（浦添市教育委員会1997、2006）に倣った。

・諸般の事情により、実測が出来なかった遺物などに関しては、オルソ画像や写真を用いている。

・遺物の実測図や図版などは紙幅の都合上、割愛したものもある。

・各厨子の計測位置および部位名称は以下のとおりである。





屋門の分類

『伊祖の入り御拝領墓の厨子甕と被葬者』
（浦添市教育委員会 1997）より抜粋の上、一部加筆

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例

第Ⅰ章　位置と環境 …… 1
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 2
　第３節　各地域の概要 …… 4

第Ⅱ章　事業概要 …… 7
　第１節　調査に至る経緯 …… 7
　第２節　調査体制 …… 7
　第３節　調査経過 …… 9

第Ⅲ章　A・C・E 区の調査成果 …… 13
　第１節　調査区の設定と層序 …… 13
　　1.　調査区の設定 …… 13
　　2.　基本層序 …… 13
　第２節　遺構 …… 21
　　1.　A 区 …… 22
　　2.　C 区 …… 36
　　3.　E 区 …… 47
　第３節　遺物 …… 49
　　1.　A 区 …… 60
　　2.　C 区 …… 75
　　3.　E 区 …… 80

第Ⅳ章　宜野湾シリガーラ流域古墓群（B 区）の調査成果 …… 81
　第１節　調査概要 …… 81
　第２節　基本層序 …… 81
　第３節　遺構 …… 81
　　1.　123 号墓　墓状況 …… 81
　　2.　69 号墓　墓状況 …… 85
　第４節　遺物 …… 98
　　1.　123 号墓 …… 98
　　2.　69 号墓 …… 101

第Ⅴ章　神山後原丘陵古墓群（D 区）の調査成果 …… 131
　第１節　基本層序 …… 131
　第２節　遺構 …… 131
　第３節　遺物 …… 138

第Ⅵ章　自然科学分析の成果 …… 141
　第１節　平成 30 年度　市道宜野湾 11 号整備予定地の現地調査 …… 141
　第２節　令和元年度　市道宜野湾 11 号整備予定地における自然科学分析 …… 146
　第３節　令和２年度　市道宜野湾 11 号整備予定地における自然科学分析（69 号墓）…… 156

第Ⅶ章　結語 …… 159

参考・引用文献 …… 166
報告書抄録

巻頭図版

巻頭図版１　報告書所収調査位置
巻頭図版２　A-1 区 AS-068 ～ AS-072 検出状況〔西から〕
巻頭図版３　A-2 区 AS-001 ～ AS-004 検出状況〔南西から〕
巻頭図版４　C-1 区 溝跡 完掘状況〔南から〕
巻頭図版５　C-1 区 全景〔北東から〕
巻頭図版６　E 区 全景 調査終了状況〔北東から〕
巻頭図版７　B 区 123 号墓 墓口検出状況〔南から〕
巻頭図版８　B 区 69 号墓 厨子安置状況
巻頭図版９　B 区 69 号墓 墓口検出状況〔南から〕
巻頭図版 10　D 区 前景〔北西から〕
巻頭図版 11　D 区 庭囲い石積 検出状況〔北東から〕

挿図目次

第Ⅰ - １図　宜野湾市の位置 …… 1
第Ⅰ - ２図　宜野湾市の地質図 …… 2
第Ⅰ - ３図　発掘調査地位置図と周辺の文化財（昭和 20 年）5
第Ⅰ - ４図　発掘調査地位置図と周辺の文化財 …… 6
第Ⅰ - ５図　市道宜野湾 11 号位置図と周辺の文化財 6
第Ⅲ - １図　調査壁面（赤ライン）…… 13
第Ⅲ - ２図　A-1 区 土層断面図 …… 15
第Ⅲ - ３図　A-2 区 土層断面図 …… 17
第Ⅲ - ４図　C-1 区 土層断面図 …… 19
第Ⅲ - ５図　A-1 区 第１面遺構平面図 …… 22
第Ⅲ - ６図　A-1 区 第２面遺構平面図 …… 23
第Ⅲ - ７図　A-1 区 個別遺構平面図・断面図 -1 …… 24
第Ⅲ - ８図　A-1 区 個別遺構平面図・断面図 -2 …… 25
第Ⅲ - ９図　A-1 区 個別遺構平面図・断面図 -3 …… 26
第Ⅲ -10 図　A-1 区 個別遺構平面図・断面図 -4 …… 27
第Ⅲ -11 図　A-2 区 遺構平面図 …… 33
第Ⅲ -12 図　A-2 区 個別遺構平面図・断面図 …… 34
第Ⅲ -13 図　C-1 区 遺構平面図 …… 36
第Ⅲ -14 図　C-1 区 個別遺構平面図・断面図・出土状況図 -1 36
第Ⅲ -15 図　C-1 区 個別遺構平面図・断面図・出土状況図 -2 37
第Ⅲ -16 図　C-2 区 遺構平面図 …… 40
第Ⅲ -17 図　C-2 区 出土状況図 …… 41
第Ⅲ -18 図　C-3 区 遺構平面図 …… 43
第Ⅲ -19 図　C-3 区 個別遺構平面図・断面図 …… 44
第Ⅲ -20 図　E 区 遺構平面図 …… 47
第Ⅲ -21 図　E 区 遺物出土状況 …… 47
第Ⅲ -22 図　遺物出土割合 …… 50
第Ⅲ -23 図　A-1 区 出土遺物 -1 …… 60
第Ⅲ -24 図　A-1 区 出土遺物 -2 …… 62
第Ⅲ -25 図　A-1 区 出土遺物 -3 …… 64
第Ⅲ -26 図　A-1 区 出土遺物 -4 …… 66
第Ⅲ -27 図　A-1 区 出土遺物 -5 …… 68
第Ⅲ -28 図　A-1 区 出土遺物 -6 …… 70
第Ⅲ -29 図　A-1 区 出土遺物 -7 …… 72
第Ⅲ -30 図　A-2 区 出土遺物 …… 74
第Ⅲ -31 図　C-1 区 出土遺物 …… 75
第Ⅲ -32 図　C-2 区 出土遺物 …… 77
第Ⅲ -33 図　C-3 区 出土遺物 …… 79
第Ⅲ -34 図　E 区 出土遺物 …… 80
第Ⅳ - １図　B 区 123 号墓 遺構平面図・立面図 …… 83
第Ⅳ - ２図　B 区 69 号墓 遺構平面図・立面図 …… 86
第Ⅳ - ３図　B 区 69 号墓 全体平面図・立面図・断面図 88
第Ⅳ - ４図　B 区 69 号墓 獣骨埋納遺構および墓外入口平面図・断面図 -1 …… 89
第Ⅳ - ５図　B 区 69 号墓 獣骨埋納遺構および墓外入口平面図・断面図 -2 …… 90
第Ⅳ - ６図　B 区 69 号墓 平面図・断面図 -1 …… 91
第Ⅳ - ７図　B 区 69 号墓 平面図・断面図 -2 …… 92
第Ⅳ - ８図　B 区 69 号墓 墓室内厨子甕出土状況図 93
第Ⅳ - ９図　B 区 123 号墓 出土遺物 -1 …… 99
第Ⅳ -10 図　B 区 69 号墓 厨子配置の復元（2019.07.11 時点）…… 105
第Ⅳ -11 図　B 区 69 号墓 1 号厨子 (1) …… 107
第Ⅳ -12 図　B 区 69 号墓 2 号厨子 (2) …… 109
第Ⅳ -13 図　B 区 69 号墓 3 号厨子 (3) 4 号厨子 (4) …… 111
第Ⅳ -14 図　B 区 69 号墓 7 号厨子 (5) 11 号厨子 (6) 113
第Ⅳ -15 図　B 区 69 号墓 9 号厨子 (7) …… 115
第Ⅳ -16 図　B 区 69 号墓 12 号厨子 (8) 13 号厨子 (9) 117
第Ⅳ -17 図　B 区 69 号墓 14 号厨子 (10) 15 号厨子 (11) 119
第Ⅳ -18 図　B 区 69 号墓 16 号厨子 (12) 22 号厨子 (13) 121
第Ⅳ -19 図　B 区 69 号墓 17 号厨子 (14) 21 号厨子 (15) 123
第Ⅳ -20 図　B 区 69 号墓 出土遺物 …… 129
第Ⅴ - １図　D 区 遺構平面図・立面図 …… 133
第Ⅴ - ２図　D 区 出土遺物 …… 139
第Ⅵ - １図　調査地周辺の地形分類 …… 142
第Ⅵ - ２図　暦年較正結果 …… 150
第Ⅵ - ３図　各地点の種実遺体群集 …… 152
第Ⅵ - ４図　暦年較正結果 …… 157

図版目次

図版Ⅰ - １　昭和 20 年 宜野湾市全体 …… 2
図版Ⅱ - １　作業状況 -1 …… 9
図版Ⅱ - ２　作業状況 -2 …… 10
図版Ⅱ - ３　作業状況 -3 …… 11
図版Ⅱ - ４　作業状況 -4 …… 12
図版Ⅲ - １　A-1 区 -1 …… 28
図版Ⅲ - ２　A-1 区 -2 …… 29
図版Ⅲ - ３　A-1 区 -3 …… 30
図版Ⅲ - ４　A-1 区 -4 …… 31
図版Ⅲ - ５　A-1 区 -5 …… 32
図版Ⅲ - ６　A-2 区 -1 …… 34
図版Ⅲ - ７　A-2 区 -2 …… 35
図版Ⅲ - ８　C-1 区 -1 …… 38
図版Ⅲ - ９　C-1 区 -2 …… 39
図版Ⅲ -10　C-2 区 -1 …… 41
図版Ⅲ -11　C-2 区 -2 …… 42
図版Ⅲ -12　C-3 区 -1 …… 45
図版Ⅲ -13　C-3 区 -2 …… 46

図版Ⅲ-14　E区-1 …… 48
図版Ⅲ-15　A-1区 出土遺物-1 …… 61
図版Ⅲ-16　A-1区 出土遺物-2 …… 63
図版Ⅲ-17　A-1区 出土遺物-3 …… 65
図版Ⅲ-18　A-1区 出土遺物-4 …… 67
図版Ⅲ-19　A-1区 出土遺物-5 …… 69
図版Ⅲ-20　A-1区 出土遺物-6 …… 71
図版Ⅲ-21　A-1区 出土遺物-7 …… 73
図版Ⅲ-22　A-2区 出土遺物 …… 74
図版Ⅲ-23　C-1区 出土遺物 …… 76
図版Ⅲ-24　C-2区 出土遺物 …… 78
図版Ⅲ-25　C-3区 出土遺物 …… 79
図版Ⅲ-26　E区 出土遺物 …… 80
図版Ⅳ-1　B区123号墓 遺構平面オルソ …… 82
図版Ⅳ-2　B区123号墓-1 …… 84
図版Ⅳ-3　B区123号墓-2 …… 85
図版Ⅳ-4　B区 69号墓 遺構平面オルソ …… 87
図版Ⅳ-5　B区 69号墓-1 …… 93
図版Ⅳ-6　B区 69号墓-2 …… 94
図版Ⅳ-7　B区 69号墓-3 …… 95
図版Ⅳ-8　B区 69号墓-4 …… 96
図版Ⅳ-9　B区 69号墓-5 …… 97
図版Ⅳ-10　B区123号墓 出土遺物 …… 100
図版Ⅳ-11　B区69号墓(1)1号厨子 …… 108
図版Ⅳ-12　B区69号墓(2)2号厨子 …… 110
図版Ⅳ-13　B区69号墓3号厨子(3)4号厨子(4) …… 112
図版Ⅳ-14　B区69号墓7号厨子(5)11号厨子(6) …… 114
図版Ⅳ-15　B区69号墓9号厨子(7) …… 116
図版Ⅳ-16　B区69号墓12号厨子(8)13号厨子(9) 118
図版Ⅳ-17　B区69号墓14号厨子(10)15号厨子(11) 120
図版Ⅳ-18　B区69号墓16号厨子(12)22号厨子(13) 122
図版Ⅳ-19　B区69号墓17号厨子(14)21号厨子(15) 124
図版Ⅳ-20　B区69号墓5号厨子(16)6号厨子(17) 125
図版Ⅳ-21　B区69号墓8号厨子(18)10号厨子(19) 126
図版Ⅳ-22　B区69号墓18号厨子(20)19号厨子(21) 127
図版Ⅳ-23　B区69号墓20号厨子(22) …… 128
図版Ⅳ-24　B区69号墓 出土遺物 …… 130
図版Ⅴ-1　D区 遺構平面オルソ …… 134
図版Ⅴ-2　D区-1 …… 134
図版Ⅴ-3　D区-2 …… 135
図版Ⅴ-4　D区-3 …… 136
図版Ⅴ-5　D区-4 …… 137
図版Ⅴ-6　D区 出土遺物 …… 140
図版Ⅵ-1　花粉化石・微粒炭 …… 154
図版Ⅵ-2　種実遺体 …… 155
図版Ⅵ-3　炭化材 …… 158

挿表目次

第Ⅲ-1表　A・C・E区 基本層序対応関係 …… 14
第Ⅲ-2表　統一層序一覧 …… 14
第Ⅲ-3表　A-1区 検出遺構一覧(SP) …… 25
第Ⅲ-4表　A区 検出遺構一覧(SD・SK) …… 28
第Ⅲ-5表　C区 検出遺構一覧(SD・SK) …… 41
第Ⅲ-6表　C区 検出遺構一覧(SP) …… 44
第Ⅲ-7表　沖縄産無釉陶器分類一覧 …… 51
第Ⅲ-8表　アカムヌー分類一覧 …… 51
第Ⅲ-9表　A-1区 出土遺物観察表-1 …… 52
第Ⅲ-10表　A-1区 出土遺物観察表-2 …… 53
第Ⅲ-11表　A-1区 出土遺物観察表-3 …… 54
第Ⅲ-12表　A-1区 出土遺物観察表-4 …… 55
第Ⅲ-13表　A-1区 出土遺物観察表-5 …… 56
第Ⅲ-14表　A-1区 出土遺物観察表-6 …… 57
第Ⅲ-15表　A-2区 出土遺物観察表 …… 58
第Ⅲ-16表　C-1区 出土遺物観察表 …… 58
第Ⅲ-17表　C-2区 出土遺物観察表 …… 59
第Ⅲ-18表　C-3区 出土遺物観察表 …… 59
第Ⅲ-19表　E区 出土遺物観察表 …… 59
第Ⅳ-1表　B区123号墓 出土遺物観察表 …… 98
第Ⅳ-2表　B区69号墓 厨子観察表-1 …… 101
第Ⅳ-3表　B区69号墓 厨子観察表-2 …… 102
第Ⅳ-4表　B区69号墓 厨子観察表-3 …… 103
第Ⅳ-5表　B区69号墓 厨子観察表-4 …… 104
第Ⅳ-6表　B区69号墓 厨子観察表-5 …… 105
第Ⅳ-7表　B区69号墓 出土遺物観察表 …… 106
第Ⅴ-1表　D区古墓 基本層序対応関係表 …… 132
第Ⅴ-2表　D区 出土遺物観察表 …… 138
第Ⅵ-1表　試料一覧 …… 145
第Ⅵ-2表　試料一覧および分析項目一覧 …… 145
第Ⅵ-3表　放射性炭素年代測定結果 …… 149
第Ⅵ-4表　花粉分析・微粒炭分析結果 …… 151
第Ⅵ-5表　微細物分析結果 …… 151
第Ⅵ-6表　放射性炭素年代測定結果 …… 157
第Ⅶ-1表　69号墓 厨子甕銘書一覧 …… 160
第Ⅶ-2表　遺物集計表 …… 161
第Ⅶ-3表　沖縄産施釉陶器集計表-1 …… 162
第Ⅶ-4表　沖縄産施釉陶器集計表-2 …… 163
第Ⅶ-5表　沖縄産無釉陶器集計表 …… 164
第Ⅶ-6表　アカムヌー集計表 …… 164
第Ⅶ-7表　本土産陶磁器集計表 …… 165
第Ⅶ-8表　中国産陶磁器集計表 …… 165
第Ⅶ-9表　蔵骨器集計表 …… 165

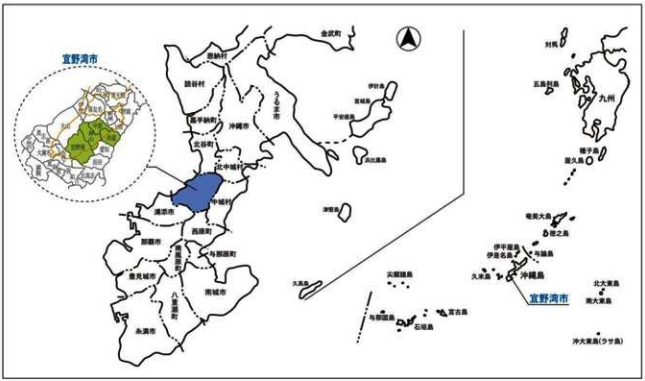
第Ⅰ章　位置と環境

第１節　地理的環境

宜野湾市は、沖縄本島の中部西海岸にあって、東シナ海に面し、北は北谷町、北東は北中城村、東は中城村、東南には西原町、南は浦添市が隣接する。市域の総面積は、約 19.8 ㎢で、市域北西にはキャンプ瑞慶覧、中央には普天間飛行場基地が占有し、米軍基地の面積は市面積の 29.4%を占めている（2020 年 3 月時点）。市域には沖縄本島を縦断する国道 58 号や 330 号が通り、市域を横断する道路は沖縄自動車道北中城 IC・西原 IC へのアクセス道路としても利用され本島北部、中部と南部地域を繋ぐ交通の要となっている。

本市の主な地質は琉球石灰岩で、土壌はクチャと呼ばれる島尻層群を基盤としている。不透水層の島尻層の上に不整合に琉球石灰岩が覆っており、その境界を地下水が流れ湧泉として湧き出している。また、東シナ海に面した海岸低地である西側は、砂層である沖積層から成り、内陸部の丘陵地では島尻層群が風化してできたジャーガル土壌や台地上には島尻マージと呼ばれる土壌が広く分布している。地形をみると、西側の海岸から東側の内陸に向かって雛壇上の海岸段丘から成り、市域の段丘は中位段丘（約 20 万年前に形成）と低位段丘（約 12 万年前に形成）に大別され、それぞれに下位面と上位面に区別する 4 つの段丘面を有している（宜野湾市市史編集委員会編 2000）。低位段丘下位面（第 1 面）は、比屋良川河口から宇地泊、真志喜、大山、伊佐に連なる標高 3 ～ 30 mの海岸低地である。低位上位面（第 2 面）は、国道 58 号周辺と普天間基地に挟まれた標高 30 ～ 40 mの石灰岩段丘で、中位段丘下位面（第 3 面）は、国道 330 号周辺からなる標高 90 m以上の高地となる。

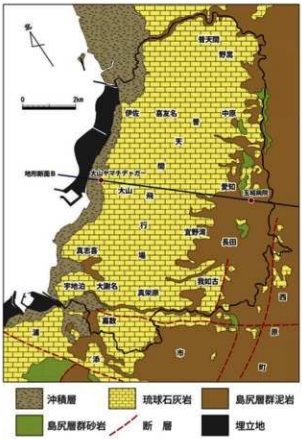
また、市内には 133 か所の洞穴があり、県内でも有数の洞穴地帯といえる。このような洞穴は石灰岩が雨などの影響を受けて作り上げた「カルスト地形」の一つである。市内では鍾乳洞、ドリーネ、ウバーレな



第Ⅰ－１図　宜野湾市の位置

どのカルスト地形が作りだす自然が多くみられる。また、東側の中位段丘面で降った雨水は、地下水として流れながらカルスト地形を作り出し、西側の低位段丘面で琉球石灰岩と島尻層群の境界から湧水として流れ出している。その量は豊富で、戦前の西海岸一帯には湧水を利用した水田が広がっていた。

市道宜野湾11号の予定地は中位段丘下位面（第3面）にあり、標高90～100mあたりに位置する。石灰岩台地上にあるため、ガマ（洞穴）が発達しており、多くの洞穴が見られる。洞穴は雨水などの水の吸い込み口となり、大雨時には氾濫することもしばしばあった。今回、市道宜野湾11号予定地で行われた支障除去の際にも普天間飛行場方面に続く洞穴がいくつか確認されている。



第Ⅰ－２図　宜野湾市の地質図

第２節　歴史的環境

沖縄諸島に人々が住み始めたのは今から３万年程前に遡り、旧石器時代と呼称される時代で宜野

図版Ⅰ－１　昭和20年　宜野湾市全体

湾市においても、工事中に開口した大山名利瀬原の洞穴から「大山同人」と称される更新世（200～1万年前）に由来する20歳前後の男性の下顎骨が発見されている（高宮ほか1975、鈴木1975）。また、普天満宮洞穴遺跡等では、リュウキュウムカシキョン等のシカ類の化石が多数発見されている（宜野湾市教育委員会1989）。

現在からおよそ6000～7000年前から1000～800年前までの数千年に及ぶ時代を沖縄貝塚時代と称する狩猟・採集の時代となる。沖縄貝塚時代は、遺跡の立地・出土遺物等の違いから早期・前期・中期・後期に大別されている。前期は市域を含め、沖縄諸島域に当時の土器形式が広く分布していることから、定着的な集団により各地域に遺跡が形成される時期と考えられる。貝塚時代中期は、拠点的な大規模集落が平地に展開し、小規模遺跡がその周縁に点在しており市域では、西側琉球石灰岩地帯で顕著にみられる。後期には、前述の西側琉球石灰岩地帯に加えて、海岸低地の砂地にも居住域が拡散しており、その規模も一律的に大きくなっていくようである（宜野湾市教育委員会1989）。

12世紀から15世紀に及ぶグスク時代は、沖縄において初めて農耕を基礎とする社会が形成・発達した時期である。市域のグスク時代の遺跡は、迫地や河川流域の谷底低地を控える平地・丘陵斜面・段丘縁の高所に立地しており、市域の伝統的集落である近世の“村”の形態がこの時期に形成され始める。生産的農耕社会を基盤とした社会が展開されていく中で、農耕の基盤である土地・その生産を支える道具の入手や制作・同時期に展開された日本や中国・朝鮮・東アジア地域との交易などを通して各地域の集団は共同化したと考えられ、その中から“按司”と称される在地支配者層が出現する。按司を中心とした各地域の集団は、相互に抗争を繰り返しながら次第に淘汰され、14世紀ごろには、中山・山北・南山の3つの小国家が成立する。市の真志喜区に所在する県指定文化財の森の川には、中山の王として1372年に明朝に朝貢した「察度」の出自が記された石碑が残されている。その後1429年には尚巴志が三山を統一し、琉球王国誕生へと至る。グスク時代から第二尚氏王朝前期の1609年島津侵入までを歴史学では古琉球と称し、中世に相当する。

琉球王国は島津の支配を受けながらも王国としての体裁は保ちつつ、中国（明・清）との交易を行っていた。近世琉球と称される時代である。市域の集落は、基盤型の集落と屋取集落が存在していた。この集落形態は、近世に開始され、耕作地を増やすために小規模に転々と存在した集落を一箇所に集め、平地を田畑へと開墾していった。さらに18世紀以降、首里や那覇の士族の移住により屋取集落が形成されていった。

近代になると、1872（明治5）年に琉球藩、1879（明治12）年には沖縄県の設置が強行され、1881（明治14）年6月には中頭一帯を管轄する中頭役所が美里間切りから宜野湾間切の普天間に移設された（宜野湾市史編集委員会編1985）。その後、中頭郡教育事務所、中頭郡組合農事試験場などの官公署が相次いで設置されたことにより市域は本島中部地域の政治・経済・教育の中心となった。1902（明治35）年には首里から普天間に至る普天間街道、1922（大正11）年には県営鉄道嘉手納線（軽便鉄道）が開通した。1908（明治41）年の「沖縄県及び島嶼町村制」施行により従来により従来の間切は町・村に、村は字に改められ、宜野湾間切は宜野湾村となった。

1945（昭和20）年4月1日、中部西海岸に上陸した米軍に対する日本軍の前線基地として、本市域も壊滅的な打撃を被り、さらには戦後の軍用地接収と度重なる基地造成によって市域の景観は大きく変貌することとなった。他地域に比べ僅かに焼失を免れた野嵩地区が住民の収容所の一つとなり、その後、1946（昭和21）年9月以降、元の集落ないしはその近隣に帰住が許可され、社会基盤の復活が果たされると米軍基地関連産業の活況により市域の人口も急増した。1962（昭和37）年7月1日には村から市に昇格した。

第３節　各地域の概要

宜野湾

宜野湾区は宜野湾市のほぼ中央に位置し、戦前は「ジノーンドゥームラ（宜野湾同村）」と呼ばれ、宜野湾村の中心であった1671年、宜野湾間切が新設された際に間切番所が置かれ、宜野湾間切の中心地となった。廃藩置県後、沖縄県になってからも村役場や中頭役所・学校・郵便局等の公共施設が集中し、宜野湾村の政治・経済・文化の中心地であった。宜野湾は琉球石灰岩の台地上に位置し、石灰岩地帯の特徴であるガマ（洞窟）やカー（泉）が発達している地域である。標高は東側から西側にかけて緩やかに傾斜しており、集落北東側の神山区との境界にはシリガーラが流れている。いくつかの小川が東側の高台から流れ、小さな谷間をつくり、谷底は水田に利用された。

集落は、大きな松の並木道であるナンマチ（並松街道）に沿ってその東側に広がり、公共施設が置かれ、行政の中心地となっていた。ナンマチに並行して、ウマイー（馬場）が集落北西側にあり、ウマハラシー（競馬）などの催し物が行われた。主な生業は農業で、サトウキビ栽培が中心で、小さな谷間には水田もあった。耕地面積が広く、他に牛・馬・豚・山羊などの家畜も多く飼育されていた。宜野湾村の中心地として交通の要所であったため、ほかの集落に比べ商業を営む者も多く、特にナンマチ沿いは商店が集中し、ナンマチとウマイーの付近ではマチグヮー（市場）が開かれ、食料品などが取引され、周辺の村をはじめ、那覇・首里からも商売をする人々が来て賑わっていた。

宜野湾は戦後、集落のほぼ全てと地域の約３分の２を普天間飛行場に接収されており、集落の南に位置する、前田原、薄倉原、山川原の耕地に宅地を造成し居住することになった。1964（昭和 39）年の行政区再編で、志真志区の一部が分割され、宜野湾区に統合された。

神山

神山区は宜野湾区と隣接していて、「ジノーン・カミヤマ（宜野湾・神山）」と呼ばれていた。中規模の集落ではあったが、大きな屋敷もあり比較的裕福で、闘牛が盛んであった。東側から南側にかけて小高い丘陵をなし、西側、北側は平坦な地形で、大部分は宜野湾のひな壇状の４つの海岸段丘のうち標高 50 ～ 90 m（中位段丘下位面）にある。集落は中央部の神山原にあり、東側高台の無手原、後原との間には「カンミンモー」と呼ばれる南北にのびる琉球石灰岩の山があった。カンミンモーの東の麓には多くのガマがあり、周囲の雨水が流れ込んで地下を通り、集落のあるカーから湧き出てきた。また集落の中央部分には「ダキヤマドゥガマ」と呼ばれるガマがあり、ンジュ（溝）に集まった集落内の水を排水していた。西側端は谷底低地が発達しており、その中央にはシリガーラが流れ、字宜野湾との境界でもある。石灰岩の山が多く、集落の北側、東西にのびるウフミチ（大道）沿いで集落の西にある「ミーハギウシモー」と呼ばれる闘牛場の近くに数カ所の採石場があった。南は石灰岩台地と島尻層群の境がありし耕作地が続いていた。

集落は丘陵の北側の麓に、ナンマチに沿って碁盤目状の地割がなされていた。集落の西側から北側にかけて平坦で広い農耕地が広がっていた。生業はサトウキビが主でサツマイモ、大豆などが多く生産された。サトウキビは７ヶ所のサーターヤー（製糖小屋）で自家製糖したが、トロッコで北谷村の嘉手納製糖工場へ直接搬入する農家もいた。昭和以前にはシンバルダーなど谷底の湿った地域はもともと水田地帯であったが、沖縄戦の直前にはほとんど畑になっていたという。

神山も戦後、かつての集落を普天間飛行場に接収されて、元集落の南、カンミンモーをはさんで無手原や愛知の懇良増原などの耕地に宅地を造成して居住することになった。1964（昭和 39）年の行政区再編で、神山と愛知が統合し、19 区となり、2014（平成 24）年に 19 区から愛知区へと名称を変更する。

赤道

現在は宜野湾市の中央部東側に位置する住宅地域で行政区は中原区である。中央部に国道 330 号が通り、宜野湾中学校などが所在する。戦前の道路や地形を残している場所もあり印部土手石などの文化財も残っている。

戦前は士族層が形成したヤードゥイ（屋取）集落で、中城村北上原から移住した一族が多く住んでいた。1939（昭和 14）年に、新城・喜友名・神山・宜野湾の一部が分離独立し、赤道となっている。

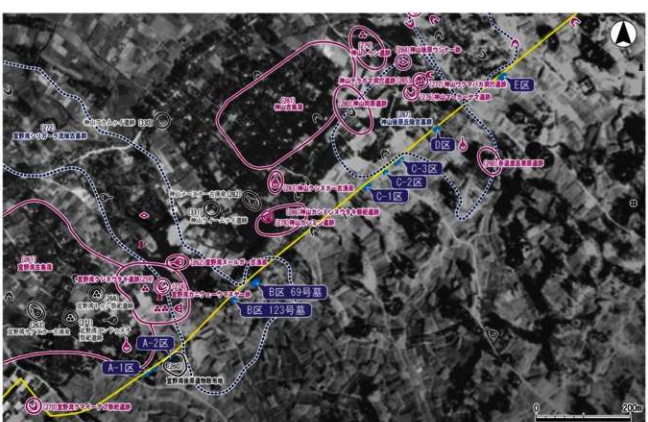
おもな産業はサトウキビで集落内のサーターヤーで自家精糖するものや嘉手納の精糖工場に搬入するものもいたという。闘牛場もあり、隣接している上原と組合を作って闘牛を開催しており、闘牛が盛んであったことが窺える。戦前の闘牛場は軍道 5 号線（現 330 号）建設で破壊されたため、今の位置に移動している。近年までは大会が開かれていたが、現在は閉鎖されている。

中原

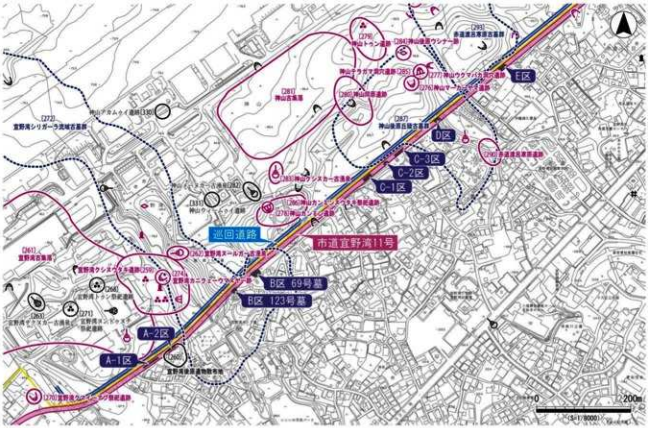
集落のすべてを普天間飛行場に接収されており、現在は隣接する赤道・上原とともに中原区を形成している。

石灰岩台地上にあったヤードゥイ（屋取）集落で戦前は主にサトウキビを生産していた。集落には大山駅までのトロッコ軌道が敷かれており、嘉手納の精糖工場まで搬入し製糖するものもいた。農業以外にもバサムチャー（馬車引き）や帽子仲買・石大工などの生業にするものもいたという。

中原はバーサクヤードゥイ（芭蕉迫屋取）と呼ばれ、元々は喜友名・神山地番であった。喜友名地番か神山地番かでメーヤドゥイ・クシヤードゥイに分かれ学校もそれぞれ 2 ヶ所に分かれて通っていたという。1939（昭和 14）年に分離・独立している。



第Ⅰ－３図　発掘調査地位置図と周辺の文化財（昭和 20 年）



第Ⅰ－４図　発掘調査地位置図と周辺の文化財

第Ⅰ－５図　市道宜野湾 11 号位置図と周辺の文化財

第Ⅱ章　事業概要

第１節　調査に至る経緯

市道宜野湾 11 号道路整備予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査事業（以下当該事業）は、市道宜野湾 11 号道路整備事業に伴うものである。市道宜野湾 11 号道路整備事業は、国道 330 号の補完及び地域内における交通量緩和や地域住民の生活環境の改善が目的とされた。その経緯は、昭和 54 年度に普天間飛行場周辺補修事業として事業採択がなされたことによって始まり、その後事業は断続的に進捗する。平成 8 年 3 月に「沖縄に関する特別行動委員会」（SACO）において普天間飛行場内における既存巡回道路等の移設を条件とした普天間飛行場東沿いの土地返還の承認がなされたが、同年 12 月の SACO 最終報告で普天間飛行場の全面返還が合意されたことに伴い、東側沿いの土地返還に係る事業は中断した。平成 14 年度に宜野湾市より那覇防衛施設局に対し、市道宜野湾 11 号道路整備事業の促進等を要請し、平成 17 年度には、市道宜野湾 11 号道路整備事業は当該地の返還ありきであり、既存巡回道路移設が完了した後に返還となる旨の調整がなされた。その後、道路線系等を検討し、平成 25 年度には宜野湾市教育委員会と沖縄防衛局で「普天間飛行場（東側沿い土地）の返還に伴う工作物移設予定地区埋蔵文化財に関する協定書」を締結し、平成 26・27 年度には巡回道路移設工事予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査を実施している。

当該事業は巡回道路移設後の返還部分にあたる土地で行われた緊急発掘調査である。平成 29 年度に沖縄防衛局より沖縄県における駐留軍用地跡地の有効かつ適切な利用の推進に関する特別措置法（平成 7 年法律第 102 号）第 8 条に基づく支障除去措置を計画しているため埋蔵文化財の有無についての照会があり、同年宜野湾市教育委員会が、「中原同原遺跡」「赤道シキロー流域古墓群」「赤道渡呂寒原古墓群」「神山後原丘陵古墓群」「宜野湾シリガーラ流域古墓群」「宜野湾後原遺物散布地」の遺跡が所在すると回答を行った。その後、平成 29 年 12 月に「普天間飛行場（東側沿い）における埋蔵文化財調査に関する協定書」を締結し、緊急発掘調査を実施するに至った。

第２節　調査体制

市道宜野湾 11 号整備に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査は平成 30 年・令和元年度に実施し、資料整理及び報告書作成に係る整理業務は令和元～４年度に実施した。その調査体制は下記の通りである。

事業主体	沖縄県宜野湾市教育委員会	
事業責任者	教育長	知念　春美（平成 30 ～令和３年度）
		仲村　宗男（令和４年度）
事業総括	教育部　教育部長	比嘉　　透（平成 30 ～令和元年度）
		嘉手納貴子（令和２～４年度）
	教育部　教育次長	桃原　忍子（平成 30 年度）
		真志喜若子（令和元～３年度）
		宮城　葉子（令和４年度）
	文化課　文化課長	比嘉　　洋（平成 30 ～令和２年度）
		津波古良幸（令和３年度）

			浜里　吉彦（令和４年度）
事業事務	文化課	文化財保護係長	仲地　真俊（平成 30 ～令和２年度）
			長濱　健起（令和２年度）
			比嘉　高志（令和３・４年度）
		文化財保護係担当主査	長濱　健起（平成 30 ～令和３年度）
			伊藤　　圭（令和４年度）
		文化財保護係主任主事	仲村　　毅（平成 30 ～令和４年度）
			森永　穣英（令和４年度）
			田中　　梓（平成 30 ～令和３年度）
			金城　りお（令和２～４年度）
		文化財保護係主事	金城　りお（令和元年度）
			末吉　飛鳥（令和２～４年度）
調査業務		文化財保護係長	仲地　真俊（平成 30 ～令和元年度）
		文化財保護係主任主事	長濱　健起（平成 30 ～令和元年度）
		文化財保護係主事	金城　りお（平成 30 ～令和元年度）
		文化財保護指導員	池原　悠貴（平成 30 ～令和元年度）
資料整理業務		文化財保護係長	仲地　真俊（平成 30 ～令和２年度）
			長濱　健起（令和２年度）
			比嘉　高志（令和３・４年度）
		文化財保護係担当主査	長濱　健起（令和元～３年度）
			伊藤　　圭（令和４年度）
		文化財保護係主任主事	金城　りお（令和元～４年度）
		会計年度任用職員	池原　悠貴（令和元～４年度）

委託業務

令和元年度　発掘調査支援業務委託　㈱島田組　宜野湾営業所

令和３年度　資料整理業務委託　㈱島田組　宜野湾営業所

令和２年度　パリノ・サーヴェイ株式会社

調査指導及び調査協力（職名等は現在）

調査指導及び調査協力として下記の方々に指導・協力をいただいた。

沖縄防衛局　管理部　返還対策課

第３節　調査経過

【平成 30 年度】

4 月 23 日　A-1・2 区の調査区設定を行う。重機による除草除去。

4 月 25 日　A-2 区で人力による掘削の開始。

5 月 7 日　A-1 区で人力による掘削の開始。

5 月 15 日　A-2 区で磁気探査（-0.5m の経層探査）を行う。

5 月 25 日　A-2 区の完了状況の写真撮影。

5 月 29 日　A-2 区の記録作業・確認作業を終え、調査完了となった。

6 月 8 日　台風 5 号の接近に伴い養生作業を行った。

6 月 11 日　A-1 区で磁気探査（-0.5m の経層探査）を行う。C-1 区で重機による掘削を開始した。

6 月 13 日　A-1 区の溝状遺構検出状況の撮影。

6 月 15 日　台風 6 号の接近に伴い養生作業を行った。

6 月 19 日　C-1 区で人力による掘削作業を行う。

6 月 21 日　A-1 区の溝状遺構の完掘。記録作業を行う。C-1 区で不発弾を検出する。宜野湾署の警察官が確認・回収を行う。

6 月 25 日　A-1 区西の完掘状況の写真撮影。記録作業を行う。

6 月 26 日　A-1 区東で重機掘削を行う。磁気探査（-1m の経層探査）を行う。

6 月 27 日　A-1 区東の遺構検出作業を行う。

6 月 29 日　A-1 区東の遺構検出状況の写真撮影を行う。台風 7 号の接近に伴い養生作業を行う。

重機による表土掘削

遺構検出作業

不発弾磁気探査

人力による遺構掘削

図版Ⅱ - 1　作業状況 － 1

7月9日　台風8号の接近に伴い養生作業を行う。
7月11日　A-1区東の遺構掘削を行う。
7月19日　パリノ・サーヴェイ（株）による自然科学分析のためのサンプル採取作業を実施。台風10号接近のため養生作業を行う。
7月24日　A-1区東の遺構完掘状況の写真撮影。記録作業を行う。
7月25日　C-2、3区の調査区設定を行う。
7月26日　A-1区の調査を完了する。C-1区の遺構検出状況の写真撮影を行う。D区（古墓）の調査を開始する。
7月27日　C-1区の遺構掘削を行う。不発弾を検出し、警察が確認・回収を行う。
7月30日　C-2区で重機による掘削を行う。
7月31日　C-1区、石列の検出状況の写真撮影・記録作業を行う。
8月7日　C-1区の溝状遺構の検出状況の撮影・記録作業を行う。D区（古墓）検出状況の撮影・記録作業を行う。
8月8日　D区（古墓）の開口作業を行う。
8月9日　D区（古墓）墓室内の調査を行う。
8月10日　台風14号の接近に伴い養生作業を行う。
8月13日　D区（古墓）墓庭のトレンチ掘削を行う。
8月17日　C-1区の完掘状況の写真撮影。記録作業を行う。
8月20日　C-1区の全ての調査を完了する。
8月22日　C-3区で重機による掘削を行う。

写真測量

完掘状況の写真撮影

ドローンによる写真測量

高所作業車による写真撮影

図版Ⅱ－２　作業状況－２

8月24日　C-2区の溝状遺構の検出状況を撮影・記録作業を行う。E区の調査区設定を行う。
8月29日　C-2区で不発弾を検出。警察が確認し、回収する。
8月31日　D区（古墓）墓庭・墓室の完掘状況の撮影・記録作業を行う。
9月3日　E区で人力による掘削を行う。D区（古墓）でドローンによるオルソ写真撮影を行う。
9月7日　C-3区で磁気探査（-0.5m 経層探査）を実施。
9月12日　E区で重機による掘削を行う。
9月13日　C-2、3区の遺構検出状況をスカイマスターを使用して写真撮影を行う。E区で磁気探査（-1m 経層探査）を実施する。
9月14日　E区で、パリノ・サーヴェイによるサンプリング作業を行う。
9月19日　D区（古墓）の墓屋根トレンチ掘削を開始する。E区の調査完了状況の写真撮影・記録作業を行う。
9月20日　E区の調査を終了した。
9月21日　D区（古墓）屋根後方掘方のトレンチ掘削を行う。
9月27日　C-3区の遺構検出状況の写真撮影、記録作業を行う。台風24号、接近のため養生作業を行う。
10月2日　C-2、3区の遺構完掘状況をスカイマスターにより写真撮影を行う。記録作業を行う。
10月3日　C-2、3区で重機による確認掘削を行い、調査を完了した。台風25号、接近のために現場の養生を行う。
10月4日　現場撤収を完了する。
10月10日　道路建設予定地内に古墓（3基）が不時発見され、その内1基が工事で破壊されることから古墓の追加調査が必要になった。調査対象になった古墓はB区123号墓とする。

業者によるサンプリング作業

古墓 測量風景

墓外観の測量

123号墓 作業風景

図版Ⅱ－3　作業状況－3

10 月 11 日　B 区 123 号墓の検出作業を開始する。
10 月 16 日　B 区 123 号墓の検出状況の写真撮影を行う。
10 月 18 日　B 区 123 号墓の追加の写真撮影を行う。調査を完了した。

【令和元年度（平成 31 年度）】

7 月 8 日　宜野湾シリガーラ流域古墓群、69 号墓の伐採作業を行う。
7 月 10 日　墓屋根のトレンチ掘削に着手する。
7 月 16 日　墓庭の米軍造成を重機により除去する。
7 月 17 日　墓庭のトレンチを重機により掘削を行う。台風 5 号、接近のため現場を養生する。
8 月 5 日　墓室内の出土状況の写真撮影・記録作業を行う。天井の崩落により数基の蔵骨器が倒れている状況を確認。
8 月 7 日　69 号墓の検出状況の写真撮影・記録作業を行う。台風 9 号の接近に備えて、養生を行う。
8 月 13 日　三味台の西半の掘り下げを行う。三味台の西端で、ブタの下顎骨を検出する。
8 月 19 日　墓室内の蔵骨器の取り上げを開始した。
8 月 20 日　崩落した天井の落石を重機を使用して除去し、残りの蔵骨器を取り上げた。21 基の蔵骨器を確認する。
8 月 21 日　シルヒラシの掘り下げを実施。
8 月 22 日　磁器探査（-0.5m 経層探査）を実施。
9 月 3 日　墓室内の完掘状況の写真撮影・記録作業を行う。
9 月 4 日　追加の撮影・記録作業を実施。調査を完了する。

安全祈願

掘削作業

蔵骨器の搬出

出土蔵骨器

図版Ⅱ－４　作業状況－４

第Ⅲ章　A区・C区・E区の調査成果

第１節　調査区の設定と層序

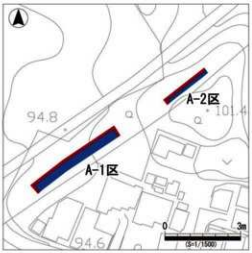
１．調査区の設定

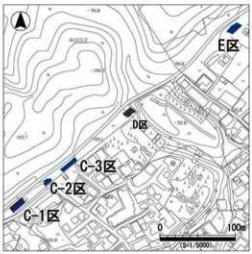
ここではA区・C区・E区の調査結果をまとめる。B区・D区に関しては古墓となるので別章に分けて記述する。

これらの調査区は普天間飛行場東沿いの土地返還に際し、普天間飛行場内にあった既存の巡回道路の移設を行う過程で試掘・本調査を行った結果から設定した調査区である。

A区は宜野湾後原遺物散布地、C･D区は神山後原丘陵古墓群、E区は赤道渡呂寒原丘陵古墓群がそれぞれ所在している。

以下A区・C区・E区の調査結果を概観する。





第Ⅲ－１図　調査壁面（赤ライン）

２．基本層序

敷地内の地形については、普天間飛行場基地の南東側の海岸段丘の中位段丘上位面（第４面）に位置し、北西側には段丘崖斜面が確認できる。調査地周辺は、石灰岩堤、埋没の痕跡を示す谷状凹地、埋没したドリーネの可能性がある溶食凹地が、これまでの調査などで確認され、比高30ｍ未満の起伏丘陵をなしている。

全体的に米軍造成で削平されている部分も多く、A-2、C-1、C-3区ではⅡ層の残りが悪かった。Ⅱ層の中でも粒子の細かさや砂質の強弱の違いがあり、耕作期間の長短に関係するとみられる。A-1、A-2、C-1区で石灰岩の岩盤を確認している。

遺構はマージ（地山）を掘削して構築したものが多いが、戦後に構築したとおもわれる遺構もみられた。

E区でのみⅢ層を確認した。神山の歴史（宜野湾市教育委員会 2012）で、戦前に谷を埋めて水田としていたが、後に水田から畑に変えてサトウキビの耕作をしていたということなのでE区の堆積はその影響も考えられる。自然科学分析調査で、下部は島尻層群泥岩が母材の谷埋め堆積物であり、その上位は母材がマージとされている。この境界は不整合となっており、掘削後に周辺マージを盛土したと考えられる。またこの堆積が均質であることから耕作地の造成の可能性があると指摘されたが、E区での栽培種は検出されなかった。

以下に基本層序を示す。また層序については、普天間飛行場とその周辺の遺跡の関係性を理解しやすくするために、普天間飛行場の調査で使用している沖縄県と宜野湾市の試掘調査の層序を統一した「統一層序」についても記載する。

Ⅰ層：表土。米軍接収以後の造成層及び黙認耕作土も含まれる（統一層序Ⅰａ層）。

Ⅱ層：にぶい褐色（7.5YR5/3）～黄褐色（2.5Y5/4）のシルト。戦前の耕作層で、主に地山を削平して耕作する。耕作期間が長いほど、粒子が細かく砂質が強くなる。E区ではクチャを包含する（統一層序Ⅱａ層）。

Ⅲ層：E区にみられる谷埋堆積層。島尻層群の泥岩を使用した埋土とおもわれる。自然科学分析調査では、基盤はさらに下位と想定される。

Ⅳ層：地山。マージ層。

Ⅳａ層：橙色（7.5YR6/6）～黄褐色（10YR5/8）のシルト。普天間飛行場基地内における統一層序Ⅶ層に相当する。米軍造成や耕作の影響を受けることが多く、粘質や砂質の強弱がみられる。場所によってマンガンの包含量が異なる。

Ⅳｂ層：にぶい褐色（7.5YR5/3）～黄褐色（10YR5/6）の粘質土。普天間飛行場基地内における統一層序Ⅶｅ層に相当する。米軍造成や耕作の影響で粘質の強弱はみられるが、マンガンの包含はみられない。

Ⅴ層：琉球層群の石灰岩。普天間飛行場基地内における統一層序Ⅷ層に相当する。

第Ⅲ－１表　Ａ・Ｃ・Ｅ区　基本層序対応関係

	A-1区		A-2区		C-1区		C-2区		C-3区		E区	
	調査時	報告	調査時	報告	調査時	報告	調査時	報告	調査時	報告	調査時	報告
Ⅰ層	Ⅰａ～g、Ⅱａ～d	Ⅰ	Ⅰａ～d	Ⅰ	Ⅰａ～d、Ⅱａ	Ⅰ	Ⅰａ～g	Ⅰ	Ⅰａ～d、Ⅱａ	Ⅰ	Ⅰａ～d、Ⅱａ	Ⅰ
Ⅱ層	Ⅱｅ～h	Ⅱ			Ⅱｂ、d	Ⅱ			Ⅱｃ	Ⅱ	Ⅱｂ～ｃ	Ⅱ
Ⅲ層											Ⅳａ～ｂ	Ⅲ
Ⅳ層	Ⅲa1～2	Ⅳa	Ⅲa1～2	Ⅳa	Ⅲa1～2	Ⅳa	Ⅲa1～2	Ⅳa	Ⅲa1～2	Ⅳa	Ⅲa1～2	Ⅳa
	Ⅲb1～2	Ⅳb	Ⅲb	Ⅳb	Ⅲb	Ⅳb					Ⅲb	Ⅳb

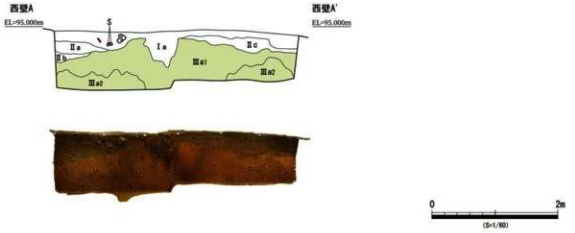
※A-2区のⅡ層は地山掘削で、時期がはっきりしない。C-1区のⅡｃとC-3区のⅡｄは落ち込みのため、時期不明。

第Ⅲ－２表　統一層序一覧

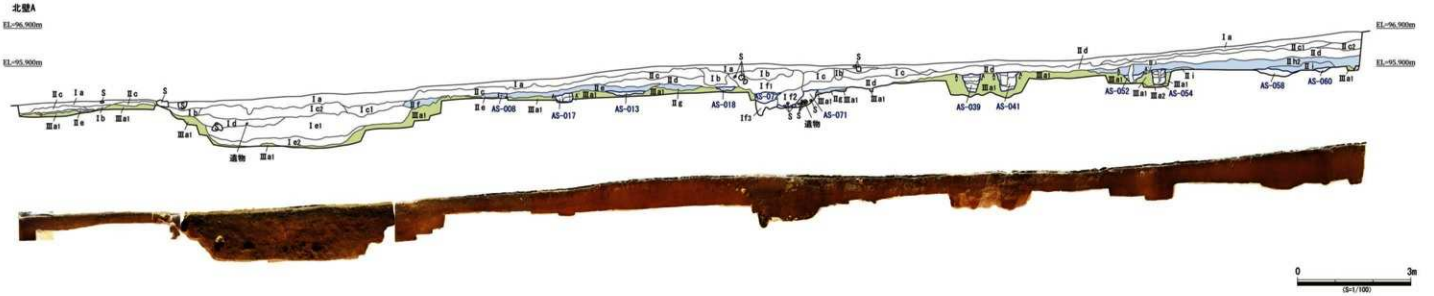
統一層序	時代	解釈	土の色・質
Ⅰａ層	現代　基地造成後	表土、攪乱層	
Ⅰｂ層	現代　基地造成時	基地造成土	
Ⅱ層	近・現代　基地造成前	耕作土など	灰褐色 砂質シルト
Ⅲ層	近世	耕作土など	褐色～灰褐色 砂質シルト
Ⅳ層	グスク時代	耕作土など	暗灰色～黒灰色 砂質シルト～シルト
Ⅴ層	古代～グスク時代初期	耕作土など	灰黄褐色～鈍い黄褐色 シルト～粘土質シルト
Ⅵ層	縄文時代後期・晩期	谷への堆積土など	黄褐色 粘質シルト
Ⅶa層		マージ	褐色 砂質シルト
Ⅶb層		マージ	明黄褐色（褐色） 砂質シルト
Ⅶc層		マージ	明黄褐色（明褐色） 砂質シルト
Ⅶd1層		マージ	明黄褐色 砂質シルト
Ⅶd2層		マージ	明黄褐色 砂質シルト
Ⅶd3層		マージ	明黄褐色 砂質シルト
Ⅶe層		マージ	暗褐色 砂質粘土質シルト
Ⅷ層		琉球層群　石灰岩	灰白色 石灰岩
Ⅸ層		島尻層群の風化層 クチャ	灰オリーブ色 泥岩風化土
Ⅹ層		島尻層群　クチャ	灰色 泥岩

「沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第112集　基地内文化財9」（沖縄県立埋蔵文化財センター2022）より抜粋の上、一部加筆

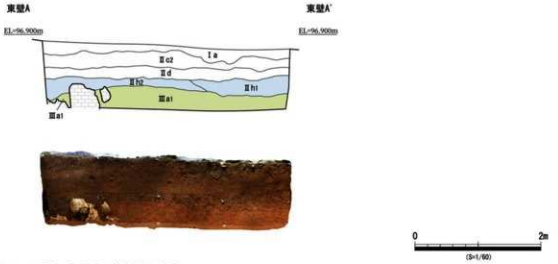
A-1区　西壁土層断面図



A-1区　北壁土層断面図



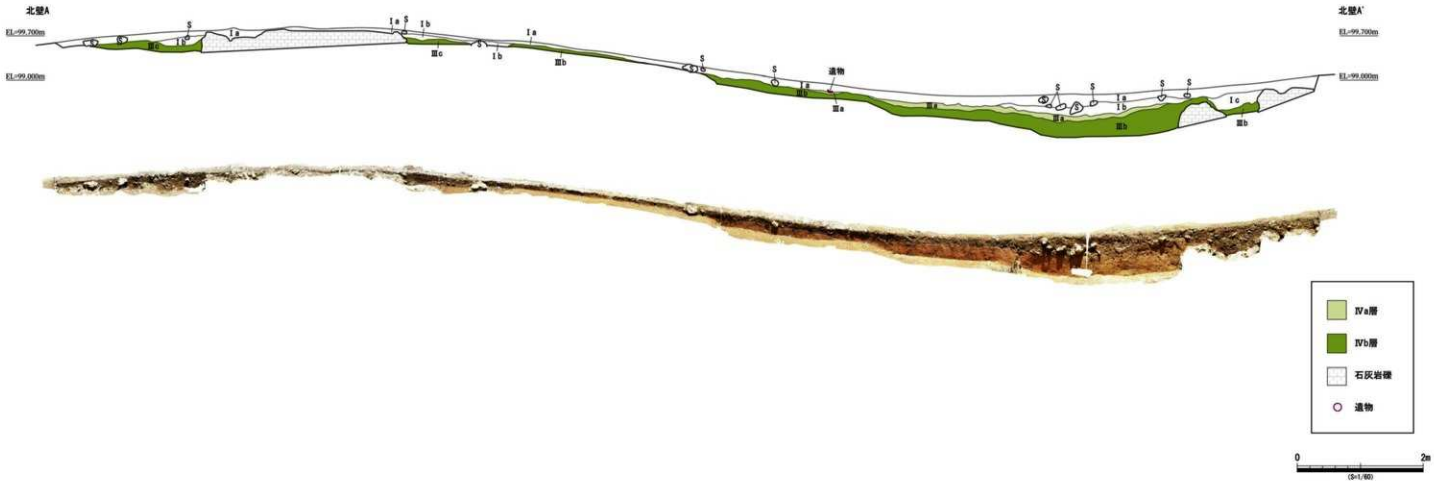
A-1区　東壁土層断面図



第Ⅲ－２図　A-1区 土層断面図

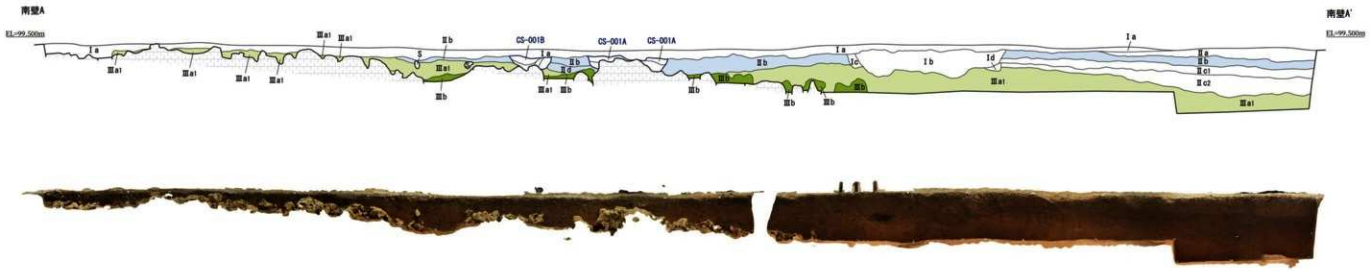
A-2区　西壁土層断面図

A-2区　北壁土層断面図

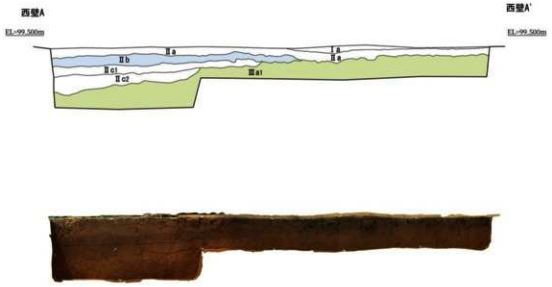


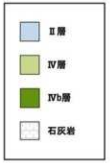
第Ⅲ－３図　A-2区 土層断面図

C-1区　南壁土層断面図



C-1区　西壁土層断面図





第Ⅲ－４図　C-1区 土層断面図

第２節　遺構

A・C・E 区の調査では総数 101 の遺構が確認された。遺構の種類は主に柱穴跡・畝状遺構・土坑・溝状遺構である。遺構番号は検出時点で地区ごとに任意で振っているがその後木の根等の腐植痕や現代の攪乱として欠番になった番号もある。以下地区ごとに遺構を概観する。

A 区

A 区は A-1 区で 49 基の遺構が検出された。その中でピット状の遺構は 29 基、溝や土坑と見られる遺構が 19 基確認できている。

明確な建物プランは見えないが、溝状遺構（AS-022）から北東側 5 m以内に柱穴跡が集中している。また溝状遺構（AS-022）は浅く、柱穴跡群と逆方向の南西側がやや低くなっていることから、建物側から排水する為の溝と考えられる。また AS-011、012、013 については畝状遺構で戦前から戦後すぐ頃の畑の跡だと考えられる。

A-2 区ではほとんど遺構は見られなかった。米軍基地の造成で破壊されたと見られる。

C 区

C 区では遺構が 8 ヶ所確認された。C-1 区では南北方向に走る 2 条の溝状遺構（CS-001A・B）が検出されている。用途は不明だが水の影響を受けた層が見られるため、排水の為の溝であった可能性が高い。

E 区

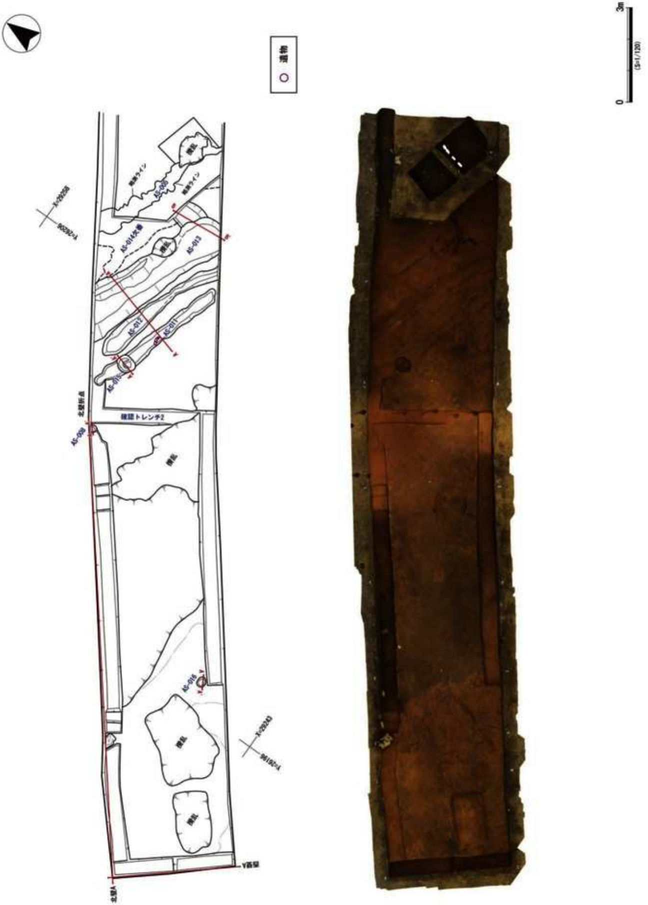
E 区については表土では切石が集積している状況が見られたため、当初古墓が埋もれている可能性も考え掘削をし確認を行ったが、明確な遺構は検出されなかった。

壁面では凹地を埋めて耕作をした可能性が窺える層が見られ、自然科学分析でもその所見（153p）が述べられているが、耕作土と見られる層が米軍造成で大きく破壊されており、また調査区も極小なためはっきりとした結論を出すことはできなかった。

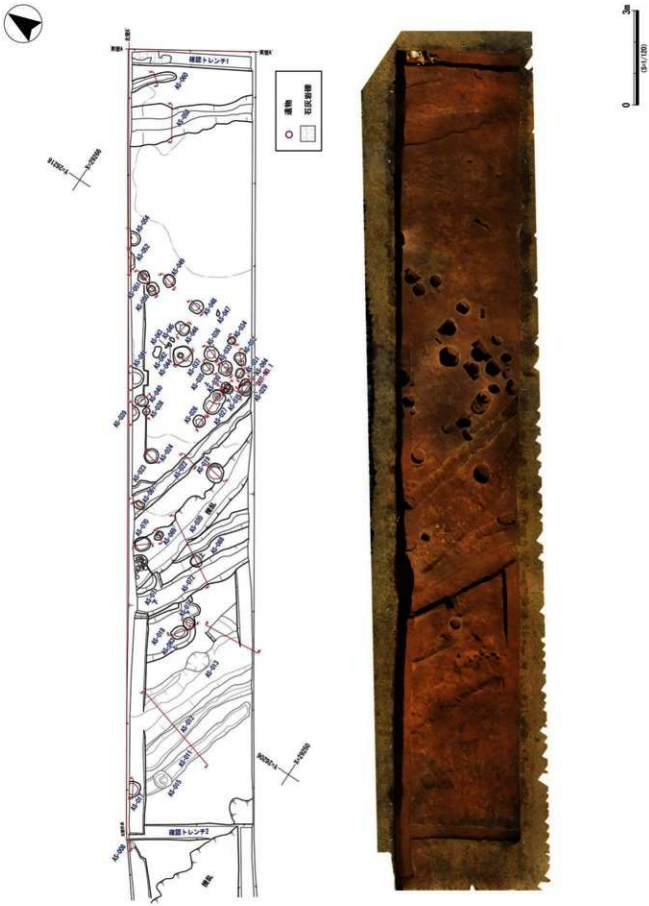
以上、A・C・E 区の遺構について概観した。今回の調査の結果、全ての調査区で地山まで米軍基地造成の影響を受けていることが分かった。特に今回の調査区はフェンス沿いで管理用道路が敷かれていた場所であることも影響したと考えられる。それでも地山に掘りこまれた遺構は残存しておりピットや溝状遺構などが確認されている。遺構の詳細については第Ⅲ - 3～6 表に示す。

1．A区

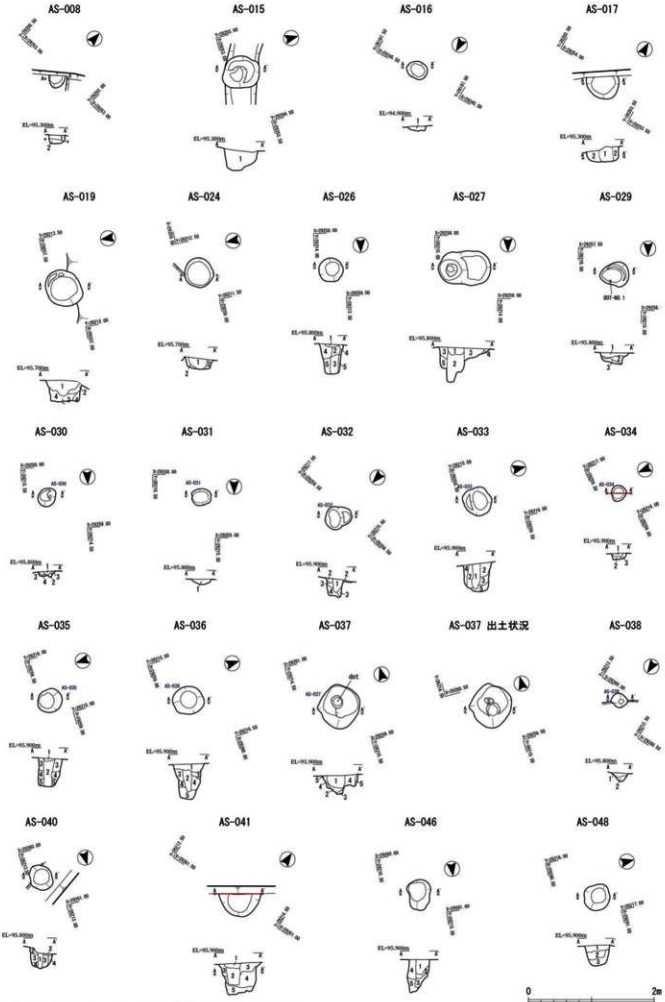
(1) A-1区



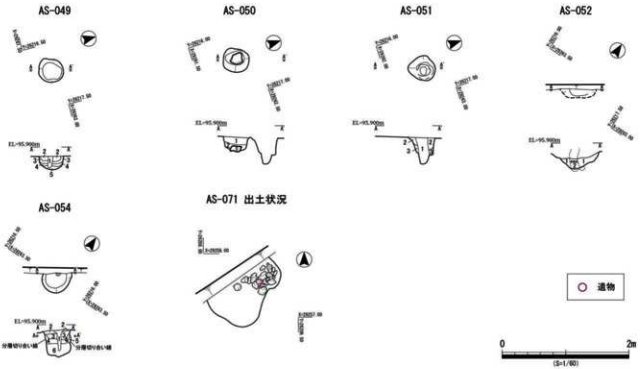
第Ⅲ－５図　A-1区　第１面遺構平面図



第Ⅲ－６図　A-1区　第２面遺構平面図



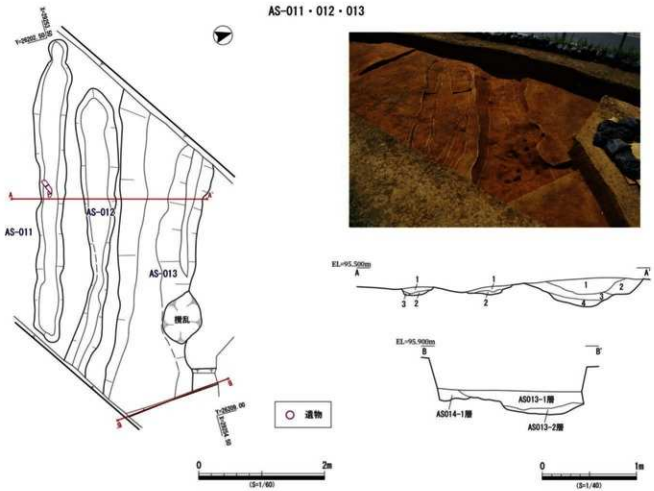
第Ⅲ－７図　A-1 区　個別遺構平面図・断面図 -1

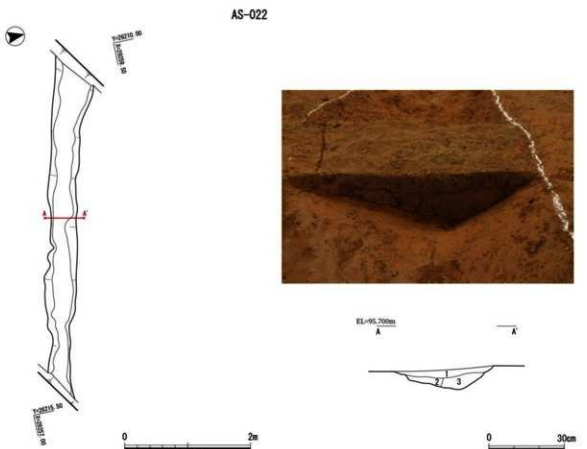


第Ⅲ－８図　A-1 区　個別遺構平面図・断面図 -2

第Ⅲ－３表　A-1 区 検出遺構一覧 (SP)

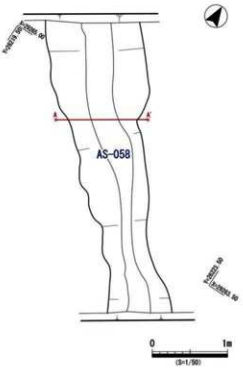
遺構名	堆積	法量（cm）				底面の標高 (m)	断面分類	柱穴の可能性	出土遺物	備考
		検出	深さ	比率	柱径					
AS-008	2	26	15	26：15	―	95.05	Ab類	×		
AS-016	1	30	7	30：7	―	94.66	Cb類	×	獣骨	
AS-017	2	50	30	5：3	20	94.95	Ab類	◎		
AS-019	4	56	32	7：4	18	95.2	Ac類	○	沖無	
AS-024	2	44	20	11：10	30	95.35	Ab類	○		
AS-026	5	35	48	35：48	13	95.19	Aa類	◎		
AS-027	5	75	35	15：7	25	95.15	Ad類	◎		柱穴の可能性は低い。
AS-030	4	28	10	7：2	6	95.0	Ad類	○		
AS-031	1	30	10	3：1	―	95.58	Bb類	×	沖施	
AS-032	4	40	27	40：27	13	95.42	Ca類	◎		
AS-033	5	43	48	43：48	14	95.25	Ac類	◎	青花・沖無・本磁	
AS-034	3	22	10	11：5	―	95.65	Cb類	×		
AS-035	5	35	45	7：9	18	95.29	Aa類	◎	沖施	
AS-036	5	48	55	48：55	15	95.19	Aa類	◎		
AS-037	5	67	30	67：30	30	95.43	Ad類	◎		かませ石あり。
AS-038	2	25	15	5：3	―	95.51	Bc類	×		
AS-039	5	53	48	53：48	―	95.2	Ac類	×		
AS-040	4	40	35	8：7	8	95.32	Ac類	◎		小さい柱痕が斜めに傾斜している。杭痕か？
AS-041	5	54	52	27：26	17	95.24	Ac類	◎		
AS-046	5	35	48	35：48	20	95.24	Ad類	◎	沖無	
AS-049	5	38	23	38：23	8	95.54	Ac類	◎		柱は抜かれずに放置された可能性あり。
AS-050	2	40	20	2：1	18	95.5	Ac類	○		礎石？
AS-051	3	40	35	8：7	20	95.3	Ad類	◎	青花・沖施	
AS-052	2	60	13	60：13	―	95.5	Bc類	×		
AS-054	6	45	32	45：32	8	95.4	Ac類	◎		
AS-064	3	40	37	40：37	18	95.27	Ad類	◎		AS-029に切られる。
AS-069	2	30	26	15：13	15	94.99	Ad類	◎		
AS-074	1	35	12	35：12	―	95.18	Bc類	×		
AS-075	4	30	35	6：7	14	95.33	Ac類	◎		AS-030に切られる。

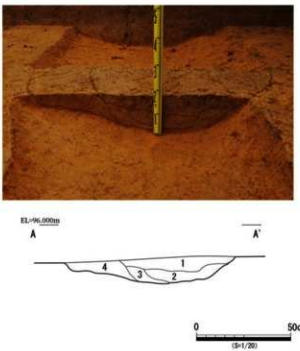




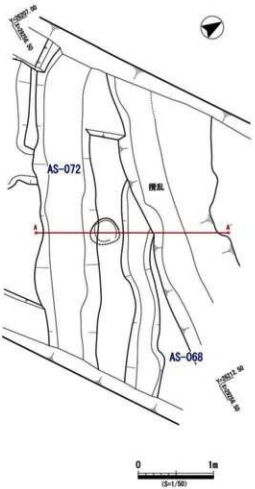
第Ⅲ－９図　A-1 区　個別遺構平面図・断面図 -3

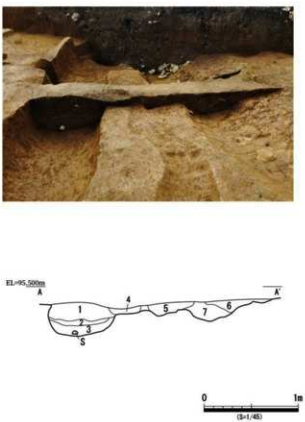
AS-058





AS-068・072





第Ⅲ-10図　A-1区　個別遺構平面図・断面図-4

第Ⅲ－４表　A 区 検出遺構一覧（SD・SK）

遺構名	地区名	堆積	法量（cm）			断面分類	平面形状	軸	出土遺物	備考
			検出	深さ	比率					
AS-001	A-2区	1	75	5	15：1	Cb	楕円形	西-東		SK
AS-002	A-2区	2	165	25	33：5	Cb	不定形	北-南	沖施・沖無・本磁・ガラス・プラスチック	SK
AS-011	A-1区	3	34	9	34：9	Bb	直線状	北西-南東	沖施・沖無・アカムヌー・陶質	SD
AS-012	A-1区	2	50	10	5：1	Cb	直線状	北西-南東	褐釉・本磁・沖施	SD
AS-013	A-1区	4	130	30	13：3	Cb	直線状	北西-南東	青花・沖施・沖無・アカムヌー・本磁・青銅品	SD
AS-014	A-1区	1	35	11	35：11	Cb	直線状	北-南		SD。AS-013に切られる。
AS-015	A-1区	1	50	32	50：32	Ac	隅丸方形	北-南	青花・沖施・本磁	SK
AS-018	A-1区	1	60	13	60：13	Bb	直線状	北西-南東	青花・沖施・沖無	SD
AS-020	A-1区	2	63	21	3：1	Cb	直線状	北西-南東	青花・青磁・沖施・沖無・アカムヌー・本磁・ガラス・鉄製品・歯ブラシ・獣骨・石材	SD。AS-068に切られる。
AS-022	A-1区	3	40	10	4：1	Bb	直線状	北西-南東	沖施・沖無・アカムヌー・鉄製品	SD
AS-029	A-1区	3	42	19	42：19	Ad	楕円形	西-東		SK
AS-048	A-1区	3	40	30	4：3	Ac	隅丸方形	西-東		SK
AS-058	A-1区	4	91	14	13：7	Bb	直線状	北西-南東	青花・青磁・沖無・本磁・鉄製品	SD
AS-060	A-1区	1	28	6	14：3	Bb	直線状	北西-南東		SD
AS-063	A-1区	2	53	13	53：13	Cb	楕円形	北西-南東		SK
AS-067	A-1区	1	30	10	3：1	Ab	不定形	北-南	沖施	SK
AS-068	A-1区	1	57	12	19：4	Cb	直線状	北西-南東	沖施・沖無	SD
AS-070	A-1区	1	50	12	25：6	Cb	円形状	北西-南東		SK
AS-071	A-1区	1	120以上	48	―	Bb	不定形	―	青花・沖施・沖無・アカムヌー・ガラス	SK。米軍の撹乱に切られる。
AS-072	A-1区	3	72	35	72：35	Cb	直線状	北西-南東	沖施・沖無・アカムヌー・本磁・ガラス	SD

着手前現況〔南西から〕

北西側拡張部設定状況〔南西から〕

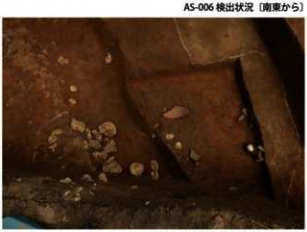
南西側拡張部設定状況〔南西から〕

AS-005 土層〔東から〕

図版Ⅲ－１　A-1 区 -1

AS-006 検出状況〔南東から〕

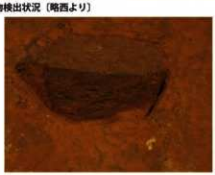
AS-011・012・013 検出状況〔東から〕



AS-071・072 遺物検出状況〔略西より〕

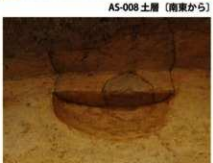
AS-071 検出状況（礫だまり）〔南東から〕

AS-008 土層〔南東から〕

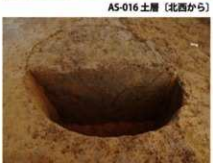


AS-016 土層〔北西から〕

AS-016 土層〔北西から〕



AS-017 土層〔南東から〕



AS-019〔西から〕

AS-024 土層〔西から〕

AS-026 土層〔北から〕

AS-027 土層〔北から〕

AS-029 土層〔北から〕

図版Ⅲ－２　A-1 区 -2

AS-030 土層〔北から〕

AS-031 土層〔北から〕

AS-032 土層〔北西から〕

AS-033 土層〔東から〕

AS-034　土層〔西から〕

AS-035　土層〔西から〕

AS-036　土層〔東から〕

AS-037 支え石検出状況〔略南から〕

AS-038 土層〔北西から〕

AS-039 完掘状況〔略南から〕

AS-040 土層〔北から〕

AS-041 土層〔南東から〕

AS-046 土層〔北から〕

AS-048 土層〔東から〕

AS-049 土層〔東から〕

図版Ⅲ－３　A-1 区 -3

AS-050 土層 礎石？〔東から〕

AS-050 発掘状況〔東から〕

AS-051 土層〔東から〕

AS-052 土層〔南東から〕

AS-054 土層〔南東から〕

AS-058 土層〔南東から〕

AS-060 土層〔南東から〕

AS-063 土層〔南東から〕

AS-064 遺物出土状況〔北から〕

AS-064 土層〔南から〕

AS-067 土層〔東から〕

AS-069 土層〔東から〕

AS-070　土層〔北東から〕

AS-074 土層〔西から〕

AS-075 土層〔西から〕

図版Ⅲ－４　A-1 区 -4

溝状遺構群・ピット群 検出状況〔東から〕

ピット群 完掘状況〔東から〕

東半部 遺構全景 検出状況〔南西から〕

東半部 遺構全景 検出状況〔北東から〕

西半部 全景 完掘状況〔南西から〕

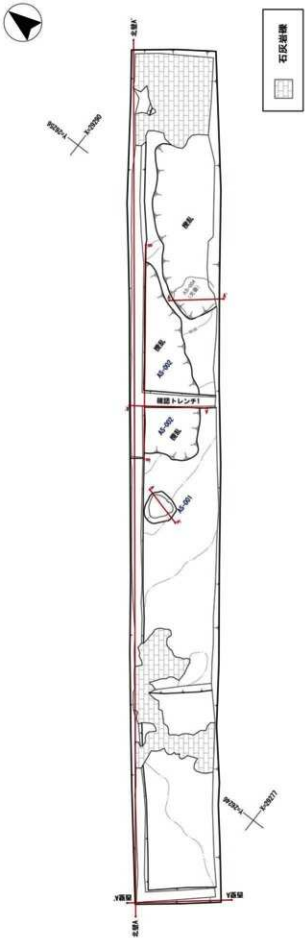
西半部 全景 完掘状況〔北東から〕

東半部 全景 完掘状況〔北東から〕

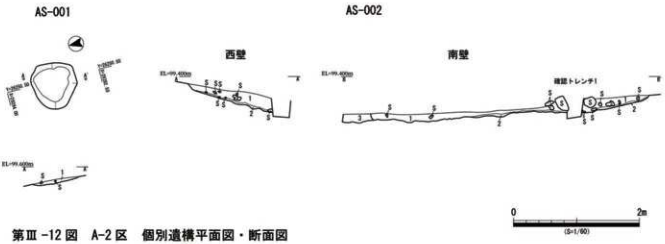
東半部 全景 完掘状況〔南西から〕

図版Ⅲ－５　A-1 区 -5

(2) A-2 区



第Ⅲ-11 図　A-2 区　遺構平面図



第Ⅲ-12図　A-2区　個別遺構平面図・断面図

着手前状況〔南西から〕

拡張部設定状況〔南西から〕

南西側拡張部設定状況〔北東から〕

西壁 土層〔北東から〕

遺構検出状況〔南西から〕

AS-001 検出状況〔略北〕

図版Ⅲ－6　A-2区-1

AS-001 土層〔北西から〕

AS-002 検出状況〔略北から〕

AS-002 西壁 堆積状況〔略東から〕

AS-002 南壁 土層 堆積状況〔北西から〕

AS-002 南壁 堆積状況〔略北西から〕

AS-002 完掘状況〔略北から〕

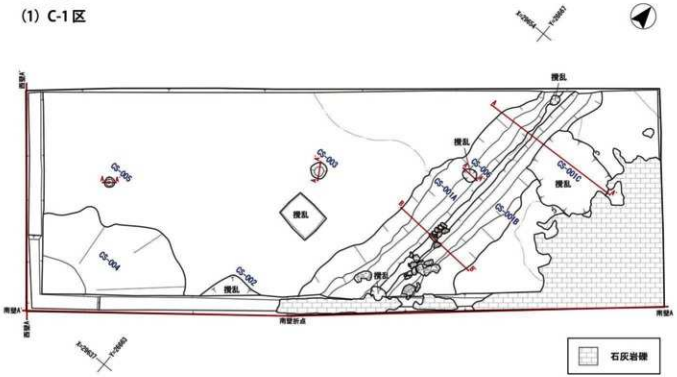
調査完了状況全景〔南西から〕

調査完了状況全景〔北東から〕

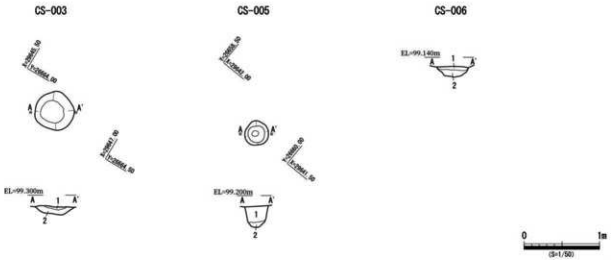
図版Ⅲ－７　A-2 区 -2

2．C区

(1) C-1区



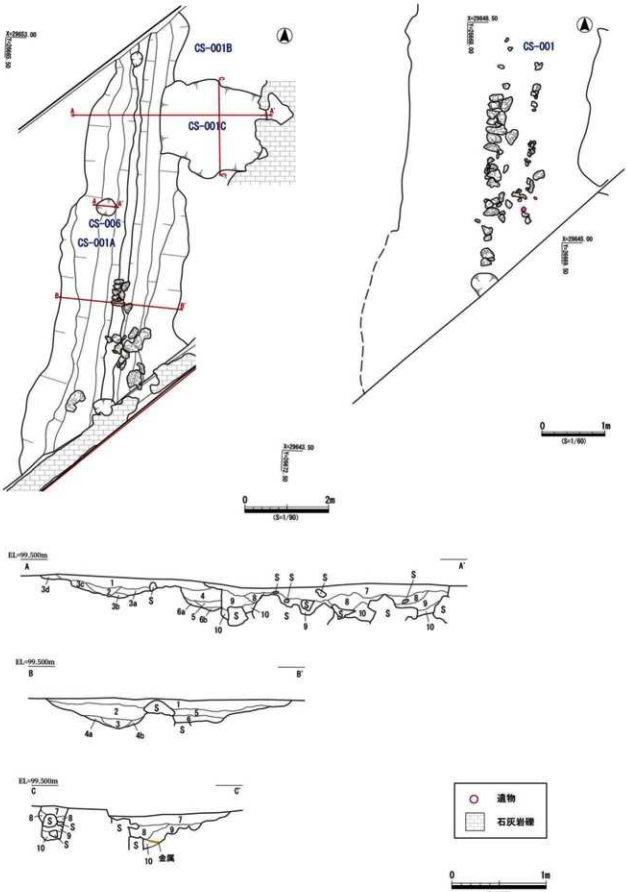
第Ⅲ-13図　C-1区　遺構平面図



第Ⅲ-14図　C-1区　個別遺構平面図・断面図・出土状況図-1

CS-001

CS-001出土状況図



第Ⅲ-15図　C-1区　個別遺構平面図・断面図・出土状況図-2

着手前現況〔南西から〕

全景 検出状況〔北東から〕

拡張部状況〔南西から〕

溝状遺構 検出状況〔南から〕

CS-001 石列〔南から〕

CS-001 ベルト 2〔南から〕

CS-001C 南北ベルト〔西から〕

CS-001AB・ピット群 検出状況〔南から〕

図版Ⅲ－８　C-1 区 -1

CS-001C 南北ベルト〔西から〕

CS-001 ベルト 1〔南から〕

CS-001 ベルト 1〔南から〕

CS-001 ベルト 1〔南から〕

CS-001 ベルト 1〔南から〕

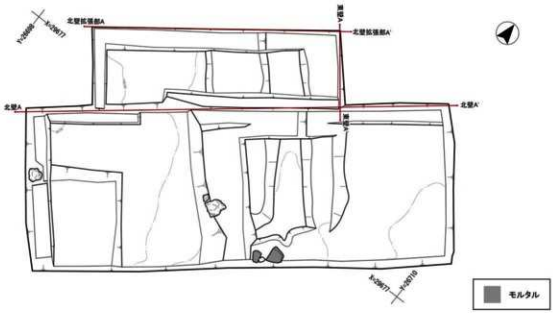
CS-001 完掘状況〔南から〕

CS-001 完掘状況〔北から〕

全景 完掘状況〔南西から〕

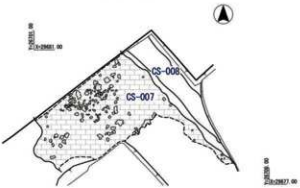
図版Ⅲ－９　C-1 区 -2

(2) C-2 区

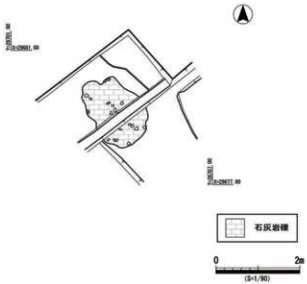


第Ⅲ-16 図　C-2 区　遺構平面図

CS-007 上面出土状況図



CS-007 下面出土状況図



第Ⅲ-17図　C-2区　出土状況図

第Ⅲ－５表　C区 検出遺構一覧（SD・SK）

遺構名	地区名	堆積	法量（cm）			断面分類	平面形状	軸	出土遺物	備考
			検出	深さ	比率					
CS-001A	C-1区	3	85	10	17：2	Cb	直線状	北-南	青花・沖縄・アカムヌー・本磁・獣骨	SD
CS-001B	C-1区	3	40	20	2：1	Cb	直線状	北-南	青花・沖縄・沖無	SD
CS-001C	C-1区	4	-	40	-	Cb	不定形	西-東	本磁・沖縄・沖無・アカムヌー・鉄製品・銅製品	米軍の撹乱。
CS-007	C-2区					Cb	不定形	北西-南東	外磁・本磁・沖縄・沖無・アカムヌー・貝類・鉄製品	米軍の撹乱に切られる。
CS-008	C-2区	2	130以上	28	-	Bb	直線状	北西-南東	本磁・沖縄・沖無・アカムヌー・鉄製品・貝類	SD。堆積は米軍の造成。

調査区設定状況〔北東から〕

拡張部設定状況〔略西から〕

CS-007・008 検出状況〔南東から〕

CS-007・008 検出状況〔南西から〕

図版Ⅲ-10　C-2区-1

CS-008 ベルト 土層〔南東から〕

CS-007(カクラン) 堆積状況〔南東から〕

東壁拡張部〔南西から〕

拡張北壁 堆積状況〔略南東から〕

北壁 堆積状況〔略南西から〕

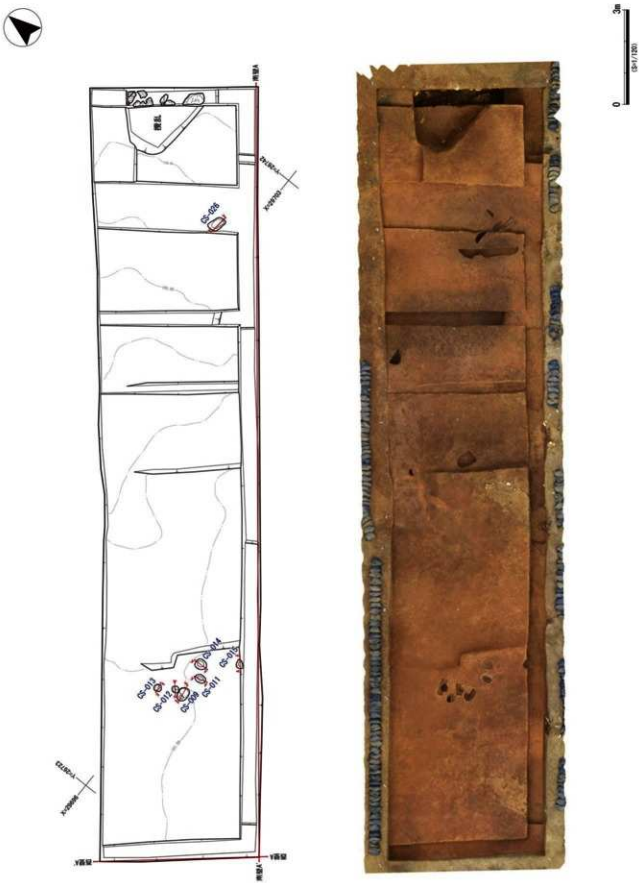
北壁 深掘りトレンチ 堆積状況〔略南東から〕

遺構検出状況〔略北東から〕

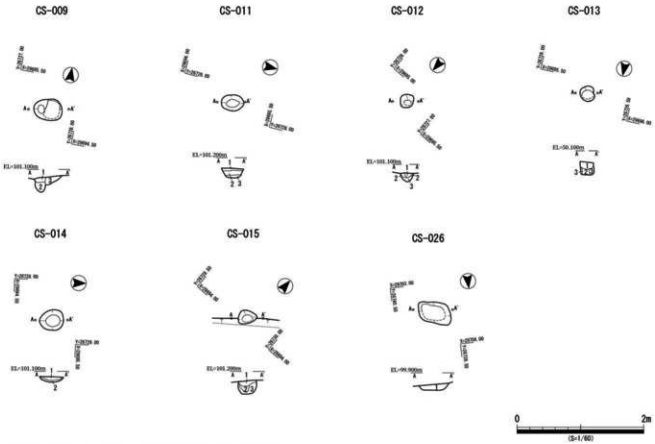
全景 完掘状況〔北東から〕

図版Ⅲ -11　C-2 区 -2

(3) C-3 区



第Ⅲ-18 図　C-3 区　遺構平面図



第Ⅲ -19 図　C-3 区　個別遺構平面図・断面図

第Ⅲ－６表　C 区 検出遺構一覧 (SP)

遺構名	地区名	堆積	法量（cm）			断面分類	柱穴の可能性	出土遺物	備考
			検出	深さ	比率				
CS-003	C-1区	2	45	10	9：2	Bb	×	鉄片	
CS-005	C-1区	2	18	26	9：13	Ba	×		
CS-006	C-1区	2	40	15	8：3	Bb	×		
CS-009	C-3区	3	44	22	2：1	Ad	×		2つの遺構の切り合いか。
CS-011	C-3区	3	30	15	2：1	Ac	×		
CS-012	C-3区	3	25	15	5：3	Bc	×		2つの遺構の切り合いか。
CS-013	C-3区	3	24	24	1：1	Ac	○		
CS-014	C-3区	2	35	10	7：2	Bb	×		
CS-015	C-3区	3	28	20	7：5	Bc	×		
CS-026	C-3区	1	44	10	22：5	Bb	×		

調査区設定状況〔南西から〕

全景 検出状況〔南西から〕

全景 検出状況〔南西から〕

東半部 遺構〔北東→北西から〕

東半部 遺構〔北東→北西から〕

東半部 遺構〔北東→北西から〕

CS-009 土層〔南西から〕

CS-011 土層〔北東から〕

図版Ⅲ-12　C-3 区-1

CS-012 土層〔北西から〕

CS-012 土層〔北から〕

CS-013 土層〔北から〕

CS-013 土層〔北から〕

CS-015 土層〔南東から〕

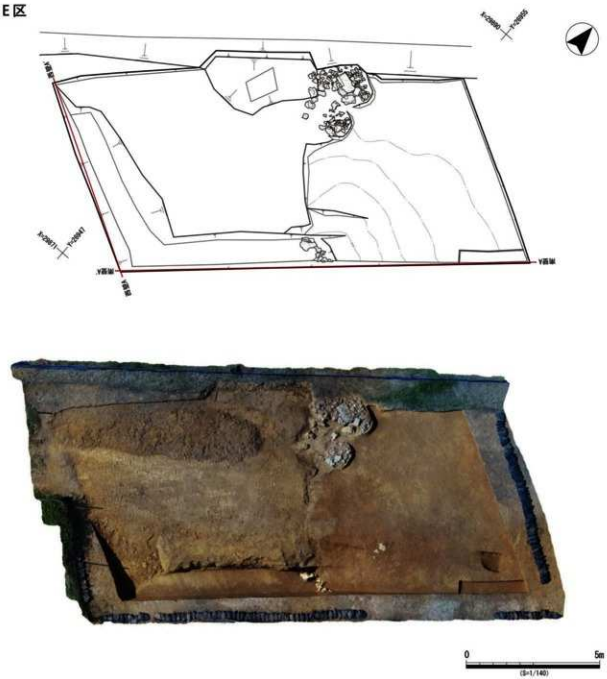
東壁 北から南へ連続撮影〔南東から〕

東壁 北から南へ連続撮影〔南東から〕

全景 完掘状況〔南西から〕

図版Ⅲ-13　C-3 区-2

3．E区



第Ⅲ-20図　E区　遺構平面図

第Ⅲ-21図　E区　遺物出土状況

調査区設定状況〔南西から〕

確認トレンチ〔西から〕

西壁 土層〔北東から〕

西壁 土層〔北東から〕

南壁 堆積状況〔略西から〕

切石等集積状況〔南東から〕

切石等集積状況〔南西から〕

E 区 全景 調査終了状況〔北東から〕

図版Ⅲ -14　E 区 -1

第 3 節　遺物

A~E 区の近世～近代の遺構からは総数 7576 点の遺物が出土した。A-1 区のみで全体の 9 割の遺物を占める。最も多く出土したのは、沖縄産施釉陶器で 2453 点、次にアカムヌーで 2133 点と沖縄産施釉陶器とアカムヌーで全体の半数を占める。遺物の出土傾向から近世をさかのぼるものではないとおもわれ、本土産磁器がアカムヌーの点数の約 1/4 から戦後以降の活動は薄いとおもわれる。以下にそれぞれの調査区の遺物について述べる。

A-1 区は計 6863 点が出土し先に述べたように、調査区全体の 9 割の遺物が出土している。出土量は沖縄産施釉陶器が 2281 点で最も多く、アカムヌーも 2072 点と 2000 点以上出土している。次いで沖縄産無釉陶器が 1376 点、本土産磁器が 360 点、中国産陶磁器が 176 点の出土があった。他の遺物としては円盤状製品、青銅製の簪、煙管、アルミのスプーン、セルロイド製の歯ブラシのほか獣骨・貝類等の自然遺物も出土している。遺物が出土している遺構では柱穴の AS-019 から沖縄産無釉陶器、AS-033 から青花・沖縄産無釉陶器、AS-035・AS-051 から沖縄産施釉陶器、AS-046 から沖縄産無釉陶器が出土している。柱穴以外の Pit では AS-031 から沖縄産施釉陶器が出土している。他に遺構では AS-012・013・015・020・022・058・067・068・072 から遺物が出土している。全てを記述はできないが、主なものとして AS-012 から中国産褐釉陶器、AS-013 から青花、AS-020 から青磁・青花、AS-058 から青花などが出土している。

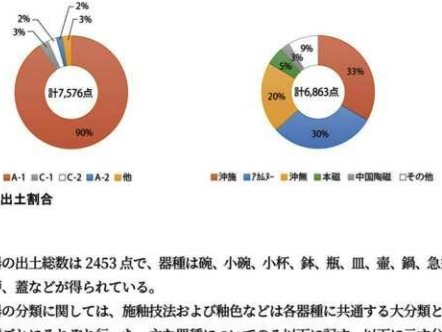
A-2 区は計 124 点で、A-1 区の隣接する調査区でありながら A-1 区の約 1 割の出土量である。もっと多く出土しているのは本土産磁器で 48 点、沖縄産施釉陶器が 29 点、沖縄産無釉陶器が 17 点出土している。アカムヌーの出土が少なく、本土産磁器が沖縄産施釉陶器の約 1.5 倍出土していることから、戦後のなんらかの活動が窺える。遺物が出土している遺構では、AS-002 から沖縄産とその他に本土産磁器、ランプ笠片、プラスチック製品が出土している。

C-1 区は計 197 点で A-1 区の約 3 割の出土量ではあるものの、全体としては A -1 区に次いでの出土量となっている。主な出土遺物は沖縄産施釉陶器が 85 点、次いで沖縄産無釉陶器が 79 点、アカムヌー 29 点、本土産磁器 22 点となっている。他には青花、中国産褐釉陶器、円盤状製品、薬品瓶等が出土している。遺物が出土した遺構は CS-001 で、沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・アカムヌー・本土産磁器が出土している。

C-2 区で確認された遺物は 196 点であった。本土産磁器が 36 点ともっとも多く、次いで沖縄産施釉陶器が 32 点、沖縄産無釉陶器 21 点、アカムヌー 19 点となる。その他の遺物では南ベトナムの 1 ドン銭貨やボタン等が出土している。C-2 区では、本土産磁器が最も出土が多いことやプラスチック製品、ガラス製品などから基地接収後も活動があったとおもわれるが南ベトナム銭貨、金属製の蓋、プラスチック製品等の出土から米軍の活動の可能性も考えられる。

C-3 区の遺物点数は 20 点で、B 区に次いで出土量が少ない調査区である。主な内訳はアカムヌーが 7 点、沖縄産施釉陶器が 6 点と 10 点以下で、沖縄産無釉陶器・本土産磁器がともに 2 点の出土量と少なさである。他の遺物としてはホオジロザメとおもわれるサメ歯が出土しているが、加工痕はなく古い時期の遺物とは考えられない。

E 区は計 25 点で、遺物別では沖縄産施釉陶器が 10 点ともっとも多い出土ではあるが、他は 5 点以下の出土量である。欠損はしているが、ワンプーと称される大型の鉢がほぼ一固体出土した。



第Ⅲ -22 図　遺物出土割合

沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器の出土総数は 2453 点で、器種は碗、小碗、小杯、鉢、瓶、皿、壷、鍋、急須、酒器、徳利、火炉、火入、香炉、蓋などが得られている。

沖縄産施釉陶器の分類に関しては、施釉技法および釉色などは各器種に共通する大分類として扱い、細分類については器種ごとにそれぞれ行った。主な器種についてのみ以下に記す。以下に示す分類基準は『大山前門原第一遺跡』(2012 年) を基本としている。

施釉技法

Ⅰ類：灰釉（イ）・鉄釉（ロ）・黒釉（ハ）を単掛けするもの

Ⅱ類：内外面の釉薬を掛け分けるもので、①内面の白化粧がなされないものと、②内面の白化粧後に透明釉を掛けるものがある。

Ⅲ類：器面に白化粧し、透明釉を掛けるもの。

碗

碗の出土総数は 535 点で、これらの資料には口縁部がＡ直口するもの、Ｂ外反するものがあり、胴部が張らないもの（ａ）と張るもの（ｂ）がある。

小碗

小碗の出土総数は 238 点で、小碗Ⅰ・Ⅱ類の細分類は碗の分類に準じており、口縁形態のＡ直口するもの、Ｂ外反するものがある。小碗Ⅲ類の細分類も碗の分類に準じ、口縁形態に加え、器面の①面取りなし、②面取りありがある。

皿

皿の出土総数は 18 点で、大分類はⅠ類とⅢ類が得られている。口縁形態からＡ直口するものとＢ外反するものがある。

鉢

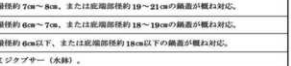
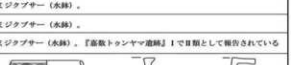
鉢の出土総数は 35 点で、Ⅰ類とⅡ類がある。『大山前門原第一遺跡』(2012 年) では口縁形態をＡ逆Ｌ字、Ｂ外反するもの、Ｃ波形のもの、Ｄ玉縁口縁の４つに分類されるが、今回の調査ではＡ逆Ｌ字のみがみられた。

その他の器種はⅠ～Ⅲ類がみられるものが香炉で、Ⅰ類・Ⅲ類がみられるのは瓶・急須・酒器・火炉・火入・蓋である。Ⅰ類のみがみられるのは壷・鍋・徳利で、Ⅲ類のみみられるのは小杯である。

第Ⅲ－７表　沖縄産無釉陶器分類一覧（宜野湾市教育委員会編 2009）

器種	分類					備考
	記号			基準		
壺	Ⅰ類			口縁断面が逆L字状を呈す長頸のもの。	大 口径 20 cm前後 中 口径 12 cm前後 口径 9 cm前後 小 口径 6 cm前後	 Ⅰ類　Ⅲ類
	Ⅱ類	a	1	有頸で口縁断面玉縁状を呈し、直状に立ち上がるもの。	大 口径 21 cm前後 小 口径 15 cm前後	
			2	有頸で口縁断面玉縁状を呈し、外反するもの。	大 口径 17 cm前後 小 口径 13 cm前後	
		b	…	無頸で口縁断面玉縁状を呈するもの。	大 口径 16 cm前後 小 口径 12 cm前後	Ⅱa1 類　Ⅱa2 類　Ⅱb類
	Ⅲ類			口縁断面が逆L字状を呈する短頸あるいは無頸のもの。		
	Ⅳ類			口縁が幾かに肥厚し（あるいは無肥厚）、外反するもの。口径は概ね10 cm以内。	大 口径7 cm前後 小 口径4 cm前後	
甕	Ⅰ類			口縁が断面三角状を呈し、口縁部からすぐに胴部へと移行するもの。		
	Ⅱ類			口縁断面が逆L字状で、口縁上面の幅が広いもの。		
	Ⅲ類			口縁断面が方形状に肥厚するもの。	大 口径32 ～ 35 cm 中 口径 26 ～30 cm 小 口径21 ～25 cm	
擂鉢	Ⅰ類	a		口縁断面が「く」の字状で、口縁直下に櫛が施されるもののうち、口縁がやや内状に角度を変えて立ち上がるもの。		 Ⅰa類　Ⅰb類　Ⅱ類　Ⅲ類　Ⅳ類
		b		口縁断面が「く」の字状で、口縁直下に櫛が施されるもののうち、口縁が外傾するもの。		
	Ⅱ類			Ⅰ類に比して、口縁断面が緩やかに「く」の字状をなすもの。		
	Ⅲ類			口縁断面が逆L字状で口唇の幅が狭いもの。櫛目の上端ラインが一様で整然と施される。		
	Ⅳ類			口縁断面が逆L字状で口唇の幅が広いもの。口唇部に圏線が廻る。		『高敷トゥンヤマ遺跡』Ⅰの擂鉢Ⅲ類。
鉢	Ⅰ類	a		口縁部が内弯し、外面に隆起き の波状線を描くも。		ミジクブサー（水鉢）。
		b		口縁部が内弯するもので、無文のもの。		ミジクブサー（水鉢）。
	Ⅱ類	a		口縁部が内弯し、断面部が玉縁状を呈するもの で無文のもの。		ミジクブサー（水鉢）。
		b		口縁部が内弯し、断面部が玉縁状を呈するもので無文のもの。		ミジクブサー（水鉢）。
	Ⅲ類			口縁断面が逆 L 字状を呈すもの。		
	Ⅳ類			口唇を平坦に成形し、口縁両端が張り出すもの。		『高敷トゥンヤマ遺跡』Ⅰの壺Ⅳ類。
	Ⅴ類			水鉢同様に、口縁が底部から開いて立ち上がるが、口縁は内弯しないもの。大型の浅鉢。		

第Ⅲ－８表　アカムヌー分類一覧（宜野湾市教育委員会編 2009）

器種	分類					備考
	属性	記号			基準	
鍋	蓋受け	Ⅰ類			滑り止めがないもの。	 鍋Ⅰ類　鍋Ⅱa類　鍋Ⅱb類
		Ⅱ類	a		蓋受け部をヨコナデによって強ませることで、滑り止めを作るもの。	
			b		蓋受け端部を成形することによって、ツメ（滑り止め）を作り出すもの。	
	大きさ	大			口径26cm以上のもの	鍋径約 9cm以上、または底端部径約 23cm以上の鍋蓋が概ね対応。
		中	大		口径 24 ～ 25cmのもの。	鍋径約 8cm ～ 9cm、または底端部径約 21 ～ 23cmの鍋蓋が概ね対応。
			中		口径 21 ～ 23cmのもの。	鍋径約 7cm ～ 8cm、または底端部径約 19 ～ 21cmの鍋蓋が概ね対応。
			小		口径 19 ～ 20cmのもの。	鍋径約 6cm ～ 7cm、または底端部径約 18 ～ 19cmの鍋蓋が概ね対応。
		小			口径 18cm以下のもの。	鍋径約 6cm以下、または底端部径約 18cm以下の鍋蓋が概ね対応。
鉢	口縁部	Ⅰ類	a		口縁部が内弯し、外面に隆起き の波状線を描くも。	ミジクブサー（水鉢）。
			b		口縁部が内弯するもので、無文のもの。	ミジクブサー（水鉢）。
		Ⅱ類			内弯口縁で、口唇が平坦のもの。	ミジクブサー（水鉢）。『高敷トゥンヤマ遺跡』Ⅰ で Ⅲ類として報告されている
		Ⅲ類			口縁断面が逆L字状を呈するもの。	 鉢Ⅰ類　鉢Ⅱ類　鉢Ⅲ類
急須	胴部	Ⅰ類			無頸のもの。	
		Ⅱ類			有頸のもの。	
	口縁	a類			蓋受けを作らないもの。	 急須Ⅰa類　急須Ⅱa類(長頸)　急須Ⅱa類(短頸)　急須Ⅱb類
		b類			蓋受けをつくるもの。	
火ﾋﾞ	器形	Ⅰ類			器形球状で、胴部中央から口縁～大きく内傾するもの。	 火ﾋﾞⅠ類　火ﾋﾞⅡa類　火ﾋﾞⅡb類
		Ⅱ類	a		胴部から「く」の字状に折れて口縁が内傾するもの。	
			b		胴部から「く」の字状に折れて口縁が内傾するもので、口縁に突帯が廻るもの。	
			c		胴部上段で「く」の字状に折れて口縁が直状に立上るもの。	 火ﾋﾞⅡc類　火ﾋﾞⅢ類　火ﾋﾞⅣ類　火ﾋﾞⅤ類
		Ⅲ類			円筒状の器形を呈するもの。	
		Ⅳ類			浅鉢状になるもの。	
		Ⅴ類			上面観が瓦線形を呈し、大型のもの。	

第Ⅲ－９表　A-1 区 出土遺物観察表 -1

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm）		観察事項	出土地点
第Ⅲ・23図・図版Ⅲ・15	1	青磁	碗	胴部～底部	口径 器高 底径	— 4.25 4.30	全面施釉後、畳付けを釉剥ぎし見込みを蛇の目釉剥ぎする外面に線描きによる施文。外面にナデ痕が残る。焼成が悪い粗製品。	AS-058
	2	青磁	盤	底部	口径 器高 底径	— 1.7 —	内面に櫛描蓮弁文、見込みに印花文。外底部を釉剥ぎするとおもわれる。	AS-005の カクラン
	3	青磁	盤	底部	口径 器高 底径	— 2.1 11.2	内面は施釉し、釉垂はみられるので外面も施釉しているとおもわれるが、残存している底部から高台外面は無釉。	AS-006
	4	青花	碗 Ⅶ類	胴部～底部	口径 器高 底径	— 6.2 6.8	胴部が大きく張り出す。内面は2条の圏線と廣手文を施す。外面は丸文と草花文、1条の圏線、高台外面に2条の圏線、外面底部に2条の圏線と字款？を施す。福建・広東系。	表土 北壁
	5	青花	碗	口縁部	口径 器高 底径	— 2.75 —	口縁端部が外反する。呉須による施文で外面に圏線と菊唐草文、内面に圏線を施す。外面の圏線の呉須が薄い。外面にナデ痕がわずかに残る。	表土
	6	青花	碗	口縁部	口径 器高 底径	— 3.35 —	口縁が直口。文様は呉須で、外面は1条の圏線と団花文、内面に2条の圏線を施す。内面の圏線は細いが確かしっかりしている。	北壁
	7	青花	小碗	胴部～底部	口径 器高 底径	— 4.0 1.8	厚い底部から腰折れする胴部とおもわれるが、屈曲は弱い。見込みを蛇の目釉剥ぎする。呉須で施文する。	旧表土
	8	青花	皿	口縁～底部	口径 器高 底径	14.4 3.6 8.4	太めの胴部に細めの高台が付く。口唇は丸味を持つ。外面は胴部に文様、腰部に圏線、高台に２条の圏線、外底部に圏線が確認できる。内面は文様と圏線が確認できる。	カクラン
	9	本土産磁器	碗	口縁～底部	口径 器高 底径	13.0 6.0 5.0	大きめの低い高台で、口縁が外反する。胴部下半は型成形による剣頭文、胴部上半に色絵で笹・梅花・松葉文と圏線を施すが、色が剥落している。全面施釉後、畳付けを釉剥ぎする。	旧表土
	10	本土産磁器	碗	口縁～底部	口径 器高 底径	13.4 6.3 4.6	型紙刷りによる文様で、外反の砥部産碗。全面施釉後に、畳付けを釉剥ぎする。見込みに五足のハマ痕が残る。外面は点描地で菱形窓に菊花文、腰に三角文を施す。内面は口縁に点描三角と梅花帯、見込みに松竹梅を施す。	旧表土
	11	本土産磁器	小碗	口縁～底部	口径 器高 底径	8.0 4.6 4.0	銅版転写の直口の小碗。瀬戸・美濃系。全面施釉後に畳付けを釉剥ぎする。外面に山水文、腰に2条の圏線、高台に圏線を施す。胴部に銘があるが破損しているため不明。	旧表土
	12	本土産磁器	小碗	口縁～底部	口径 器高 底径	9.0 5.0 4.2	低い高台に長めの胴部で、口縁が外反する。全面施釉後、内面口唇と畳付けを釉剥ぎするが、畳付けは部分的に釉が残る。	遺構検出
	13	本土産磁器	皿	口縁～底部	口径 器高 底径	11.2 1.83 6.4	銅版転写。瀬戸・美濃系。やや内湾気味の直口口縁で、胴部にちょこんとした高台が付く。全面施釉後、畳付けを釉剥ぎする。内面に点描地に桜花文を施す。口銹。	北壁トレンチ
	14	本土産磁器	鬢盥	口縁～底部	口径 器高 底径	— 4.5 —	楕円形のベタ底の底部に直線的にのびる胴部で、口縁が内湾して端部を平らに成形する。全面施釉後、底部を釉剥ぎする。色絵で草花文を施文する。	表土 旧耕作土
第Ⅲ図・図版Ⅲ・24 16図	15	沖縄産施釉陶器	碗 Ⅰ類イＡａ	口縁～底部	口径 器高 底径	13.8 6.9 7.4	低い高台に段をつけて胴部が付く。やや外側に開く胴部で直口縁の口唇は丸味を持つ。フィガキー（浸し掛け）で灰釉を胴部に施し、高台まではおよばない。見込みや畳付けに重ね焼の痕跡はあられない。生焼けで厚誠している箇所がみられる。	旧表土

第Ⅲ-10表　A-1区 出土遺物観察表-2

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm）			観察事項	出土地点
第Ⅲ-24図・図版Ⅲ-16	16	沖縄産施釉陶器	碗 Ⅰ類イAa	口縁～底部	口径 器高 底径	12.8 6.5 6.0		口縁直口で腰は張らず直線的な胴部にしっかりした高台が付く。外面底部はヘラケズリ調整で、真ん中がやや盛り上がる。フィガキー（浸し掛け）で胴部まで灰釉を施す。見込にアルミナ痕が明瞭に残る。焼成は良好で硬い。	AS-071
	17	沖縄産施釉陶器	碗 Ⅱ類ロ②b	胴部～底部	口径 器高 底径	— 3.75 6.8		真っ直ぐのびる高台にやや段をつけて腰が張る胴部。外面は鉄釉を施し、底部までおよぶ。畳付けは釉剥ぎし、アルミナが付着する。内面は白化粧を施し、透明釉を施文する。見込みは蛇の目釉剥ぎで、透明釉のみ釉剥ぎする。アルミナ痕が残る。	旧耕作土
	18	沖縄産施釉陶器	碗 Ⅲ類Bb有	口縁～底部	口径 器高 底径	13.4 6.6 5.6		口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯びて立ち上がる胴部に太めの高台が付く。全面に白化粧後、透明釉を掛ける。畳付けを釉剥ぎする。そこにアルミナがべったりと付着する。見込みは透明釉のみを蛇の目釉剥ぎする。見込みにもアルミナが付着する。外面には点花文を3ヶ所に施す。	耕作土
	20	沖縄産施釉陶器	鉢 Ⅰ類ロ	胴部～底部	口径 器高 底径	— 7.7 8.4		丸味をおびる胴部に太めの高台が付く。内面から胴部外面に鉄釉を施釉する。高台内面にも鉄釉がかられるが、施釉か露胎かは不明。畳付けにアルミナが付着する。焼成はやや不良。	旧表土
	22	沖縄産施釉陶器	皿 Ⅰ類イB有	口縁～底部	口径 器高 底径	19.5 5.8 9.0		口縁が外反し、なだらかな胴部にしっかりした高台が付く。ヘラケズリ調整で、胴部と高台、高台と外面底部との間に段がつく。フィガキー（浸し掛け）で胴部まで灰釉を掛ける。見込み、畳付けにアルミナはみられない。内面の口縁と胴部下半に鉄釉で圏線を廻す。内面中央にも鉄釉で丸文を施すが、他は不明。焼成は良好で硬い。	旧耕作土
	21	沖縄産施釉陶器	皿 Ⅲ類B有	口縁～底部	口径 器高 底径	18.4 5.1 8.4		口縁が外反し、やや ふくらむ胴部に太めの高台が付く。全面を白化粧後、透明釉掛ける。畳付けは釉剥ぎ後に、アルミナを塗る。見込みは透明釉のみを蛇の目釉剥ぎする。見込みにアルミナがきれいに残存する。内面中央部に兵須で円文、その周りに2条の圏線を施す。見込みの外側に2条の圏線、口唇にも圏線を廻す。胴部内面にも文様を施すが、意匠は不明。	重機掘削中
	23	沖縄産施釉陶器	瓶 Ⅰ類ロ	胴部～底部	口径 器高 底径	— 4.3 6.2		斜めに立ち上がる胴部に成形がしっかりした底部がつく。胴部内面にナデ調整が残る。胴部外面に鉄釉を掛け、高台に露胎する。外面底部にも鉄釉を施す。畳付けにアルミナが付着する。焼成は良好。	耕作土a
	24	沖縄産施釉陶器	香炉 Ⅱ類ロ②	口縁～胴部	口径 器高 底径	10.6 5.3 —		小型の香炉。口縁は逆L字で、頸部は直立し、胴部は強く張る。内面は白化粧で、外面は鉄釉を施す。外面はさらに濃い緑釉を重ね施す。	表土
	25	沖縄産施釉陶器	酒 Ⅰ類ロ	口縁～胴部	口径 器高 底径	2.3 5.9 —		玉縁の口縁にやや長めの頸部で丸味のある胴部がつくとおもわれる。外面に鉄釉を掛け、頸部内面に露胎する。内面につよいナデ痕が残る。焼成は良好。	旧表土
	26	沖縄産施釉陶器	蓋 Ⅲ類	体部～笠部	口径 器高 底径	4.8 1.4 —		急須の蓋。水平の笠に長めのかえりがつく。撚みは欠損していて、不明。丁寧な成形で、全体に白化粧を施し上面に緑釉を掛ける。笠に圏線を入れるが、施釉で不明瞭。	旧耕作土
	27	沖縄産施釉陶器	火入 Ⅰ類ロ	胴部～底部	口径 器高 底径	— 8.6 11.2		ドラム缶状の胴部に高台がつくが、欠損のため高台の形状は不明。外面は幅約20cmの強いナデにより両側を隆起させる。隆起した部分に圏線を廻す。内面はナデ調整さ明瞭に残り、内底面をヘラケズリする。胴部外面に鉄釉を掛け、高台まではおよばないとおもわれる。	AS-020
第Ⅲ-25図・図版Ⅲ-17	28	沖縄産施釉陶器	火入 Ⅲ類	胴部～底部	口径 器高 底径	— 4.7 —		胴部外面は白化粧し、透明釉を掛ける。高台から外底面、胴部内面は白化粧を施す。胴部と高台の間は釉剥ぎされ、器面を露出する。	表土

第Ⅲ-11表　A-1区 出土遺物観察表-3

神図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm）		観察事項	出土地点
第Ⅲ-25図・図版Ⅲ-17	29	沖縄産施釉陶器	鍋 Ⅰ類ロ	口縁～胴部	口径 器高 底径	17.2 6.45 —	口縁は胴部から「く」の字に屈曲しやや内湾する。口縁の外側にヒモ状の取っ手を貼り付ける。胴部は丸く張り出し、内面のナデ調整が明瞭に残る。胴部外面から内面にかけて鉄釉を掛ける。口縁内側は丁寧に触剥ぎする。	AS-013
	30	沖縄産施釉陶器	壺 Ⅰ類イ	口縁～胴部	口径 器高 底径	12.8 6.0 —	小型の壺。逆L字状の口縁で、短い頸部から丸味をおびる胴部。外面頸部から肩部にかけてのナデ調整は外は不明瞭。外面から内面にかけて鉄釉を掛ける。雑な施釉で薄い部分がみられる。	AS-005のカクラン
	31	沖縄産無釉陶器	壺 Ⅰ類	口縁～胴部	口径 器高 底径	16.9 8.8 —	逆L字状の口縁で頸部からなだらかに胴部が張る。頸部と胴部の境に3？条の凹線を廻す。内外面をナデ調整するが不明瞭。	AS-071
	32	沖縄産無釉陶器	壺	胴部	口径 器高 底径	— 20.4 —	太い頸部からあまり張らない胴部。頸部から胴部に横棒が弓なりに長い漢字の十と一の窯印をヘラ描きで入れる。窯印の下に圏線を2条廻す。内面はナデ調整が明瞭に残る。破断面に巻貝痕がみられる。	旧耕作土
	33	沖縄産無釉陶器	甕 Ⅲ類	口縁～頸部	口径 器高 底径	32.7 9.4 —	断面縦長の方形状に肥厚した口縁から太めの頸部がのびる。方形状の口縁の下半に2条の圏線、頸部に5条の圏線を廻す。内面はナデ調整が残る。	重機掘削中
	34	沖縄産無釉陶器	鉢 Ⅱａ類	口縁部	口径 器高 底径	— 3.35 —	丸味をおびる太めの胴部から内湾した口縁を玉縁状にして端が外面に突出する。口唇部はナデ調整により丸味を持つ。胴部は欠損しているが、外面にクシ描き波状文が確認できる。内面はナデ調整が残る。	旧耕作土
	35	沖縄産無釉陶器	鉢 Ⅲ類	口縁～胴部	口径 器高 底径	57.4 11.6 —	大型の鉢。やや斜めに立ち上がる胴部から逆L字状にのびて丸状を呈する口縁。口唇部に圏線が1条廻る。内面の口屈曲部に突帯を貼り付ける。突帯上にナデ調整による凹線文状のくぼみが廻る。外面頸部にナデ調整により段をつける。胴部にクシ描き波状文＋3条の沈線文を施すが不明瞭。内外面ともにナデ調整で不明瞭だが、内外面の頸部部分のナデ調整は明瞭。	旧耕作土
第Ⅲ-26図・図版Ⅲ-18	36	沖縄産無釉陶器	鉢 Ⅳ類	口縁～胴部	口径 器高 底径	— 9.25 —	やや直線状の胴部から口唇を平坦に成形し、口縁両端が張り出す口縁。口唇部に凹線が1条廻る。口縁部に2条の凹線と少し間を空けて貼り付け突帯が1条廻る。内外面をナデ調整で、内面は外面に比べて調整がやや明瞭に残る。	AS-005 検出面
	37	沖縄産無釉陶器	鉢 Ⅳ類	口縁～胴部	口径 器高 底径	— 6.9 —	直線状の胴部から口唇を内外に肥厚し、口縁断面がラッパ状を呈する。口唇部を強いナデによりわずかにへこむ。口縁に2条の沈線と6条のクシ描き波状文と突帯が1条廻る。内外面にナデ調整で、内面は明瞭に残る。	AS-020
	38	沖縄産無釉陶器	擂鉢 Ⅰａ類	口縁～胴部	口径 器高 底径	— 4.6 —	斜めにのびる胴部から口縁が底状に立ち上がる。口唇は平坦で、口縁は丸味をもって、屈曲する。この下位はヨコナデによって凹線を施すため、屈曲部との間に突帯状の稜線が成形される。口縁の一部をへこませて片口を造る。内面屈曲部から擂目が施されているがナデ調整により消されている。内外面にナデ調整。	重機掘削中
	39	沖縄産無釉陶器	擂鉢 Ⅳ類	口縁～胴部	口径 器高 底径	— 7.4 —	やや斜めに立ち上がる胴部から逆L字状にのびる口縁で、口唇部に2条の沈線が廻る。ナデ調整により口端が下に突出する。また、内面の口縁屈曲部もナデ調整により突帯状に張り出す。内面の突帯状部から擂目を施すがナデ調整により消され、突帯下約22mmから擂目がみられる。内外面をナデ調整。	AS-005 検出面
	40	沖縄産無釉陶器	擂鉢	胴部～底部	口径 器高 底径	— 3.9 12.0	外側にひらく器形で、ベタ底の底部。ヘラケズリの調整で、底部を平坦にする。外面はナデ調整と底部付近をヘラケズリ調整をする。内面に幅狭の9目の擂目で密に施される。	耕作土ａ
	41	沖縄産無釉陶器	火入	口縁～底部	口径 器高 底径	11.0 7.0 6.0	やや上げ底の底部から斜めに立ち上がり屈曲して直状にのびる胴部。口唇は内傾して、ナデ調整により内側にわずかに突出する。内外面をナデ調整で、底部は無調整。底部付近の外面はヘラケズリを行う。全体的に焼成は良好だが、一部生焼けがみられる。	AS-018

第Ⅲ-12表　A-1区 出土遺物観察表-4

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm）		観察事項	出土地点
第Ⅲ・26図・図版Ⅲ・18	42	沖縄産無釉陶器	火炉	口縁部	口径 器高 底径	18.4 2.6 —	内傾にのびて、口唇部はナデ調整によりわずかにへこむ。また、内面のナデ調整により口唇部の内側にやや張り出す。口縁部に2孔確認でき、共に外側から内側に穿孔される。内外面をナデ調整。アカムヌーの火炉Ⅱａ類に相当する器形。	重機掘削中
	43	沖縄産無釉陶器	火炉	口縁部	口径 器高 底径	— 2.4 —	やや内傾した胴部からわずかに両端を突出させた口縁で口唇部がやや内傾する。外面の突出下部分に刻み目を施すが、摩滅のため不明瞭。刻み目の下位に突帯が2条廻る。外面にナデ調整で、内面は強いナデにより弱い段がつく。内アカムヌー火炉Ⅱｂ類に相当する器形を呈する。口唇部から内面にかけてスス付着。	北壁
	44	沖縄産無釉陶器	碗	口縁部	口径 器高 底径	12.6 1.8 —	ややひらく胴部から、口唇が丸味をもつ。碗とおもわれるが、破片のため全体像は不明。焼成は良好。	重機掘削中
	45	アカムヌー	鍋蓋	撮み～体部	撮径 器高 口径	6.2 2.05 —	回転ヘラ成形とナデ調整。撮付けの雑な調整と高台から横にのびる胴部から蓋の可能性はあるが、内底面の雑な調整から蓋とした。撮みの内側はヘラケズりにより低い円錐状になる。内外面にススス付着。焼成は良好。	北壁
	46	アカムヌー	火炉？	胴部～底部	口径 器高 底径	— 3.1 9.6	方形状のしっかりした高台からひらく胴部で、底部の厚さは薄め。外面の調整により胴部と高台の境に突帯状の稜線を成形する。内外面をナデ調整、高台から外底面をヘラケズりをおこなう。焼成はやや不良。	重機掘削中
	47	アカムヌー	鍋 Ⅰ類	口縁部	口径 器高 底径	— 2.5 —	胴部からくの字状に屈曲する厚めの口縁で、内面のナデ調整により断面が舌状を呈する。把手はやや下向きで口縁につけられる。内外面、ナデ調整。内外面にススス付着。	表土
	48	アカムヌー	鉢 Ⅰａ類	口縁部	口径 器高 底径	— 2.5 —	内湾する口縁で、外面がやや肥厚し断面が舌状を呈する。口縁に5条のクシ描波状文を施し、波状文の上部をけずりように圏線を廻す。内外面をナデ調整。	礎だまり
	49	アカムヌー	火炉	胴部～底部	口径 器高 底径	— 5.45 14.7	隅丸台形状の高台から丸味をおびる胴部。内外面をナデ調整で、内底面は強いナデにより、弱い段がつく。高台から底面はヘラケズり。焼成は不良で、器面が摩滅している。ススス付着。	AS-013
	50	アカムヌー	火炉 Ⅴ類	口縁部	長軸 短軸 厚さ	7.8 5.2 2.0～1.2	上面観が馬蹄形の火炉で、方形状の部位。胴部から逆L字に屈曲して厚めの口縁がのびる。全体的にナデ調整で、上面と端を丁寧な調整を行う。口唇から内面にかけてススが付着する。焼成は良好。	礎だまり
第Ⅲ・27図・図版Ⅲ・19	51	アカムヌー	火炉 Ⅴ類	胴部～底部	長軸 器高 厚さ	7.4 7.5 0.7～2.2	馬蹄形の火炉で、方形状の部位とおもわれるが、口縁が逆L字状にのびず、上方で閉じる。方形状の胴部に縦に潰したような幾頭形の高台が付く。撮付けはユビナデで簡単な調整をおこなう。胴部は板ナデやナデ調整をおこない、胴部外面は丁寧な調整がみられる。外面、高台周辺にススス付着。	耕作土
	52	陶質土器	植木鉢	口縁～底部	口径 器高 底径	12.85 10.5 7.8	小型の植木鉢。やや上方に開く胴部に、幅広の肥厚した口縁。胴部と底部に境はなく、底部中央に約2cmの穿孔で、撮付け3ヶ所にえぐりを入れる。内面はヨコナデ調整で、口縁から胴部にかけて4つほどの単位がみられる。内底面に径3cmのケズりがみられるが、中途でやめたとおもわれる。	旧表土
	53	瓦質土器	火炉	口縁部	口径 器高 底径	14.5 2.3 —	胴部からくの字状に外反した短い口縁で、外面が玉縁状に肥厚し、内面がやや内湾する。内面頸部に上をむく受け口がつくとおもわれる。外面頸部の下に穿孔が一つ確認できる。内外面をヨコナデ調整する。受け部はナデで、接合部をけす。焼成はやや不良。	確認トレンチ2

第Ⅲ-13表　A-1区 出土遺物観察表-5

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量(cm)		観察事項	出土地点
第Ⅲ-27図・図版Ⅲ-19	54	円盤状製品	青花製	胴部	長軸 短軸 厚さ	3.4 3.0 0.5	重量6.9g。外面に菊花文。内面から大きな剥離調整を行い、2ヶ所のみ外面から剥離調整を行う。1ヶ所のみ細かい剥離調整がみられる。	AS-005のカクラン
	55	円盤状製品	瓦	—	長軸 短軸 厚さ	3.6 3.45 1.1	重量17.8g。明朝系赤瓦の転用。内外面からの剥離調整。研磨により方向や順序は不明だが、剥離面を残したままの雑な研磨。内外面は丁寧な研磨で、瓦の布目をやや残してはいるがほぼ平らに研磨している。	重機掘削中
	56	円盤状製品	沖縄無釉陶器製	—	長軸 短軸 厚さ	4.35 4.35 1.3	重量31.9g。沖無の胴部を転用したもの。内外面からほぼ交互に剥離を行い、やや円形に成形する。外面から細かい剥離調整を行う。外面に沈線がみられるが胴部に対して縦に入れられてるため、文様かは不明。	清掃中
	57	円盤状製品	瓦	—	長軸 短軸 厚さ	4.45 4.3 1.2	重量30.9g。明朝系赤瓦の転用。剥離調整が行われたおも呈する。内外面を研磨するが、一部に研磨されていない箇所があり、特に内面の布目痕は意図的に残しているとおもわれる。	北壁
	58	円盤状製品	沖縄施釉陶器製	—	長軸 短軸 厚さ	8.0 7.75 2.2	重量は106.3g。沖施の碗の底部を転用したもの。胴部除去のため外面から内側にむかって打割して、大きめな剥離が全周する。角を取るための細かい剥離調整がみられ、ほぼ円形の形状となる。	重機掘削中
	19	円盤状製品	沖縄施釉陶器製	—	長軸 短軸 厚さ	4.3 3.7 2.1	重量は24.2g。胴部が残存具合から Ⅲ類の面取り小碗とおもわれたが、剥離面の数から円盤状製品とした。全体の約2/3を欠損していて、ほぼ交互に内外面から剥離調整を行う。角が残り、略円形と想定される。	表土
	59	円盤状製品	沖縄無釉陶器製	—	長軸 短軸 厚さ	7.8 7.2 1.0	重量は59g。文様の施文法から壺の肩部を加工したものとおもわれる。全体の約1/3を欠損していて、外面からの打割が多くほぼ円形の形状をなす。外面からの細かい剥離調整により整形されている。	北壁
第Ⅲ-28図・図版Ⅲ-20	60	煙管	雁首 青銅製	—	火皿径 長さ 小口径	0.95 5.0 0.85	重量は6.0g。屈曲した首のない脂反しに変形した火皿がつく。短い脂反しからやや肩が張り小口にのびる。首部の横に接合部分が脂反しから小口までみられる。ソケット上部に敲打痕があり、羅宇を接合させたいにつけられたものと想定される。	耕作土
	61	煙管	吸口 青銅製	—	小口径 長さ 口付径	0.65 3.2 0.55	重量は1.8g。小型の吸口。小口からのびて、半分ほどから細くなり、口付でややふくらむ。小口から口付にかけて接合部分がみられる。内部に布片が残存しており、フィルターの役割か。	攪乱
	62	簪	押差 青銅製	—	長軸 短軸 厚さ	10.9 6.5 0.3	重量は5.2g。男性用の副簪。耳掻き状のカブとおもわれるが、先端が欠損している。頭はカブから段々細くなり、断面は六角形となる。茎はやや平たく加工され、先は剣先状になる。頭と茎の境で L字状に屈曲する。竿に2ヶ所の亀裂がみられ、さらに折り曲げようとしていたことが想定される。使用時のものかは不明。	表土
	63	銭貨	寛永通寶	—	直径 方孔幅 厚さ	2.38 0.64 0.1	重量は2.3g。新寛永通寶のマ通字の銭貨。背面は無文である。「永」の字の一部が欠損している。銭文は細く明瞭だが、「寛」の上部がやや潰れている。銭厚が薄いわりには、輪や郭ともに凹凸がある。	礫だまり
	64	銭貨	無文銭	—	直径 方孔幅 厚さ	1.65 0.8 0.1	重量0.5g。小型で薄い銭貨。角径が大きく、全径の約1/2となる。縁に鋳造時のバリを除去しきれずに残っている。	礫だまり
	65	銭貨	一銭	—	直径 厚さ 重量(g)	2.29 0.13 3.2	昭和二年銘の桐一銭青銅貨。全体的に青錆で覆われており、文字が不明瞭。外縁も一部欠損がみられる。	旧表土

第Ⅲ-14表　A-1区 出土遺物観察表-6

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm）		観察事項	出土地点
第Ⅲ-28図・図版Ⅲ-20	66	石製品	敲石	―	長軸 短軸 厚さ	9.8 6.3 2.5	重量は207g。石材は輝緑岩。平面観は楕円形。背面と側面と上部を破損する。上部の破損は他の面と違って磨耗が少ないことから、後世のものとおもわれる。当初は主に敲石と使用していて、一部を磨石に使用する。背面を破損後に上面の頂部でくぼみ石と使用されるが、使用頻度は低いとおもわれる。多機能に使用される石器。近世でも古い時期のものと想定される。	北壁トレンチ
第Ⅲ-29図・図版Ⅲ-21	67	ガラス製品	瓶　薬品 （コバルト）	口縁～底部	口径 器高 底幅	1.1 5.1 1.3	玉縁口縁に下部にむかってやや太くなる頸部で、なで肩で隅丸長方形の胴部に薄い高台がつく。胴部に「横山製薬」と「イボコロリ」のエンボス。口縁から胴部にかけて鋳型線がみられる。大きめの気泡がみられる。口縁の一部を欠損する。	重機掘削中
	68	ガラス製品	瓶　薬品 （無色）	口縁～底部	口径 器高 底径	1.3 5.4 2.0	口縁がやや内湾して、外面に肥厚する。口唇を平坦にすく。胴部がなで肩の円柱状で、上げ底の底部。胴部中央に鋳型線がみられるが、頸部にはなく別々のつくりで接合されたものと想定される。大きめの気泡がみられる。	南壁トレンチ
	69	ガラス製品	瓶　化粧瓶 （白色）	口縁～底部	口径 器高 底径	3.6 6.6 4.3	ネジ栓の口縁で、口唇を研磨する。胴部は10角柱状で、上げ底の底部。口縁から胴部にかけて鋳型線がみられる。	表土
	70	ガラス製品	瓶　化粧瓶 （白色）	口縁～底部	口径 器高 底径	2.8 4.8 2.4	ネジ栓の口縁は胴部から内側に屈曲して、やや外反して立ち上がる。頸部に高めの突帯を廻す。いかり肩の胴部に低い高台がつく。いかり肩を波状に施文する。口縁内面と突帯上面にバリが残る。胴部から底部にかけて鋳型線がみられる。突帯から口縁にかけて鋳型線がみられないので、別つくりで接合したものと想定される。	AS-072
	71	ガラス製品	ステム （白熱電球）	―	長軸 短軸 径	5.6 1.5～1.2 1.2～0.3	白熱電球の一部で、ステムと呼ばれている部品。	旧耕作土
	72	歯ブラシ	セルロイド製	―	長軸 短軸 厚さ	14.6 1.2 0.6	重量は9.7g。ブラシ部はのびて舌状を呈して内湾する。ブラシ部に4列の植毛穴で、中央が21穴の2列、両サイドに20穴の1列ずつで、計82穴である。整然と配列されているが、右側の列は外側により過ぎたため、側面に亀裂が入る。柄に○印の中に「山」のマークとその下に「百貨店製」の不明瞭の刻印。柄尻に孔。頸が折り曲げられ、横に亀裂が入る。	AS-020のベルト
	73	スプーン	ステンレス製	―	長軸 短軸 厚さ	10.3 3.4 0.15	重量は17g。卵状のさじから頸がしまり、さじの約2倍の長さのある平たい柄で柄尻が内湾する。柄表面に「Ｍｏｒｉｎａｇａ　Ｄｒｙｍｉｌｋ」の文字、裏面に「森永奶粉粉乳約三．○g」のプレス文字。柄側面にバリが残る。頸を中心にＶの字に折れ曲がる。	表土

第Ⅲ-15表　A-2区 出土遺物観察表

挿図番号	図版番号		種類・器種		部位	法量(cm)		観察事項	出土地点
第Ⅲ-30図・図版Ⅲ-22		74	本土産磁器	椀	口縁～底部	口径 器高 底径	9.8 4.8 3.2	胴部がややふくらむ直口縁で、断面が舌状を呈する。胴部の割り に小さい底部。外面に色絵による楼閣の文様を施すが、色が剥落して輪郭のみが残存する。高台端部を釉剥ぎして、重ね焼きの際の付着防止のための砂が付着する。	表土
		75	本土産磁器	小椀	口縁～胴部	口径 器高 底径	7.8 4.0 —	「へ」の字状に曲げた胴部からの直口縁でわずかに開く。底部を欠損する。口縁部下に緑の2重圏線を施す。国民食器。瀬戸・美濃系。	表土
		76	本土産磁器	小椀	胴部～底部	口径 器高 底径	— 3.4 3.4	太めの胴部で、底部は胴部の半分ほどの厚さしかない。外面に草花文？を施し、高台内外面に圏線を廻す。	表土
		77	本土産磁器	小杯	口縁～胴部	口径 器高 底径	5.2 2.35 —	胴部から口縁に厚さが薄くなり、やや外反する。外面に連続円文と口縁下に2条の圏線を施す。	確認トレンチ3
		78	本土産磁器	急須？	底部	口径 器高 底径	— 1.2 9.0	鋳込み成型。内外面を施釉し、外面畳付けから底面を釉剥ぎする。	旧表土
第Ⅲ-30図		79	ガラス製品	ランプ笠	上部開口部片	口径 器高 底径	7.4 3.0 —	上部開口部から屈曲して、丸味のある胴部。外面に横位の筋が入る。	AS-002 北壁トレンチ掘削中

第Ⅲ-16表　C-1区 出土遺物観察表

挿図番号	図版番号		種類・器種		部位	法量（cm/g）		観察事項	出土地点
第Ⅲ-31図・図版Ⅲ-23		80	本土産磁器	皿	口縁～底部	口径 器高 底径	12.6 2.7 7.3	銅版転写（青色）。口銹。花文。瀬戸・美濃系。	北西側拡張部 表土
		81	沖縄産施釉陶器	小椀 Ⅲ類②	胴部～底部	口径 器高 底径	— 2.75 3.8	胴部は1.5cm幅の面取りされる。全面に厚めの白化粧と透明釉を施す。見込みを釉剥ぎする。高台と見込みにアルミナ痕。	CS-001
		82	沖縄産無釉陶器	擂鉢	底部	口径 器高 底径	— 4.0 10.0	底部からやや開いた外傾した胴部。底部は粗めの調整。体部外面はナデ調整でナデ痕が残る。約1.5cm幅の擂目を施す。甘めの焼成。	CS-001
		83	アカムヌー	鍋 Ⅰ類	口縁部	口径 器高 底径	19.4 2.4 —	ナデ調整で、口縁端部が丸みを帯びる。角度のきつめの頸部で胴部は欠損。	CS-001
		84	アカムヌー	火炉 Ⅰ類	口縁部	口径 器高 底径	— 4.6 —	やや内傾した口縁に受け部を貼付けする。胴部外面はヨコナデ調整。受け部の先端がやや上に外反するとおもわれるが、欠損していて確認できない。スス付着。	北西側拡張部 表土
		85	円盤状製品	沖無製 擂鉢	胴部	長さ 幅 厚さ	2.30 2.25 1.0	重量は5.5ｇ。小型の製品。擂鉢の胴部を転用したもの。内側から打ち欠いて成形。1辺のみを研磨する。形はややいびつ。	CS-001
		86	ガラス製品	薬瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	1.95 6.65 3.65	ネジ栓の口縁に、肩が張るもののなで肩で長方形の胴部で、浅いあげ底の底部。胴部下半に「NAKAJIMA SEIROGAN」のエンボス。	清掃中
		87	ガラス製品	薬瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	0.8 4.9 1.5	ネジ栓の口縁に頸部がすぼまり、円筒状の胴部に、低い高台を成形する。口唇部が一部欠損する。	清掃中
		88	青銅製品	髪飾り？	—	長さ 幅 厚さ	16.8 4.6 1.12	重量は7.0ｇ。平らな長い棒の中心でねじりの加工を施す。文様は一面のみで巴文と4条の横線を施す。両端が欠損する。	CS-001

第Ⅲ-17表　C-2区　出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm/g）		観察事項	出土地点
第Ⅲ-32図・図版Ⅲ-24	89	沖縄産施釉陶器	火炉	口縁部	口径 器高 底径	— 4.0 —	やや直立気味に立ち上がり、口唇を平坦にする。口縁直下に2条の圏線が廻る。口縁内部に先端が欠損しているものの、上向きの受け部を貼付する。外面と内面の受け部までを鉄釉で施釉する。口唇は釉剥ぎし、アルミナが付着する。	北壁トレンチ
	90	明朝系赤瓦	丸瓦	筒部	長さ 幅 厚さ	15.9 9.6 1.7	桃成やや不良。内面に布目・紐痕が明瞭にみられる。外面はナデ調整が丁寧におこなわれ、にぶい稜線がみられる。	清掃中
	91	ガラス製品	化粧瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	2.5 2.7 3.0	ネジ栓の口縁に口縁より約1cm大きい短い円筒状の胴部。底部はやや細り、上げ底に加工する。底部に「m」と「2」のエンボス。	北壁トレンチ
	92	ガラス製品	薬品瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	1.25 6.5 1.8	ネジ栓の口縁。頸部は口縁より太く1条圏線が廻る。やや長い長方形の胴部の上下に3条の圏線が廻る。底部はやや上げ底。底部に「ABBOTT」「14？目のようなマーク3」「9を横にしたもの．LAB」の3段のエンボス。米国製か？	拡張部 北壁トレンチ
	93	ガラス製品	薬品瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	1.6 3.9 2.0	ネジ栓の口縁で、頸部に一条の突帯が廻る。口縁よりわずかに大きく短い円筒状の胴部。上げ底の底部で、縦に接合線が残る。	拡張部 北壁トレンチ
	94	銭貨	ベトナム銭 1DONG	—	直径 厚さ 重量	22.52 1.28 3.88	1面には人物像と「VIET-NAM」「CONG-HOA」、もう1面には竹林文と「1DONG」「1960」の銭文。	重機掘削

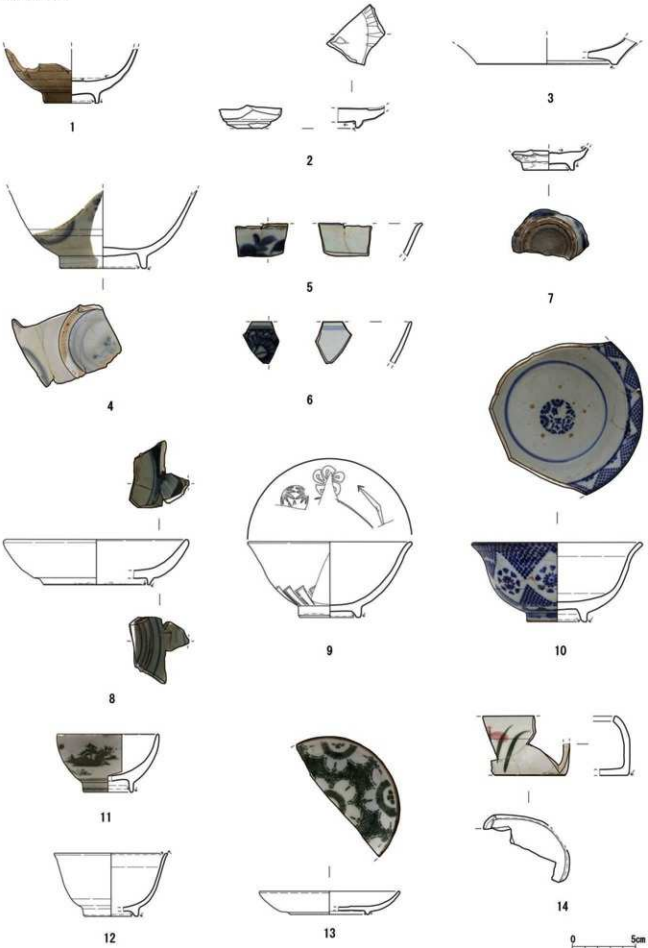
第Ⅲ-18表　C-3区　出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm/g）		観察事項	出土地点
第Ⅲ-33図・図版Ⅲ-25	95	アカムヌー	鉢	胴部～底部	口径 器高 底径	— 2.45 —	膨らむ胴部に低い平坦の底部を成形する。底部に糸切り痕を確認。ナデ調整。	南壁トレンチ
	96	海生哺乳類	サメ	歯	長さ 幅 厚さ	4.45 3.7 0.8	出土層から古代のものではなく、現生のサメ歯とおもわれる。ホオジロザメの歯か。	カクラン

第Ⅲ-19表　E区　出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm/g）		観察事項	出土地点
第Ⅲ-34図・図版Ⅲ-26	97	本土産磁器	小椀	口縁～底部	口径 器高 底径	8.2 4.15 3.4	クロム青磁。膨らむ胴部から立ち上がる口縁で口縁端部が舌状になる。胴部外面に飛び跳有り。やや開く高台で内面をヘラケズリ。瀬戸・美濃産。	表土
	98	沖縄産施釉陶器	椀 Ⅰ類イA	口縁部	口径 器高 底径	14.2 3.3 —	灰釉椀。フィガキー（浸し掛け）。胴部より外側に開く口縁で、ナデ調整によりやや外反気味。	表土
	99	沖縄産施釉陶器	椀 Ⅱ類ロ②b	胴部～底部	口径 器高 底径	— 3.9 6.2	鉄釉の椀。腰の張りがやや弱めの胴部で、外面はナデ調整痕が残る。内面は白化粧後に、透明釉を施す。見込みは蛇の目釉剥ぎし、細かい釉剥ぎ痕が残る。所々にアルミナ痕が付着する。	表土
	100	沖縄産施釉陶器	鉢 Ⅱ類ロ②A	口縁～底部	口径 器高 底径	24.3 11.65 8.6	ワンブーと呼ばれる、大型の鉢。やや胴部が張り開く形状で、口縁が逆L字で下方に向く。外面から高台内面まで鉄釉を施し、高台端部を釉剥ぎする。口縁端部から内面は白化粧後に、透明釉を施す。	攪乱

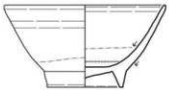
1. A区
(1) A-1区



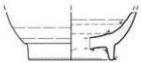
第Ⅲ-23図　A-1区　出土遺物-1

図版Ⅲ-15　A-1 区　出土遺物-1

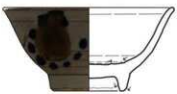
15



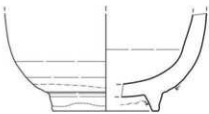
16



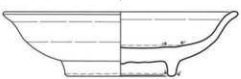
17



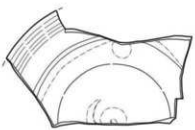
18

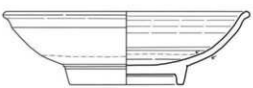


20



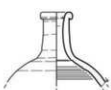
21



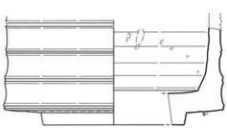


22

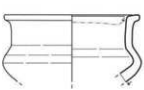
23



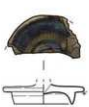
25



27



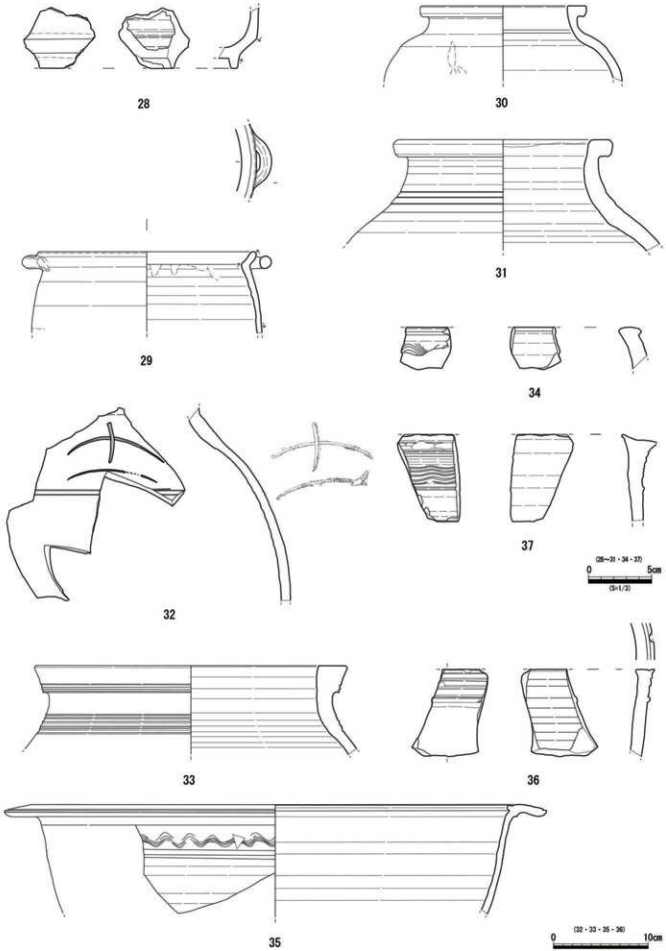
24



26

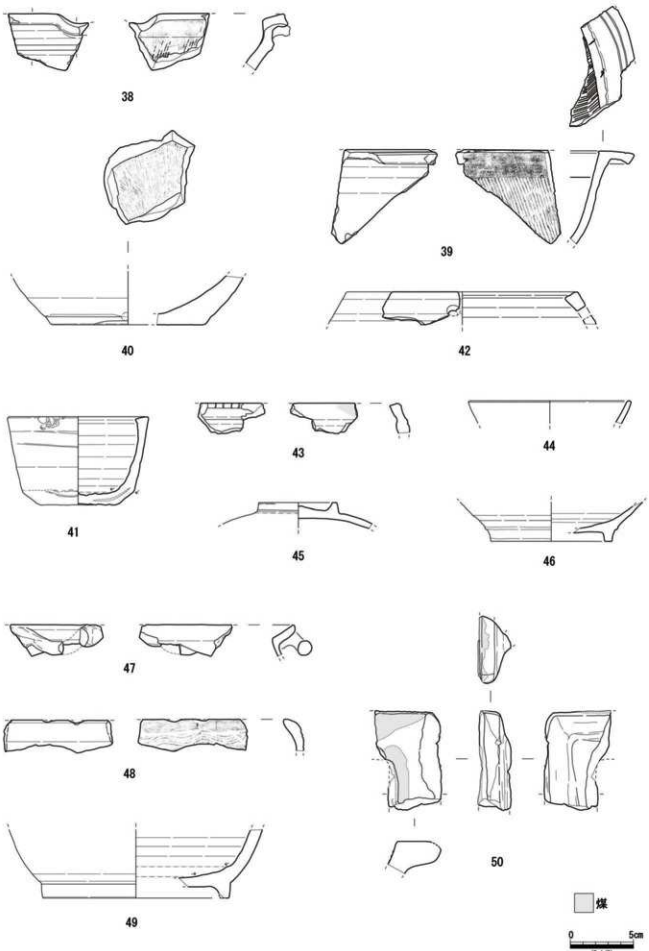
第Ⅲ-24図　A-1区　出土遺物-2

図版Ⅲ-16　A-1区　出土遺物-2

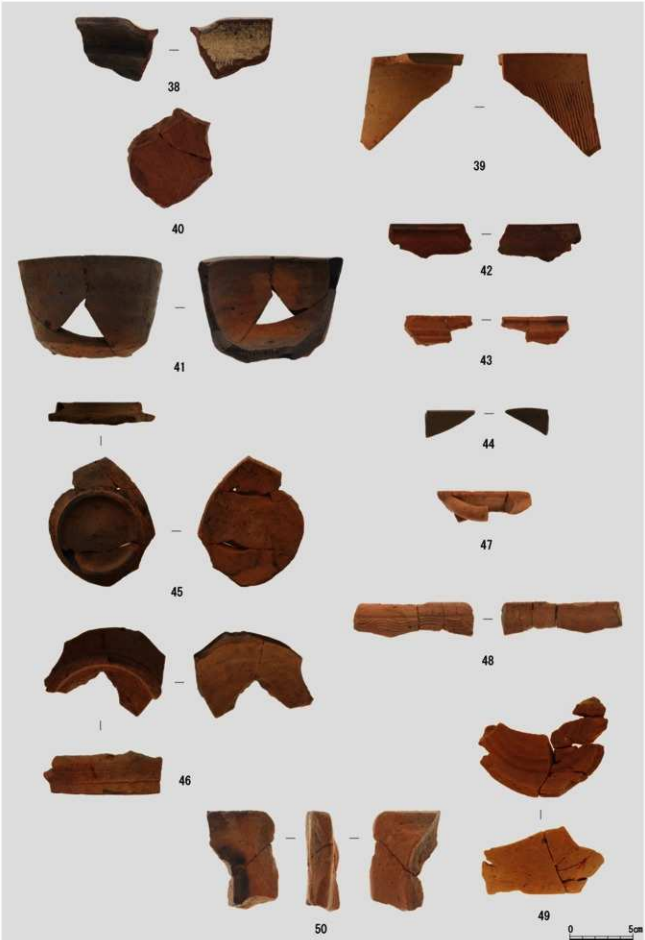


第Ⅲ-25図　A-1区　出土遺物-3

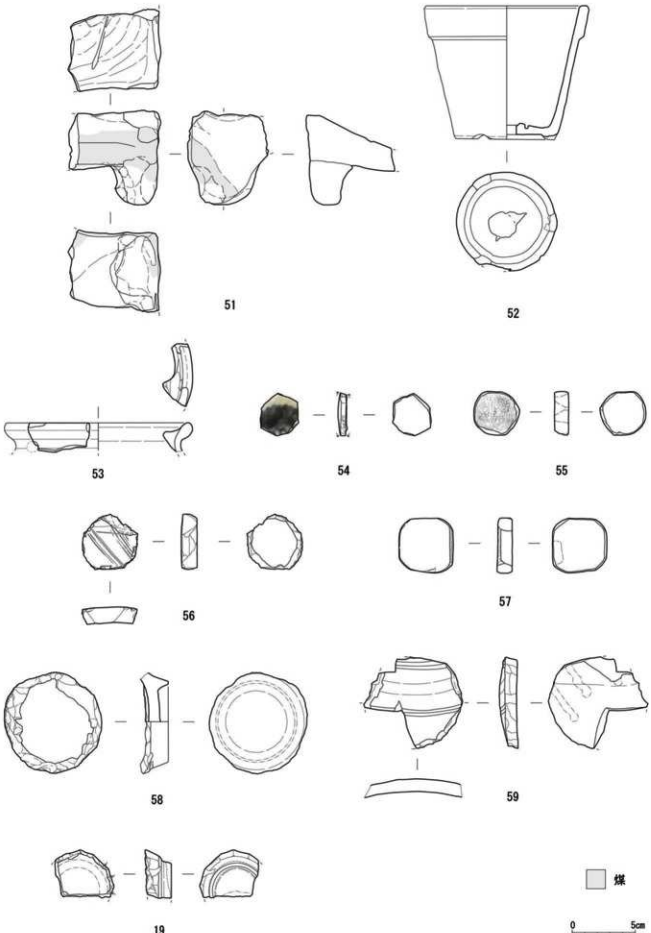
図版Ⅲ-17　A-1 区　出土遺物-3



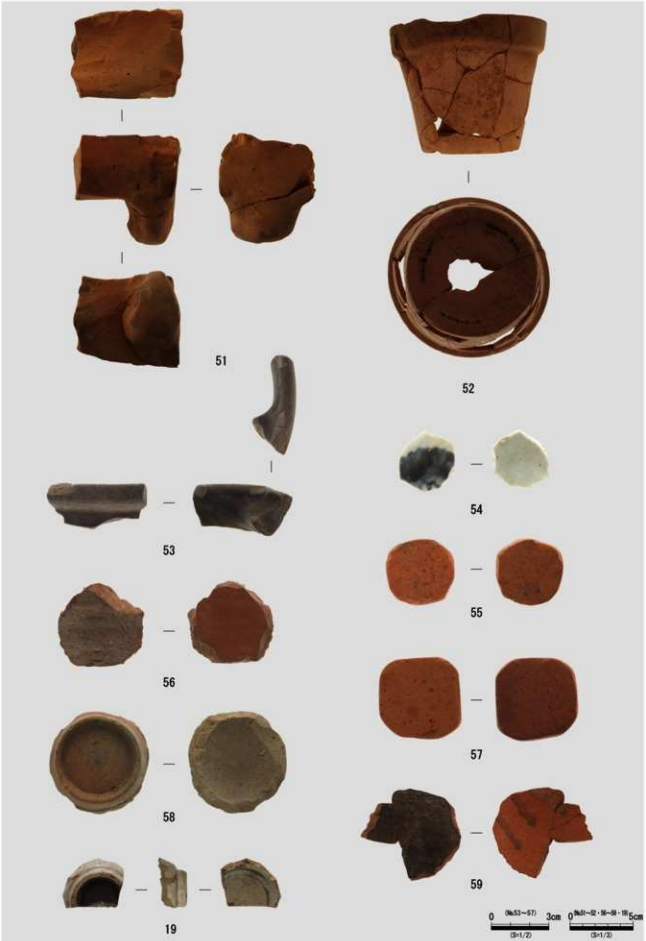
第Ⅲ-26図　A-1区　出土遺物-4



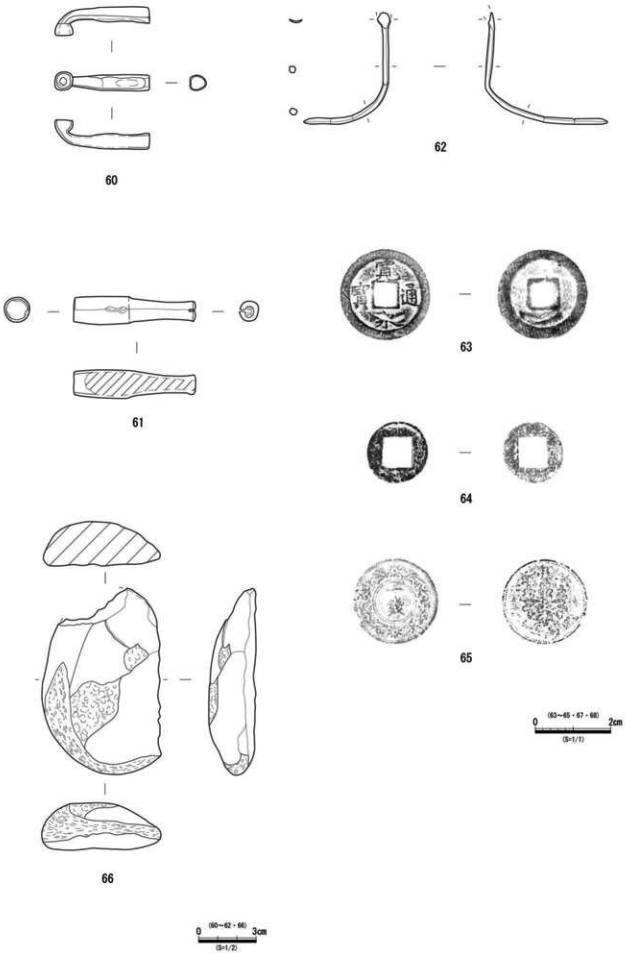
図版Ⅲ-18　A-1 区　出土遺物-4



第Ⅲ-27図　A-1区　出土遺物-5

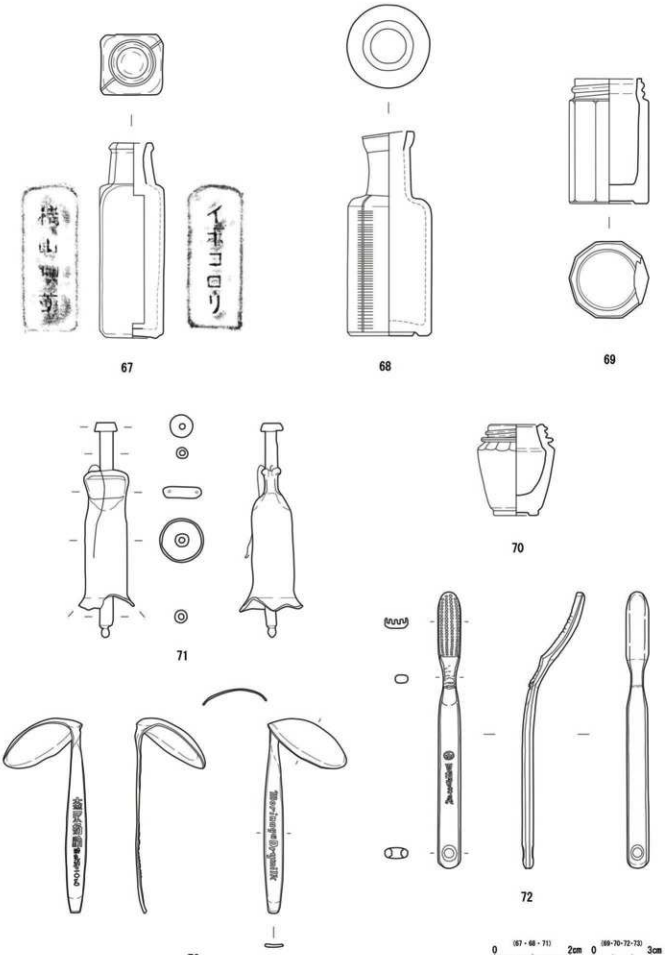


図版Ⅲ-19　A-1 区　出土遺物-5



第Ⅲ-28図　A-1区　出土遺物-6

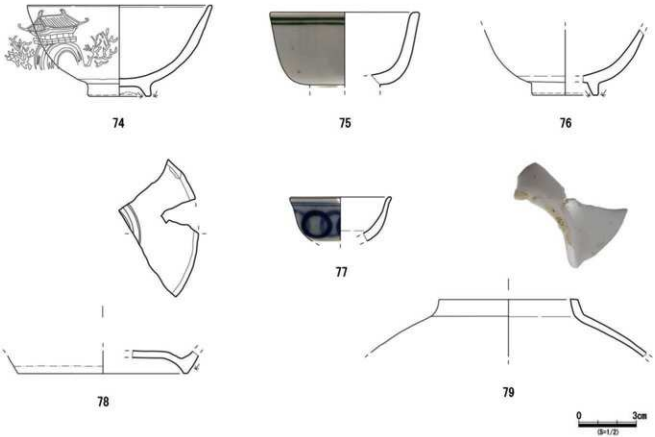
図版Ⅲ-20　A-1 区　出土遺物-6



第Ⅲ-29図　A-1区　出土遺物-7

図版Ⅲ-21　A-1 区　出土遺物-7

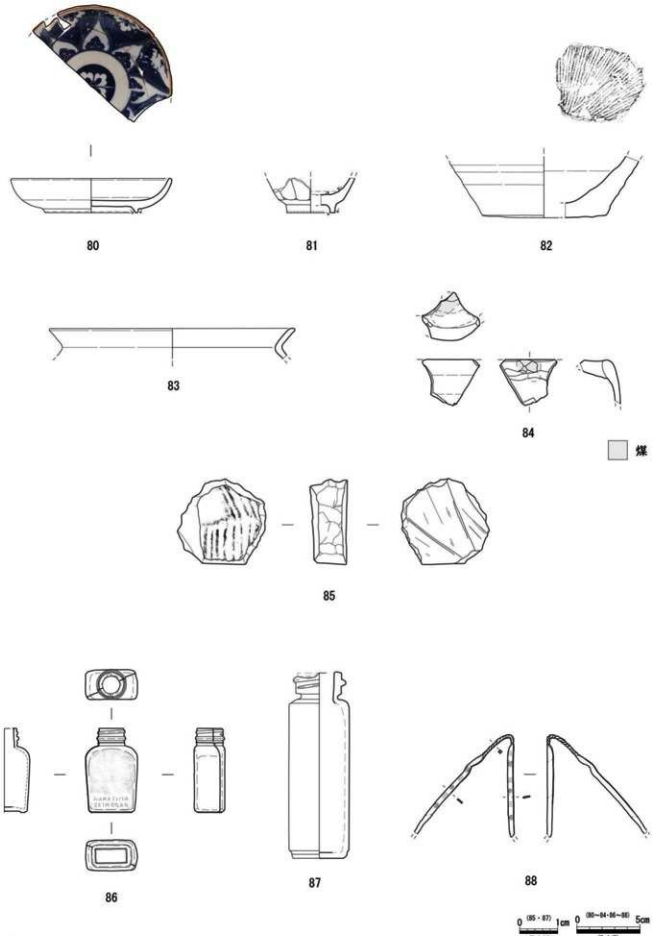
(2) A-2 区



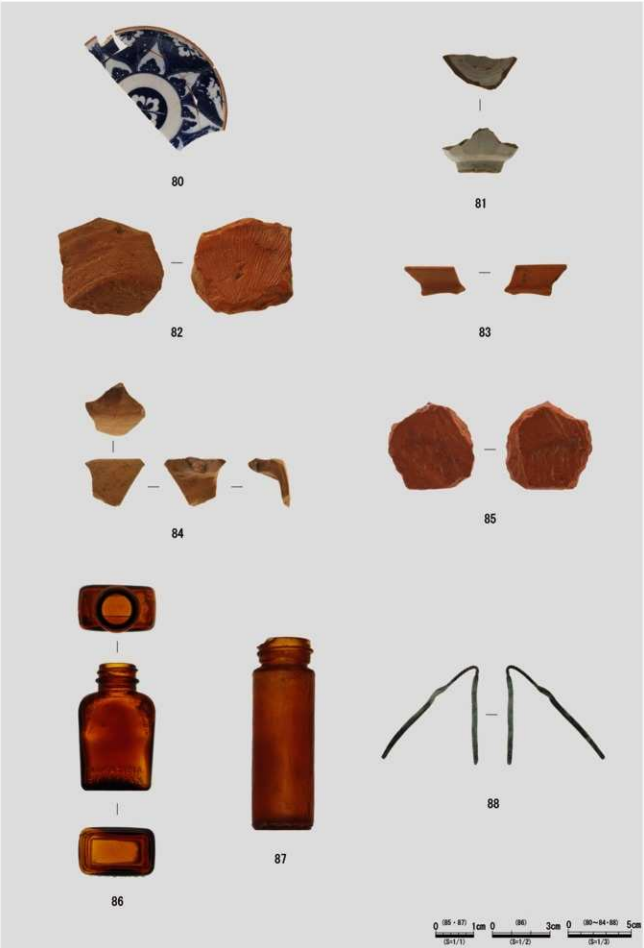
第Ⅲ-30 図　A-2 区　出土遺物

図版Ⅲ-22　A-2 区　出土遺物

2. C区
(1) C-1区

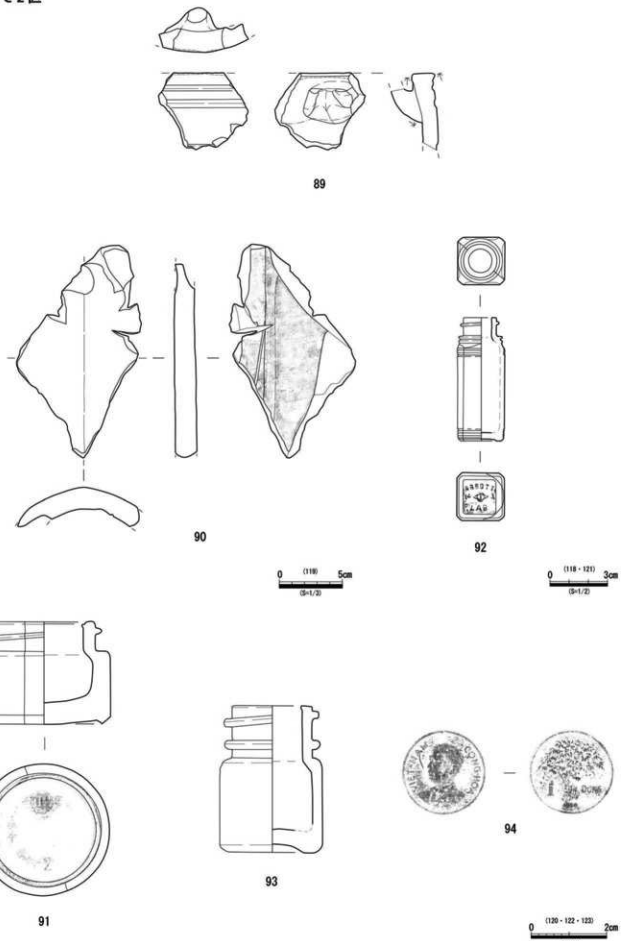


第Ⅲ-31図　C-1区 出土遺物



図版Ⅲ-23　C-1 区 出土遺物

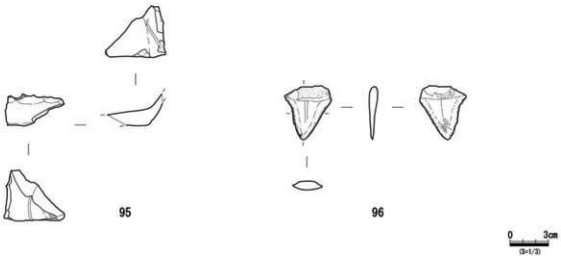
(2) C-2区



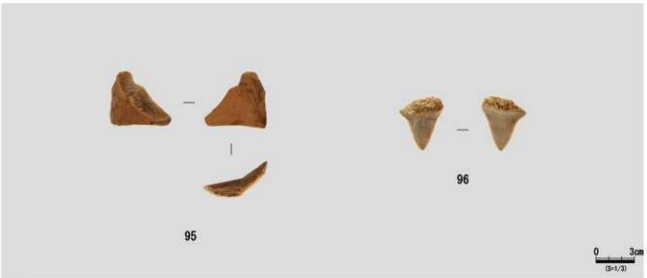
第Ⅲ-32図　C-2区 出土遺物

図版Ⅲ-24　C-2区 出土遺物

(3) C-3 区

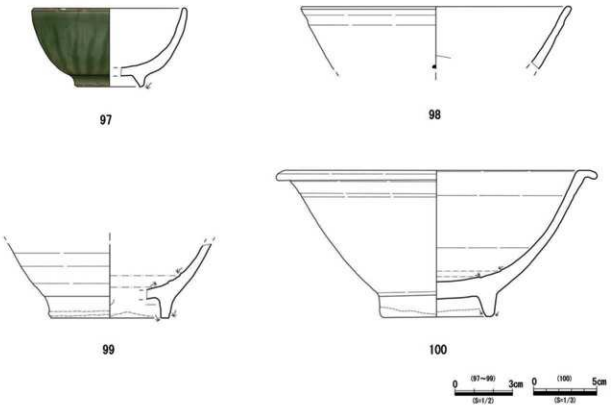


第Ⅲ-33 図　C-3 区 出土遺物



図版Ⅲ-25　C-3 区 出土遺物

3．E区



第Ⅲ-34図　E区 出土遺物

図版Ⅲ-26　E区 出土遺物

第Ⅳ章　宜野湾シリガーラ流域古墓群（B 区）の調査成果

第 1 節　調査概要

宜野湾シリガーラ流域古墓群は字宜野湾と神山にまたがる遺跡で、シリガーラと呼ばれる小川の左右にある石灰岩丘陵崖面に所在する古墓群である。現在一部は滑走路下となっており、全体を窺うことはできないが平成 16（2004）年度には分布調査がなされており、122 基の古墓が確認されている。

69 号墓は平成 16（2004）年度に行われた分布調査で確認された亀甲墓で、宜野湾シリガーラ流域古墓群の中心から大きく東側にそれた場所に所在する。現在では 69 号墓が遺跡の中心からそれているように見えるが、地籍上の墓は古墓群の中心から 69 号墓まで連続しているため、周辺の古墓は基地造成で破壊された可能性が高い。123 号墓は B 区の調査中に不時発見された古墓である。調査中は 1 号墓としていたが本報告書では宜野湾シリガーラ流域古墓群に含まれる古墓として 2004 年に確認された 122 基の古墓に追加し、123 号墓とする。

第 2 節　基本層序

123 号墓は掘削を行っていないため、69 号墓の層序をここでは基本層序とする。

Ⅰ層：表土・造成土 1。現表土である。表土のため腐植している。墓使用時の使用面の高さは現地表と同じとみられる。

Ⅱ層：造成土 2。墓構築のための造成土である。場所によってしまりに強弱があり、混礫層や礫がほとんど入らない層が見られる。基本的には岩盤上に構築されており、一部岩を削り、上に礫等を敷いて平らにし、古墓を構築している。また、袖石（東側）の 3 層、墓屋根縦断トレンチの 4 層は礫による裏込め等と見られる。

Ⅲ層：墓室内造成土。以下の通り細分できる。

Ⅲ a 層：表層。墓使用時の床面。

Ⅲ b_1 層：10 ㎝大の石灰岩レキ層で、しまりが悪い。タナの石列の裏込めとして、充填される。

Ⅲ b_2 層：コーラル層。岩盤の上に敷かれる。

Ⅳ層：地山のマージ。墓庭でのみ確認。

Ⅴ層：石灰岩の岩盤。

第 3 節　遺構

1．123 号墓　墓状況

今回は検出のみの調査で、掘削での調査は行っていない。掘込式の小型の破風墓で、空き墓で、墓口はほぼ南向きである。正面の石積みが崩落していて、開口部が露出している状況で装飾などは不明である。屋根も崩落しているが、切り石積みで構築しモルタルを施し切妻屋根になるとおもわれる。屋根の周りに野面積みで石列を構成し、モルタルを施している。

三味台は正面の石の崩落により詳細は不明だが、モルタルを敷いていて、庭より一段高く構築している。袖石は切石の石積みをモルタルで覆う。左袖石から野面の石積みの庭囲いを構築する。右の庭囲いは確認で

きず、コンクリートブロックを並べて一段積みし、その前に小さな香炉石が置かれていたために袖墓の可能性をおもわせるが、大木が根を張っていて伐採できず、詳細は不明である。

墓庭は三味台同様にモルタルを敷き、長3.0m、短2.5mで歪な楕円形を呈する。一段低く、三味台とは繋げずに間を空けて構築している。墓庭からはずれて、墓口に置いていたとおもわれる香炉石が転がっていた。

墓室内の平面形は略長方形状を呈する。一番ダナのみの造りで、地山（マージ）を掘削してモルタルを敷いている。一番ダナとシルヒラシはほぼ同じ大きさで、シルヒラシには目立った加工はみられない。壁面は野面の石積みで、モルタルで補強する。1.1mの低い天井は切り石でアーチ状に構築するが、墓口崩落にともない天井がやや落ちている。

図版Ⅳ－1　B区 123号墓 遺構平面オルソ

第Ⅳ－１図　Ｂ区 123 号墓　遺構平面図・立面図

墓手前状況〔南から〕

墓室内 検出状況〔南から〕

墓口 検出状況〔南西から〕

墓室内 検出状況〔南東から〕

袖石 庇積み検出状況〔西から〕

上部左側面 検出状況〔西から〕

屋根 後方 検出状況〔北から〕

屋根 後方検出状況〔北から〕

図版Ⅳ－２　B区 123号墓－1

墓庭 検出状況〔北から〕

墓庭 遺物散布状況〔西から〕

図版Ⅳ－３　Ｂ区 123 号墓－2

２．69 号墓　墓状況

今回調査したＢ区の古墓は平成 15 年度に宜野湾市が実施した宜野湾シリガーラ流域古墓群の分布調査で確認された墓で、宜野湾シリガーラ流域古墓群の南東側に位置し、東側に離れた場所にある亀甲墓である。琉球石灰岩を基盤とする丘陵の斜面に、横穴を掘り込んで造られた墓である。

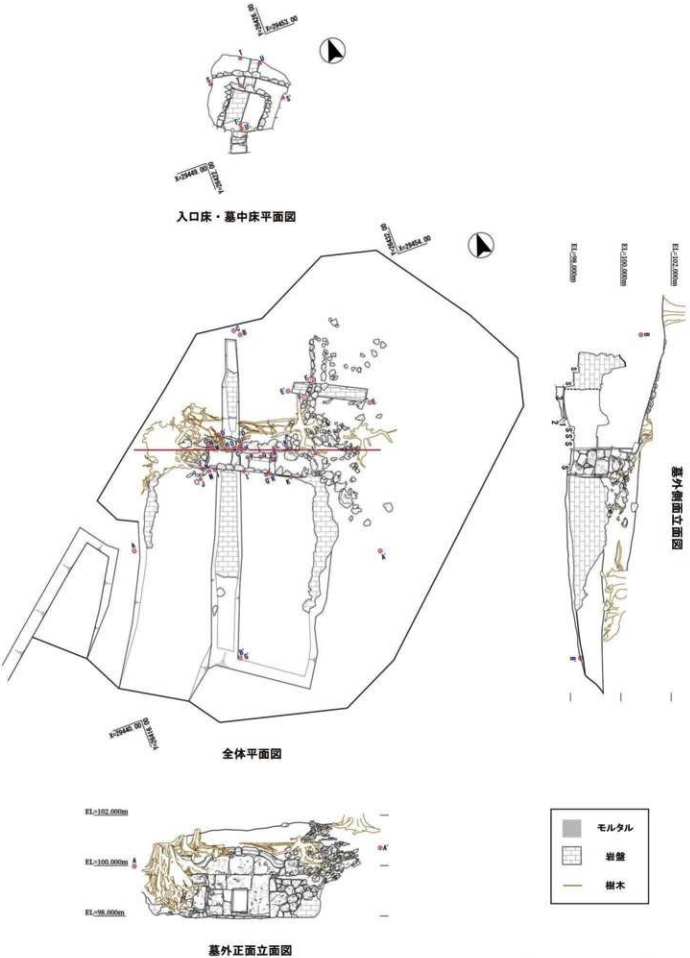
正面の眉は端部で反り上がる。両側に臼（ウーシ）が残る。正面や屋根、袖石などに漆喰が施されている。墓口は幅約 60 ㎝、高さ約 90 ㎝、奥行き約 80 ㎝で、門石（ジョウイシ）を掛かるための段が上下にみられる。屋根は盛土によって構築し、周囲には袖回り（ヤジョマーイ）の２列の石列が一部残る。三味台は１段で、切石を配する。墓口正面は切石の布積みで、袖石は切石の相方積みで構築する。庭囲いは岩盤を加工して構築される。

墓室は幅約 2.8m、奥行き約 2.8m、高さ約 1.5 mで、平面形状は馬蹄形を呈する。平坦コの字の奥タナ２段で、ドーム状に岩盤を削り出して構築され、東側の壁面は切石の相方積みで隙間をモルタルで埋める。また、１号の石厨子を納めるさいに蓋が入るように追加で、岩盤を削り出している状況が確認できる。シルヒラシは幅約 1.7m、奥行き約 1.5 mで、岩盤の隙間をコーラルで埋めて平坦にし、タナには縁石が配置されている。墓室は墓全体の軸と異なり、やや東側に軸を傾ける。

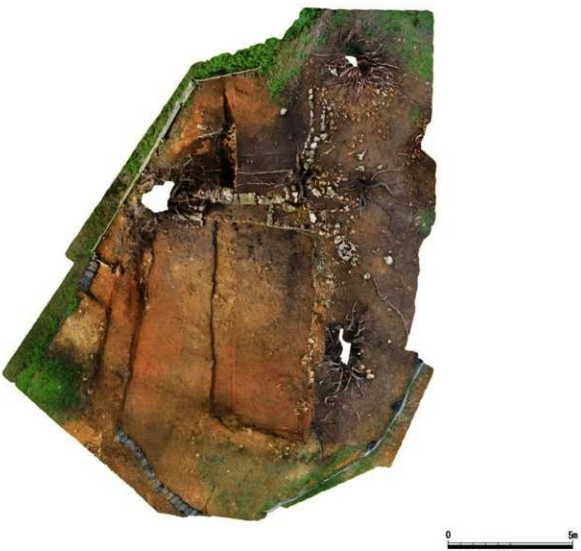
獣骨埋納遺構（第Ⅳ - ４図）

獣骨埋納遺構はサンミデー西隅にあり、ブタの下顎骨が出土した。土層は３層からなり、１層目はしまりが良く粘質が強い砂質シルトの層で、手のひら～人頭大のレキが見られる。２層は１㎜～ 10 ㎜程度の石灰岩が多く入り、３層は石灰岩をほとんど含まない層となっている。すべて獣骨を埋納するために掘りこんだ後の埋め土と見られ、時代的な差はない。下顎骨は、吻端を墓口側（北）とし正位に据えられていた。歯の萌出状況からみて、幼～若獣とみられる。

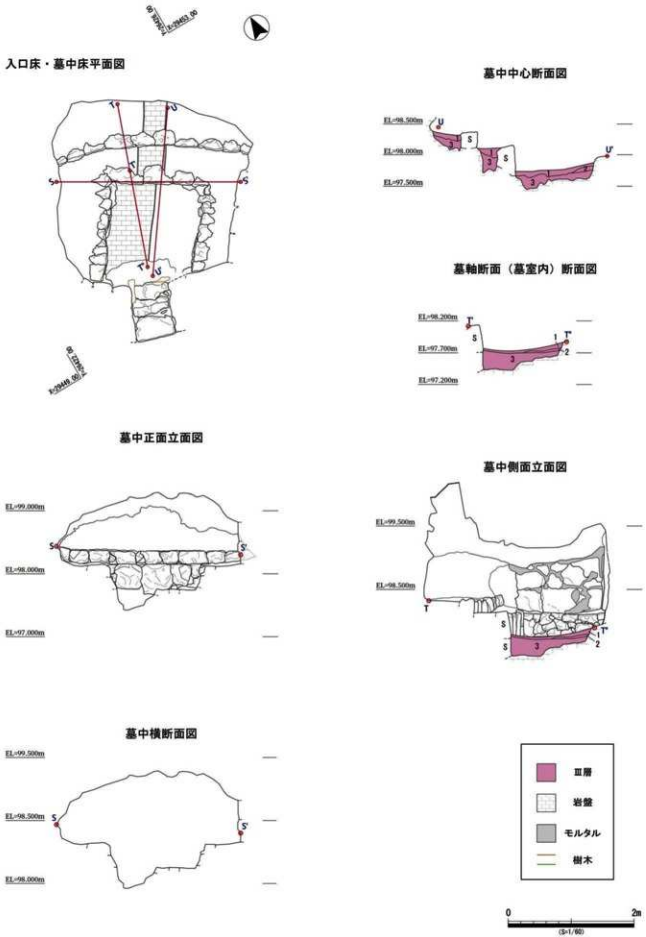
宜野湾市では、今回調査した 69 号墓以外に喜友名後原丘陵古墓群の諸見里墓、普天間下原古墓群の 19 号墓で獣骨埋納遺構が確認されている。



第Ⅳ－２図　Ｂ区 69 号墓　全体平面図・立面図

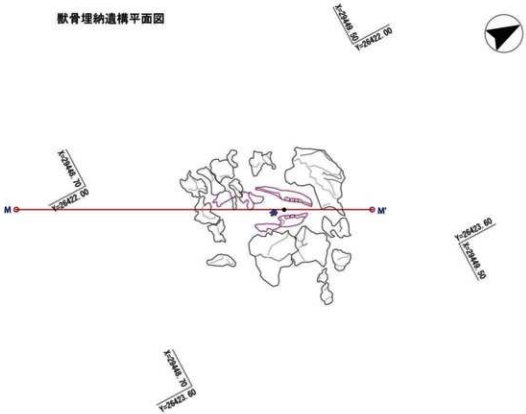


図版Ⅳ－４　Ｂ区　69号墓　遺構平面オルソ

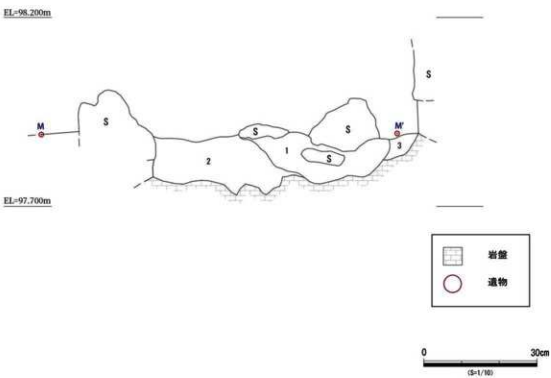


第Ⅳ－３図　Ｂ区 69 号墓　全体平面図・立面図・断面図

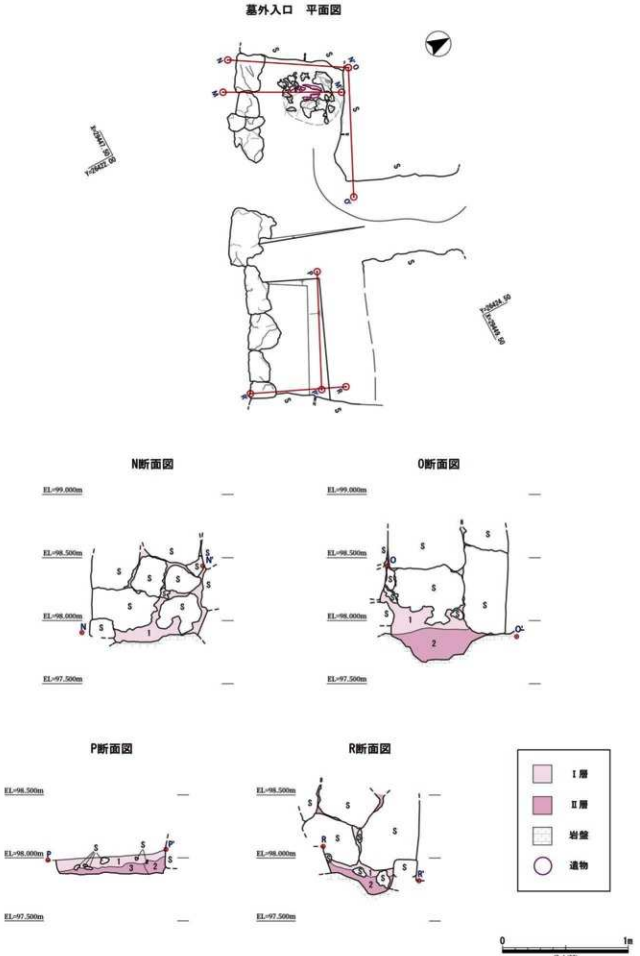
獣骨埋納遺構平面図



獣骨埋納遺構断面図

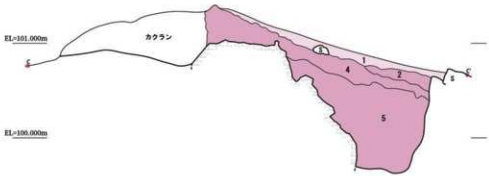


第Ⅳ－４図　B区 69号墓　獣骨埋納遺構および墓外入口平面図・断面図-1

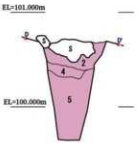


第Ⅳ－５図　B区 69号墓　獣骨埋納遺構および墓外入口平面図・断面図－2

縦断トレンチ（屋根）東壁断面図

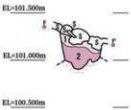


縦断トレンチ（屋根）
南壁断面図

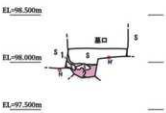


横断トレンチ（屋根）南壁断面図

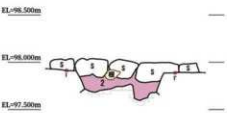
横断トレンチ（屋根）
東壁断面図



墓口下部断面

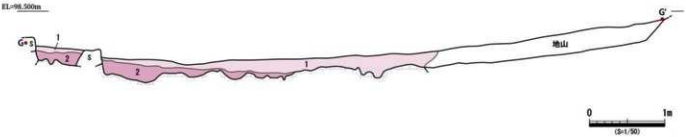


サンミデー下部断面

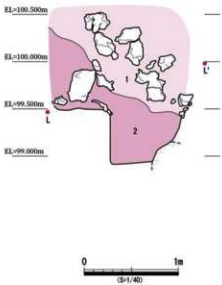


第Ⅳ－６図　Ｂ区 69 号墓　平面図・断面図－1

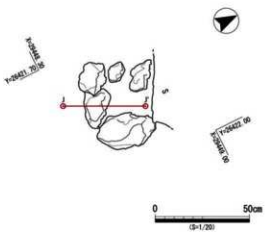
縦断トレンチ（庭）東壁断面図



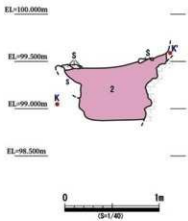
L断面図



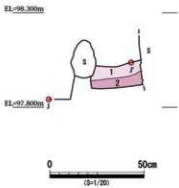
石組遺構平面図



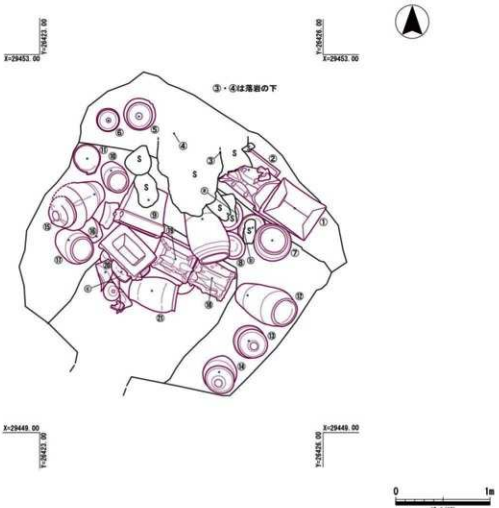
K断面図



石組遺構断面図



第Ⅳ－７図　Ｂ区 69 号墓　平面図・断面図－2



第Ⅳ－８図　Ｂ区 69 号墓　墓室内厨子甕出土状況図

屋根トレンチ断面〔西から〕

屋根トレンチ断面〔北から〕

図版Ⅳ－５　Ｂ区　69 号墓－1

御香炉台検出状況

遺物出土状況〔南から〕

遺物出土状況〔南西から〕

遺物出土状況〔南東から〕

遺物出土状況〔南から〕

古墓　検出状況

右袖石 検出状況〔南から〕

左袖石 検出状況〔南から〕

図版Ⅳ－６　Ｂ区　69 号墓－2

左袖垣 検出状況〔西から〕

右袖垣 検出状況〔南から〕

三味台 検出状況〔南から〕

石組遺構 検出状況〔南から〕

三味台 獣骨検出状況〔東から〕

袖回り〔南東から〕

左袖石 検出状況〔北から〕

扉石〔北より〕

図版Ⅳ－７　Ｂ区　69号墓－3

袖回り〔北より〕

墓室内　裏正面

羨道 検出状況〔南から〕

墓庭トレンチ断面〔南西から〕

墓室内より遺物搬出状況

出土蔵骨器

墓口（化粧前）〔南から〕

墓室完掘状況〔南から〕

図版Ⅳ－８　Ｂ区　69 号墓 -4

左袖石際トレンチ 断面〔西から〕

三味台 掘削状況〔東より〕

墓室　断面〔東から〕

石組み遺構 断面〔東より〕

作業風景〔略南東より〕

東側袖石石積み 岩盤状況〔略南西より〕

墓屋根 造成堆積状況〔略東より〕

西側袖石 遺構状況〔略東より〕

図版Ⅳ－９　Ｂ区　69 号墓 -5

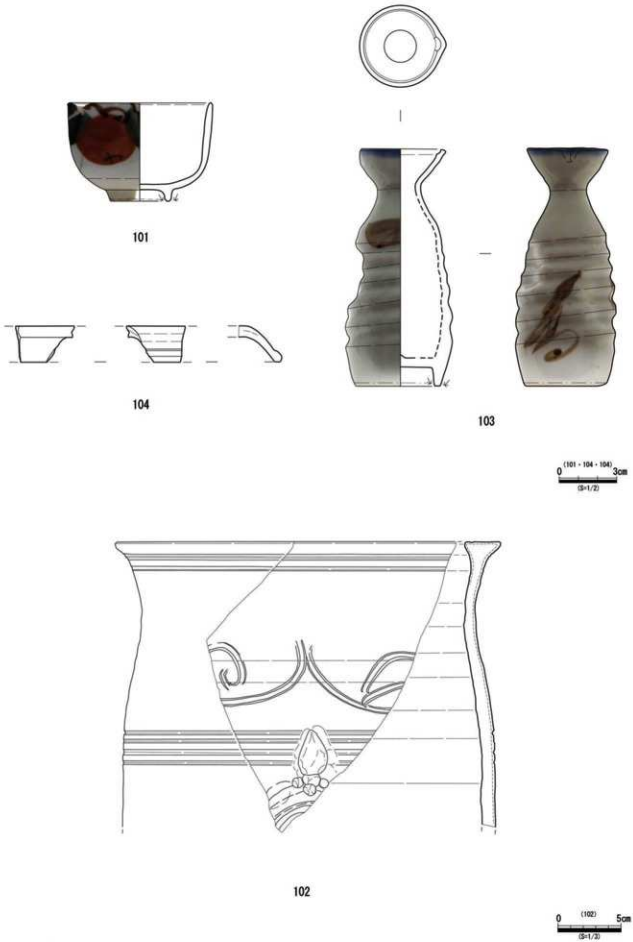
第４節　遺物

Ｂ区は古墓で、平成 30 年度の調査した 123 号墓は、厨子がなく改葬されているため遺物の点数は今回の調査区でも最も少なく計 13 点である。出土した遺物は廃棄されたとおもわれる小型のマンガン掛け焼き締め厨子片の身と蓋が出土したが、銘書はみられなかった。他には本土産磁器が出土している。また、69 号墓は亀甲墓で、平成 27 年度の調査で確認されている。平成 30 年度に天井の一部が崩落したため蔵骨器の数基が破壊されたが、全基を検出することが出来た。検出した厨子は 22 基で、その内訳はサンゴ石製石厨子 1、赤焼御殿型厨子 1、上焼きツノ型厨子 3、ボージャー厨子 4、マンガン掛け庇付焼き締め厨子 1、マンガン掛け焼き締め厨子 10、転用厨子 2 で、その内 14 基で銘書がみられた。石厨子は蓋・身ともに朱と黒の文様を施すが、不明瞭な部分が多い。ボージャー厨子は窓枠が平葺形と唐破風形の 2 種類がみとめられ、後者が 1 基のみであった。マンガン掛け焼締め厨子の屋門の分類では、アーチ形が 5 基と最も多く、次に瓦屋形が 3 点、唐破風形が 2 点となる。転用厨子は 2 点で、一つが小型の壷の側面を打ち欠いていて、打ち欠いた部分を上に器を横にして使用していたとおもわれる。もう一つは甕の下半で、使用のためか打ち欠いた部分がみられる。蔵骨器以外の遺物は 28 点得られていて、墓室内で 14 点、墓室外で 14 点出土している。墓室内はほとんどが蔵骨器内で簪が 8 点、銭貨が 6 点出土している。他は墓庭で沖縄産施釉陶器 5 点、沖縄産無釉陶器 2 点、アカムヌー 1 点、銭貨が 3 点で、墓前で銭貨 2 点、獣骨埋設遺構からブタの下顎骨が 1 点出土している。厨子の銘書から 18 世紀後半から 20 世紀前半に使用された墓とおもわれる。

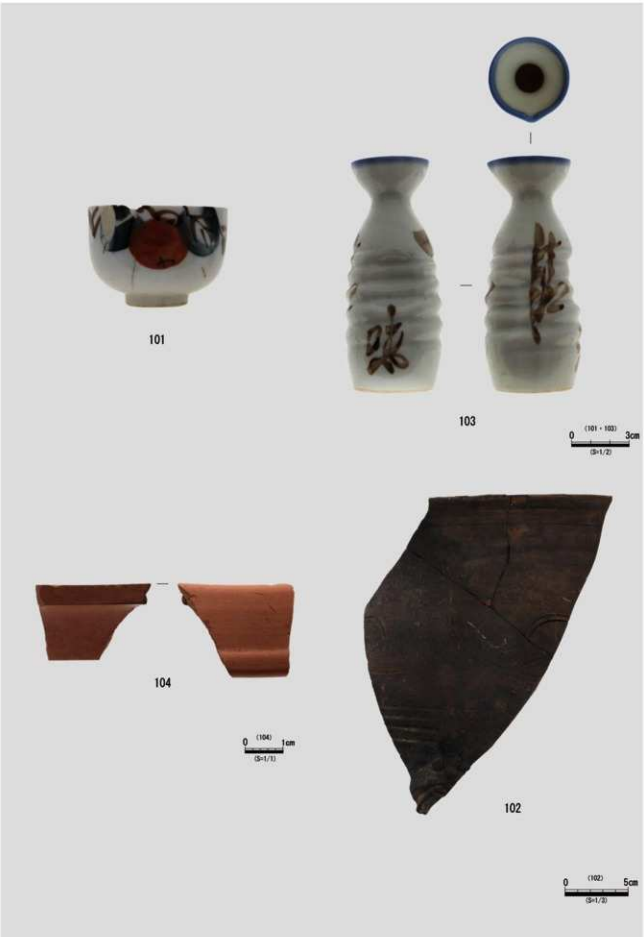
１．123 号墓

第Ⅳ－１表　Ｂ区 123 号墓　出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm）		観察事項	出土地点
第Ⅳ－９図・図版Ⅳ－10	101	マンガン掛け厨子	身	口縁～胴部	口径 器高 底径	30.4 23.2 —	弱い外反の口縁で口唇を平坦に両端が突出する。口縁直下に2条の圏線が廻る。肩部に線彫りの高状？の文様を施す。文様の下に4条の圏線が廻る。浪状の玉飾りのみ残存で屋門の分類は不明。	1号墓右袖垣
	102	本土産磁器	小椀	口縁～底部	口径 器高 底径	7.45 5.2 3.1	外面は腰が張り、体部が直線状にのびる。内面は腰から体部がやや彎らみ、口縁が舌状になる。高台は短く、丸い端部は釉剥ぎを行う。色絵による柿の木文。	墓清掃中
	103	本土産磁器	徳利	口縁～底部	口径 器高 底径	4.3 12.5 4.5	小椀状の口縁で、片口。頸部がしまり、胴部が筒状になる。胴部を3ヶ所凹ませ、凹線文を螺旋状に一周巡らせる。胴部に4字の字款があり、「一・味・諸・裔」か？高めの高台で、回転ケズリで釉剥ぎを行う。内面は頸部まで施釉し、胴部までは及ばない。口縁端部を呉須で施釉する。	墓清掃中
	104	本土産陶器	蓋？	鍔～体部	撮径 器高 口径	— 1.9 —	逆L字状でやや外側に開き、鍔の外面が玉縁状になる。外面は横ナデで、内面はミガキ調整がみられる。重ね焼きが断面で観察できる。	墓清掃中



第Ⅳ－９図　B区 123号墓　出土遺物－1



図版Ⅳ-10　B区 123号墓　出土遺物

2．69号墓

第Ⅳ－2表　B区 69号墓　厨子観察表－1

単位：cm

図版番号	厨子番号	厨子番号	分類	器種	上部径 器高 下部径	器形・成形など	文様・銘書など	出土地
第Ⅳ－11図・図版Ⅳ－11	1	1号厨子	石厨子	蓋	29.2 24.2 49.4	入母屋形の蓋。側面が二等辺三角状の高い屋根で、4つの軒部がやや反りあがる。タズリ出し後に研磨し、平坦に仕上げる。内面はノミ跡が残る粗い調整で、石灰を塗布する。	棟上部、降棟、軒上部に朱色で縁取りを加こなうが、不明瞭。軒面に朱色で垂木を表現し、縁取りを塗で彩色する。側面に釣り針状の文様を2つ組み合わせたような文様を描く。	二条ダナ
				身	47.1 48.1 44	略状の形整なし、底部4隅に脚を有する。正面は小さめの方形状のマドとなる2ヵ所の孔を穿孔する。正面下部に削り出しによる帯を設ける。外面はタズリ出し後に研磨し平坦に仕上げるが、側面は正面に比べてやや粗く、背面はややノミ痕が残る。底部外面はノミ跡が残る粗い調整で、石灰を塗布する。内面もノミ跡が残る粗い調整で、石灰が付着し骨片などが混着している。	正面は朱色で9分間の区画線を描き、その線の縁を墨で線引きする。帯も朱色で彩色しているとおもわれるが、色落ちして不明瞭。	二条ダナ
第Ⅳ－12図・図版Ⅳ－12	2	2号厨子	赤焼御殿型	蓋	36.7 39.5 48	入母屋形で、左右側面に方形状の2点のマドを穿孔し、底を設ける。正面及び側面の軒下には、垂木が浮彫りで表現される。蓋の内面縁が内側に突き出る。外面全体をハケ状工具などでマンガン釉を施す。内面の縁をミガキ、内面をケナブ調整する。	大棟には一対の型取り鯱を配する。下り棟の先には型取り獅子頭を貼り付ける。棟の外面を半裁竹管文状の工具により文様を配する。両面の屋根上部に2対の型取り獅子頭を貼り付ける。屋根と底には半裁竹管文状の工具により瓦葺が表現される。左右側面の2対のマドの間に2対の下向きの蕨手文を合わせた結上の間に棒状の結上を貼り付けた文様を配する。体部内面に鉄赤が認められる。	二条ダナ
				身	46.5 47.1 42.9	方形の体部に4つの脚を有する。1方4列のマドを穿孔する。鉄書面を設けるが、鉄書は記されていない。底部には34点の平円状の穿孔。全面をケナブ調整する。外面の鉄書面以外はマンガン釉を施す。裏面に炭が付着した部分がみられる。	正面は、四角い枠を貼付し、上の枠外に五角形の幾何学文様を押す。横は線刻り副直文を配置する。枠内は線状風の屋門で、屋門の左右は型取り法師像とその下に型取り蓮華文が配される。花文は貼付で、茎は線彫りする。横は二条の縦取り文と型押し花の花形と蓮華文を配置する。体部の両側面は四角い枠を貼付し、枠外の上と左右の縁に線彫りの副直文を配する。枠内は法師像の下に蓮華文と、周りに花文を配する。法師・花文を貼付し茎を線彫りする。背面は蓮華文と花文を配し、蓮華・花文を貼付し、茎を線彫りする。	二条ダナ
第Ⅳ－13図・図版Ⅳ－13	3	3号厨子	マンガン掛け	蓋	12.5 14.8 30.7	脚を有する蓋で、やや低い体部上に楕円形の鍋みを付ける。鍋みの下には2段の鍋み台があり、1段は低く、2段は高く成形される。また体部にしっかりした突帯のかえりが付く。内外面ともに回転ナデ調整し、外面にマンガン釉を施す。体部を中心に石灰が付着する。	墨書による鉄書が体部内面に記される。また、体部外面に墨書による記号が記される。当初は正面のシルシとおもわれたが、鉄書の鉄みやすさを考えると裏を指すシルシではないかと想定される。	一条ダナ
				身	33.7 39.9 25.2	方形状にややのびた口縁に側面部が丸く膨らみ、底部へとしまる形状はボージャーに似たプロポーションとなる。マドは3方で、長方形状に穿孔される。外面調整はマンガン釉やミガキが付着して不明瞭だが、ロクロナデで、側面下半をヘラケズリをおこなう。内面はロクロナデでロクロ痕が残り、内底面はユビナデ調整をおこなう。底面に6つの円形の穿孔を施す。側面下半に石灰が付着する。	口縁外面に浅い1条の圏線と圏部に低い横帯が廻る。耳部よりやや上と側面下半に貼付横帯が廻り、貼付縦帯により区画に区分される。正面はボージャーの浮模形のマド枠に縦線の上に取り付けの玉飾が貼付される。マドは1方2方で、マド枠上面は瓦屋風に施文し、他は副直文が施される。マド枠左右に型取り法師像を配置し、法師像の下に型取り蓮華文と茎が貼付される。窓の下にも小さめの型取り蓮華文と茎が貼付される。側部背面に鉄書が記されているが不明瞭。側部から上にマンガン釉を施し、他は要所にマンガン釉をハケ状工具で施す。側背面に鉄書を記している。	二条ダナ
	4	4号厨子	マンガン掛け	蓋	12.8 15.5 30.1	縦に伸びた宝珠形の鍋みの下に1段の広い鍋み台を設ける。低い体部に階部がやや丸い縁に伸びた蓋と中央内植した高いかえしが付く。内部底点の穿孔が約5cmと大きい。内外面は回転ナデ調整で、外面はマンガン釉のたれ調整は不明瞭。外面の鍋みから蓋の階部までマンガン釉を好く施し、蓋の内面からかえしまで鉄釉する。外面全体に石灰が付着する。	体部内面に鉄書は確認できるが、薄く不明瞭。	二条ダナ
			ボージャー	身	38.9 66.3 26.7	側部のあまり張らない形状。玉縁状の口縁が立ち上がる。隅丸方形状のマドを1つ穿孔する。底部に10点の円形の穿孔するが、数点開いていない孔がある。外面を回転ナデ調整をやい、側部下半をヘラケズリで調整する。内面はロクロナデ調整で底部内面をユビナデ調整する。	側部に2条の圏線と上下のマド枠の位置のそれぞれに1条の圏線が廻る。平面形の屋門で、上下のマド枠上面に円線文がある。屋門の横に縦に浅い沈線と2点の鉄みの組み合わせの策印がみられる。	二条ダナ
第Ⅳ－14図・図版Ⅳ－14	5	7号厨子	ボージャー	蓋	7 10.5 29.6	鍋みや及び鍋み台を持たない形形を呈する。内外面は回転ナデ調整で、側部は粗い調整を行う。体部端部を平坦に成形する。外面体部端部にかけて石灰が付着する。所々にかさな影もみや亀裂がみられる。内面は側部と体部下半で色調が異なることから重ね焼きが行われたとおもわれる。	文様および鉄書は確認できない。	一条ダナ
				身	29.1 55.6 23.7	側部から立ち上がる口縁。3つの円形のマドを穿孔する。内外面ヨコナデ調整し、外面側部下半をヘラケズリをおこなう。内面底部をユビナデ調整をする。底部に平面性質状の7つの穿孔がみられる。側面の一部にアバタがみられ、焼成時に側部が歪んだとおもわれる。外面に石灰が厚く付着する。	側部に3条の圏線を廻す。側部横帯は2つの圏線を廻す。屋門内の横帯は消されて不残る。唐破風の屋門で、上下のマド枠上に圏線を入れる。横帯1の上にカタカナのキ字状の策印を施す。	一条ダナ

第Ⅳ－３表　Ｂ区 69 号墓　厨子観察表 -2

単位：cm

掲図番号 図版番号		厨子 番号	分類	器種	上部径 最高 下部径	器形・成形など	文様・銘書など	出土地
第Ⅳ－14図・図版Ⅳ－14	6	11号厨子	ポージャー	蓋	8.5 11 32.1	揺み及び揺み台を持たない蓋で笠形に成形される。体部端部を平坦に成形し、内外面ともに同転ナデ調整をし、外面の頂頂部やや粗く成形する。内外面は軸線痕がみられる。外面頂頂部とそれ以下で色調の違いがみられることから重ね焼きが行われたとおもわれる。1/3ほど欠損する。	体部内面に墨書による銘書が記されるが、欠損のため判読できない。	一番ダナ
				身	29.6 54.3 20.8	口縁が方形状で長く、口唇が外側に張る。底部に3点の三日月形の穿孔。外面はロクロナデ調整で、調整痕がみられる。胴部下半はヘラケズリをおこなう。内面はロクロナデで、調整痕が明瞭にみられる。	口縁下に2条の側線が、頂部に山形突帯が廻る。平面形の屋門で、マドは破損しているが1方2列とおもわれる。マド枠の上に斜めにした二字状の窠印がみられる。屋門の横に墨書で「鳥」の字を記す。	一番ダナ
第Ⅳ－15図・図版Ⅳ－15	7	9号厨子	上焼きツノ型	蓋	40.1 45.5 50.4	入母屋形で短い庇から裳部が大きく立ち上がる。正面につの小さな方形状のマドを穿孔する。側面につと背面に1つのマドを配置する。穿孔しない。軒下には垂木を浮かし彫りで表す。全体的に白化粧を施し、褐軸、緑軸で施釉する。裳部内面に褐軸を施す。背面の庇上に沖縄産施釉陶器頂部の底部が嵌着している。	棟の両端に型取り鯱を1対貼付ける。正面に唐破風屋根を貼付け、屋根上にツノ付き型取り龍頭とそれから棟に伸びる龍体を貼付ける。降り棟と庇部裳にツノ付き型取りの獅子頭を配する。唐破風屋根下に型取り円形鼻笠を配し、両隅に格子窓を施す。側面は上部に円形鼻笠を貼付け、その下に格子窓を配する。背面に屋根を貼付し、ツノ付き獅子頭を2つ配する。庇上面に2つ1組のツノが正面・背面に2ヶ所、側面に1ヶ所配置する。ツノ上面にアルミナを施す。裳部から庇上面にかけて褐軸を施釉して、要所に厚め緑軸を施す。底底面に銘書が記される。	一番ダナ
				身	49.3 45.5 38.4	逆台形型の胴部に上部の左の窠が4つ付く。正面に3つの小さな円形のマドを穿孔する。側面に4ヶの円形マドを穿孔する。底部に三日月形の孔を6つ穿孔する。正面下部に白化粧で鈴書面を設けるが、文字は記されない。胴底部と上面から内底面にかけて白化粧を施す。外底面は無釉で、窠側圧痕がみられる。褐軸と緑軸で施釉する。内面には釉からない底面に白化粧を施し、内側胴部に褐軸を施釉する。	胴部上半に唐破風屋根を貼り付ける。屋根に型取りの龍頭を貼り付ける。龍頭の両隅に鼻笠円文を配する。屋根の両端に型取り獅子頭を配する。屋根下に唐破風の屋門を貼付け、内側に型取り菩薩像と両隅に半球文を配置する。屋門左右に型取菩薩像、型取蓮華文、型取蓮華文を配置して、茎は粘土紐を貼付ける。側面上部に底を貼付け、庇上に型取鼻笠円文を3つ配する。底下に型取菩薩像、型取蓮華文、型取蓮華文で配置して、茎を粘土紐で貼付ける。背面は底を貼り付けて、その両隅に型取獅子頭を配する。褐軸を全面に施し、要所に厚めの緑軸を施文する。	一番ダナ
第Ⅳ－16図・図版Ⅳ－16	8	12号厨子	マンガン掛け	蓋	10.7 15.4 30.1	先端の低い宝珠形の揺みの下にやや高い揺み台を設ける。体部の肩りにやや長い裾と厚く低いかえしが付く。内外面とも同転ナデ調整で、外面はマンガン釉と付着した石灰で調整痕はやや不明瞭。外面の揺みから裾の端部までマンガン釉をやや厚く施釉する。揺みから裾にかけて石灰が付着する。	文様および銘書は確認できない。	一番ダナ
				身	32 63.5 22.7	肩部の張った胴部から口縁がやや外反してのびる。長方形状のマドを2つ穿孔する。外面をロクロナデ調整で、胴部下半はヘラケズリをおこなう。内面はロクロナデで調整痕が明瞭に残る。内面底部をユビナデ調整する。ハケ状の工具でマンガン釉を厚めに施し、屋門の銘書面には施さない。	口縁直下と頂部に突帯文が廻る。頂部の文様は、波状文が廻り、その波状文の間に圏線が施文される。胴部は瓦屋風屋門を貼付ける。屋門の左右に型取り法師像と型取り蓮華文を貼付ける。茎は又状工具による線刻である。胴部文様の下に突帯を貼り付け、突帯上面に2条の圏線をめぐる。その下に波状文と3～4条の圏線を廻す。銘書面に文字は記されない。	一番ダナ
	9	13号厨子	マンガン掛け	蓋	10.5 18.1 29.8	体部の大きさの割に小さめの押付きの蓋で、高めの体部に小より宝珠形の揺みが付く。揺みの下に1段の高めの揺み台を設ける。かえりは小さい。裾が中央り部をために接地する。内外面を同転ナデ調整する。外面の揺みから裾までの一部分にマンガン釉を施す。マンガン釉の部分を下にして内面の銘書を見ることきれいに読めることから、蓋の扶ろを示したことが考えられる。	押端部に浅い凹線が廻る。体部の内面に銘書が認められる。文字の他に内面上部の穿孔の周りを墨書で囲う。	二番ダナ
				身	25.8 53.2 19.2	直線的な口縁から胴部にかけてやや膨らみ、底部にかけてやや窄まる。やや小さめの方を穿孔する。底面に三日月形の穿孔が6ヶ所みられる。外面にロクロナデで、底部付近をヘラケズリする。内面もロクロナデで、内底面をユビナデで調整する。全面に薄くマンガン釉を施すが、屋門内には施釉しない。	口縁下に2条の圏線を施文する。頂部に突帯を廻す。肩部に又状工具による圏線文・波状文を施し、その下に凹線文3条廻す。胴部はアーチ形の屋門と又状工具による線刻を蓮華文を配する。胴部文様下に4条の圏線・波状文・2条の圏線を施す。	一番ダナ
第Ⅳ－17図・図版Ⅳ－17	10	14号厨子	マンガン掛け	蓋	11 18 29.3	先端のつぶれた小より の宝珠形の揺みの下にしっかりした2段の揺み台を設ける。体部に横に伸びるもののわずかに歪み端部が丸い裾と小さいかえしが付く。蓋台と体部の間、体部と裾の間に圏線文を廻す。内外面とも同転ナデ調整をし、内面は調整痕が明瞭だが外面は調整痕が不明瞭。外面にマンガン釉を施すが、薄い。	墨書による銘書が体部内面に記される。体部に窠印とおもわれるへラ記号を入れる。	一番ダナ
				身	28.3 53.2 22.6	口縁が直線的に伸び、肩部にかけて膨らみ、底部にかけて窄まる。内外面をロクロナデ調整をおこない、内面は調整痕が明瞭に残る。外面胴部下半はヘラケズリで、内底面はユビナデで器面を整える。マドはふたがない。全面にマンガン釉を施すが、底部付近は塗り残す。	口縁下に2条の凹線文で頂部に突帯文を廻す。肩部に線刻う波形文を施し、突帯文を廻す。突帯上に3条の圏線を施す。胴部に線刻う の瓦屋形の屋門、線刻うの窠形、線取りの窠配文を配する。胴部文様下に3条の凹線文・波状文・2条の凹線文・波状文を施す。	一番ダナ

第Ⅳ－４表　Ｂ区 69号墓　厨子観察表 -3

単位：cm

神因番号 国版番号	厨子番号	分類	器種	上部径 器高 下部径	器形・成形など	文様・銘書など	出土地
第Ⅳ－17図・図版Ⅳ－17	11	15号厨子 マンガン掛け 庇付き	蓋	11.7 17.7 32.9	2段構造でつくられた蓋。上段にはもみの宝珠形の縁みの下に1段の縁みが設けられる。宝珠形の縁みの突起の先端の上面に小さい穿孔がみられる。縁みから下う棟が4ヵ所つくられ棟先は施文である。下段はややふくらんだ体部に端部が丸みの群とやや力形のしっかりしたかえしが付く。全体的に回転ナデ調整し、ハケ状の工具で外面全体と群内面にマンガン釉を施す。	上段の庇は縦位沈線文などで屋根を表し、底の端部に2条の圏線が廻る。体部内面に銘書が記される。	一番ダナ
			身	31.4 66.5 23.6	頭部は直線的にやや外反し、肩部で最大径となって、窄まりながら底部につく。頭部下に瓦状整を施した混をつけ。その上に下う棟を4ヵ所貼り付ける。正面に1ヵ所の方形のマドを穿孔する。底部に円形状の孔を5ヵ所穿孔する。外面をロクロナデ調整し、側面下半をヘラケズリをおこなう。内面もロクロナデ調整をおこない、内底面にコビナデで面取を整える。全面にマンガン釉を施釉し銘書面も塗りつぶすが、マドのある屋門内は塗りつぶさない。	口縁下に圏線を2条廻す。底の屋根は平瓦竹管で瓦屋根を表す。側面を区画する太めの縦軸と細は玉飾りや直線文で施文する。屋門は瓦屋形で、柱貫を圏面文や凹線文で施文する。屋門の左右に型取り蓮華文、型取り蓮華文を貼付し、茎は線彫りで表す。側面文様下に宍形文で区画した文様帯が2つあり、縦形り蓮華唐草文を施文する。上の文様帯にはさらに細1つの縦の軸土線を貼り付ける。銘書面は マンガン釉で塗りつぶされ、銘書はみられない。	一番ダナ
第Ⅳ－18図・図版Ⅳ－18	12	16号厨子 中型壷 (転用品)	身	－ － －	なで肩で、胴部が膨らむ。口縁部を打ち欠き、頭部から胴部の1/3ほどを打ち欠き、横に置いて蔵骨器として転用する。	頭部から肩部に5～6条の浅い圏線が廻る。胴部に十字状の窯印がみられる。	一番ダナ
	13	22号厨子 壷 (転用品)	身	31.3 29.1 18	胴部の打ち欠きから転用とみられる。頭身の胴部から壷とおもわれる。内外面をナデ調整し、内面のナデ痕が残る。外面胴部下半をヘラケズリし、内底面をコビナデ調整で面取を整える。外面と内面上部に石灰が付着する。	文様や銘書などはみられない。	一番ダナ
第Ⅳ－19図・図版Ⅳ－19	14	17号厨子 マンガン掛け	蓋	7.2 13.9 27.8	縁頭形の縁みの下に2段の低い縁みが全設ける。体部に一部が反り返り端部の丸い群と内側した低いかえしが付く。被損しているが縁み頂点を穿孔しているとおもわれる。内外面ともに回転ナデ調整を行う。外面の縁みから群端部までマンガン釉をハケ状の工具などで施す。群内面に露胎する。	体部内面に墨書による銘書が記され、明瞭に残る。	一番ダナ
			身	27.8 52.1 21.2	頭部から直立気味の口縁で、口群を平形にする。あまり張らない胴部で、底部に平円形の5点の穿孔。焼成の際に割れたとおもわれる部分をセルタルで補修する。内外面をロクロナデによる調整で、内面にナデ痕が残る。外面胴部下半はヘラケズリ、内底面をコビナデ調整で面取を整える。全面に厚めのマンガン釉を施すが、底部付近は露胎させる。銘書面も塗りつぶす。	外面口縁の直下に2条の圏線と頭部と胴部の境に低い突帯が廻る。肩部文様帯は波状文・2条の圏線・波状文を配する。その下にない突帯を貼付し、その突帯上に2条の圏線が入れる。屋門は唐破風で、1方のマドを穿孔する。屋門の左右に型取り蓮華文と型取り蓮華文を貼付し、茎を線彫りする。胴部文様下に貼付突帯を廻し、突帯上に2条の圏線を入れる。突帯の下に波状文・4条の圏線が廻る。	一番ダナ
	15	21号厨子 マンガン掛け	蓋	8.7 11.3 29.1	笠形に成形される蓋で、体部がやや高い。体部端部を平形に成形し、内外面を回転ナデ調整し、外面底部品は粗く成形する。体部外面は輪積痕が明瞭に残る。内外面に石灰が付着する。	文様および銘書は確認できないが、体部外面に記号を墨書で記される。平成18年度の神山島家古墓*の41号厨子に記されてもっと似た記号とおもわれる。	シルヒラシ
			身	30.4 53.1 21.5	やや内傾する方形状の口縁で、頭部がへの字状に屈曲し、胴部上半がやや膨らんがやや内傾して底部がつく。1方25ヵのマドを穿孔する。底部に三日月型の孔をへの字に穿孔する。外面をナデ調整、内面を回転ナデ調整をおこない、底部内面をイタナデで成形する。胴部下半に石灰が付着する。	口縁下に2条の圏線を施文する。頭部に突帯を貼り付ける。マドに平面形の屋門を貼付し、上下の屋門に沿って圏線を圏線する。上のマド枠に圏線を入れる。屋門の斜め上に斜め線に点を組み合わせた窯印を施文する。	シルヒラシ
図版Ⅳ－20	16	5号厨子 マンガン掛け	蓋	8.7 17.3 29.5	先端の突起がしっかりした宝珠形の縁みの下に2段の縁み台を設ける。体部に端部が丸く、一部が反り返る群と小さいかえしが付く。内面頭部の穿孔がつぶれかけている。内外面ともに回転ナデ調整だが、外面はマンガン釉により調整痕が不明瞭。外面の縁みから群にかけてやや厚くマンガン釉を施す。	文様はないものの、体部内面に墨書による銘書が記される。	二番ダナ
			身	30.5 53.8 21.8	底部からやや外傾した胴部がのび、中はどで最大径となる。頭がしまり、口縁が外反する。口群が内側にやや張る。3方のマドを穿孔する。内外面にロクロナデをおこない、内面にナデ痕がみられる。外面の胴部下半はヘラケズリで調整する。底部以外は厚めのマンガン釉を全面に施す。底部に丸形、平円形、爪形の14点の穿孔がみられる。	口縁下に2条の凹線文を廻し、頭部に浅いナデにより幅の狭い突帯を押し出す。肩部に重複文を配し、下に突帯を貼付け、上面に2条の圏線をめぐらす。胴部にアーチ形の屋門で、屋門内に型取りの菩提樹葉を貼り付ける。屋門上部に花弁付けた玉飾りを3点配するが、真ん中は胴子頭か？屋門の他に縦形り蓮華文、蓮華文、茎を施す。胴部文様下に3条の凹線文・櫛描波状文・2条の凹線文・3条の凹線文を施文する。	二番ダナ

*宜野湾市教育委員会編　2011年　『市内埋蔵文化財発掘報告書』

第Ⅳ－５表　Ｂ区 69 号墓　厨子観察表 -4

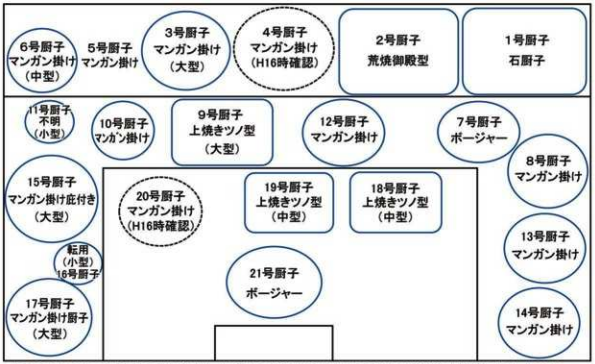
単位：cm

挿図番号 図版番号	厨子番号	分類	器種	上部径 器高 下部径	器形・成形など	文様・銘書など	出土地
図版Ⅳ-20	17	6号厨子 マンガン掛け	蓋	8.1 11.5 25	小型の蓋で、2段の編み台にやや偏平な宝珠形の編みが植いて付けられる。ハの字に広がる丸味の体部に、端部の丸い蕾とやや内側の小さいかえしが付く。内面頂部に大きな穿孔があり、余った粘土が開られずに残る。内外面をナデ調整する。外面全体にハケ状工具でマンガン釉を施す。	墨書による銘書が体部内面に記される。	二番ダナ
			身	25.5 39.8 17.5	小型のやや側が張る側部に口縁が外反し、口唇がやや広めの平坦の成形で内面がわずかに突帯状になる。厨子は7一ア型で1方のマドを穿孔する。底部に6点の爪形の穿孔。ハケ状のもので全面にマンガン釉を施釉し、口唇、底部に墨書する。内外面をロクロナデで成形し、内面にナデ調整が残る。内底面をユビナデで整える。	外面口縁部下に2条の圏線、頂部に強いナデによる低い突帯が廻る。肩部には蓮弁文を線刻りする。屋門の玉飾りを中心に花弁を数十点刻付する。屋門の左右に蓮華文を線刻りして施文する。側下部は2条の圏線+波状文+2条の圏線+波状文+3条の圏線が廻る。	二番ダナ
図版Ⅳ-21	18	8号厨子 マンガン掛け	蓋	9.1 11.2 33.5	全体的に丸みの宝珠形の編みの下に1段の編み台を設ける。編みに対して大きめの体部に端部がやや平坦の蕾と内頂の小さなかえしが付く。かえしは接触しない。内外面はきれいな回転ナデ調整を行う。外面の編みから蕾の端部にかけてマンガン釉を施す。	文様および銘書は確認できない。	一番ダナ
			身	33.2 65.2 24.5	口縁が直口し、口唇を平坦にする。口唇が内側にやや突出する。肩部が張り、底部にむかい窄まる。底部下半が膨らみ、やや不安定。2方のマドを穿孔する。内外面をロクロナデで成形し、内面に粗い調整痕が残る。外面側部下半はヘラケズりする。底部に半裁竹管状の12点の穿孔がみられる。銘書面以外は外面全体にマンガン釉を施釉する。銘書面に文字はみられない。	口縁下に2条の圏線を廻す。その圏線の下に一つだけの文様を施すが、薄くて不明瞭。頂部にナデにより突帯を設ける。肩部文様は、波状文+2条の圏線+波状文+貼付突帯でその上に2条の圏線を廻す。唐破風形の屋門を貼り付ける。悪鬼2ヶ所。左右の蓮華文は型づくりして貼り付ける。茎は叉状工具で線刻りし、文様下に貼付突帯を側線してその上に2条の圏線を入れる。間を空けて3条の洗線を廻す。	一番ダナ
	19	10号厨子 マンガン掛け	蓋	8.2 13.2 25.2	先端のつぶれた宝珠形の編みの下に、2段の編み台を設ける。体部に横に伸びる端部が丸い蕾と細く短いかえしが付く。内外面ともに回転ナデ調整で、内外面ともに調整痕がみられる。外面の編みから蕾にかけてマンガン釉を施し、体部はハケ状の工具で施釉する。蕾の内面に指状の圧痕がみられる。	墨書による銘書が体部内面に記される。	一番ダナ
			身	24.2 44 16.7	口縁が外反し、口唇を平坦に成形外側にやや張り出す。側部中ほどで最大径になり、底部にかけて窄まる。枕状状のマドを2つを穿孔する。底部に爪形の6孔を穿孔する。内外面をロクロナデで成形し、外面側部下半はヘラケズりで整える。内底面はユビナデでし、ナデ痕がみられる。外面全面に厚めにマンガン釉を施釉し、口唇・底部付近は施釉する。	口縁下に2条の圏線文を廻し、頂部に強いナデにより粘土が盛り上がり突帯文を成形する。肩部に蕉葉文を廻し、その下に2条の突帯文を廻す。アーチ形の屋門で、上部に3つの円文を組み合わせた玉飾りを付ける。屋門の左右に線刻りで蓮華文・蕉葉文を施す。屋門の下は3条の圏線+波状文+3条の圏線+波状文+3条の圏線を配する。	一番ダナ
図版Ⅳ-22	20	18号厨子 上焼きツノ型	蓋	27.8 36.5 37.5	入母屋形の蓋で、皮から表部が立ち上がる。正面に方形状のマドを4つ穿孔し、側面にも2つの穿孔する。軒下の垂木を4面とも浮かしぼりで表す。外面から底部内面に白化粧を施し、内面は褐釉を施し、外面は部分的に褐釉やコバルト釉で彩色する。裏面底部に鉄釉が付着する。3つで1セットのツノを表・裏面に2つ、側面に1つ配する。	棟の両端に型取り鯱を配する。表面に唐破風の屋根を貼り付け、屋根中央にツノ付きの龍頭を貼り付ける。唐破風屋根両端と底部の4隅にツノ付きの型取り獅子頭を配置する。唐破風屋根下に花弁が長めの花文を貼り付ける。側面は円文と2列の格子文を配し、裏面は表部中ほどに瓦屋根を貼付、両端にツノ付き獅子頭を配する。表面のみ褐釉、コバルト釉で施文する。底裏面に銘書を記す。	シルヒラシ
			身	37.2 42.4 30.2	逆台形の長めの側部に、1字状の側が4つ付く。方形状のマドが裏面をのぞいて2つ穿孔される。底部に丸形の9孔が穿孔される。外面全面に白化粧を施し、部分的に褐釉、コバルト釉で彩色する。内面も全体に白化粧を施し、内面側部を褐釉で施釉する。表面に銘書面を設ける。	表面側上部に唐破風屋根を貼り付ける。屋根両端と中央に型取り獅子頭を配置する。屋根より上の表面に円文を27ヶ貼り付、格子文を施す。屋根より下の表面には円文と型取り花弁を組み合わせた花文、型取り蓮華文・蕉葉文を配する。蓮華文、蕉葉文は褐釉やコバルト釉で文様を入れる。表面は他に円文や蜻蛉りを配する。側面上部に瓦屋根を貼り付け、屋根下の垂木を浮かし彫りで表す。屋根上の表面には円文と格子文を配する。屋根下には型取りの法師像、蓮華文、蕉葉文、華文、茎を貼付する。裏面は表面上部に側面同様のしっかりした垂木の瓦屋根を貼り付ける。屋根の上の表面に3つの円文を貼り付ける。表面のみに褐釉やコバルト釉で施文する。	シルヒラシ

第Ⅳ－6表　B区 69号墓　厨子観察表 -5

単位：cm

検図番号 図版番号		厨子番号	分類	器種	上部径 器高 下部径	器形・成形など	文様・銘落など	出土地
図版Ⅳ-22	21	19号厨子	上焼きツノ型	蓋	29.3	やや長い底から裏部が上に伸びる。軒下の浮かし形りの垂木は全周でみられる。方形状のマドを表面に3つ、側面・裏面に2つ穿孔する。外面全面に白化粧を施すが、厚い釉薬のため瓦屋表現が潰れている。両輪、縁輪、コバルト釉で彩色する。裏部内面は褐釉で施釉し、底部裏面は白化粧を施す。	型取りの桔を棟の両端に配する。妻上部に唐破風の屋根を貼付、垂木を浮かし形りで表す。唐破風屋根の両端にツノ付きの型取り獅子頭、屋根中央にツノ付きの型取り龍頭を貼り付ける。屋根下の表面に鼻巻き文と円文を組み合わせた花文を貼付、格子文を施す。側面は円文を貼付、格子文を施す。裏面上部に垂木のついた屋根を貼り付け両端にツノ付きの獅子頭を配する。屋根下の表面に3つの円文を貼り付ける。底部4隅にツノ付き獅子頭を配置する。底部裏面に銘書を記している。	シルヒラシ
					41.3			
					40.3			
				身	38.7	底部から外傾して側部が長く伸びる。底部に上字状の脚を4つ貼り付ける。方形状のマドを表面、側面に2つ穿孔し、裏面は円形状のマドを3つ穿孔する。底部に丸型の6孔を穿孔する。表面に銘書面を設けるが銘書は記されていない。外面に下地として白化粧を施し、両輪、コバルト釉で彩色する。内面は口縁から内底面まで白化粧を施し、内側部は褐釉で施釉する。	側上部に張り出しの短い唐破風の屋根を貼付、垂木もみられる。屋根中央と両端に型取りの獅子頭を配置する。屋根上の側部表面に2つの円文を貼り付け、格子文を施す。屋根下の表面は型取りの花文、蕨巻文、蕨巻文を配し、円文を貼り付ける。側面は水平の屋根を貼り付け、垂木がみられる。屋根の上の表面は貼付円文と格子文がみられ、屋根下の表面は型取り法師像、蕨巻文、蕨巻文、巻文を貼り付ける。裏面は側面同様の屋根を貼付、両端に獅子頭を貼り付ける。屋根の上の表面は3つの円文を貼り付ける。	シルヒラシ
					44.8			
					31.3			
図版Ⅳ-23	22	20号厨子	マンガン掛け	蓋	8.8	先端がつぶれた宝珠形の摘みの下にしっかりした1段の摘み台を設ける。体部に端部の丸いやや歪んだ碗と突起状のかえしが付く。内外面ともにやや強い羽転ナデ調整する。外面の摘みから碗にかけてマンガン釉を施す。	文様および銘書は確認できない。	シルヒラシ
					14.7			
					28.5			
				身	28.1	口縁が外反し、口唇は平刃で広めに成形する。長めの側部に頭部が中や張り、底部に丸形の9点の穿孔。口唇から外面全体にマンガン釉を施釉し、底部に露釉する。内外面をロクロナデ調整し、内面にナデ痕が残る。外面側部下半はヘラケズリで成形する。	口縁直下に2条の圏線と頭部に低い突帯が廻る。頭部に蕨文を線彫りして配する。側面はアーチ形の屋門で3方のマドを穿孔する。玉飾りの周りに花弁を3点を貼付けする。屋門の左右に獅子の蕨巻文を配置する。側面下半は4条の四線文+波状文+3条の四線文+波状文+2条の四線文が廻る。	シルヒラシ
					56.8			
					20			

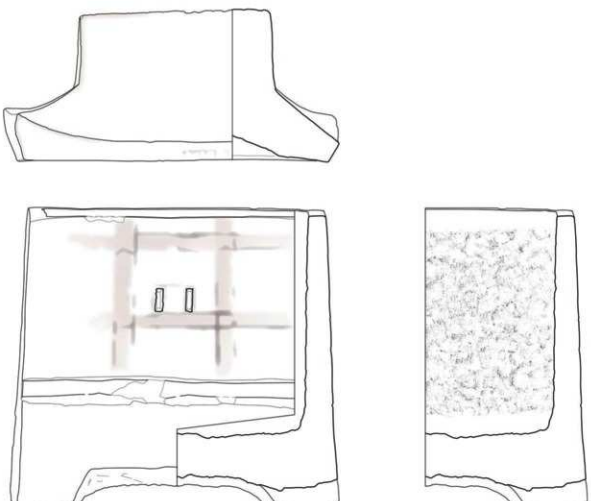


＊点線の円はH16年の分布調査の際に確認された69号墓の墓室内写真より確認。現時点では崩落により確認できていない厨子。

第Ⅳ-10図　B区 69号墓　厨子配置の復元（2019.07.11時点）

第Ⅳ－７表　Ｂ区 69号墓　出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm/ｇ）		観察事項	出土地点
第Ⅳ-20図・図版Ⅳ-24	105	沖縄産施釉陶器	小杯 田類Ⅱ	口縁～胴部	口径 器高 底径	8.9 3.25 —	口縁がやや外反し、胴部が張る。厚めの白化粧で、その上から透明釉を施す。見込みは釉剥ぎし、アルミナ痕が残る。	墓庭 造成土
	106	簪	髪差 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	12.0 2.35 0.2～0.4	重量は11.6ｇ。男性用本簪。頭部は弁先が丸い六花弁の花形で、カブが外れて出土。カブ上面は錆で覆われていて、不明瞭。ムディィはねじれがなく、細身で、頭との境目は不明瞭。竿の先端は短く丸い。	7号蔵骨器内
	107	簪	髪差 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	11.9 2.65 0.35～0.6	重量は24.9ｇ。男性用本簪。頭部が弁先が窄い六花弁の花形でカブが外れて出土。カブは高さがあり、上部は錆で覆われていて、不明瞭。ムディィはねじれがなく、頭との境目は不明瞭。竿は短く、先端も短く丸い。	13号蔵骨器内
	108	簪	押差 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	11.1 0.5 0.2～0.4	重量は6.5ｇ。男性用副簪。細い耳掻き状のカブで、やや形が歪む。丸い頭に断面が丸味の六角形の竿がつく。全体的に短めで、竿の先端は細く尖る。	6号蔵骨器内
	109	簪	ジーファー 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	13.2 1.3 0.25～0.4	重量は10.3ｇ。女性用本簪。横長の浅いスプーン状のカブ。やや角ばった頭に断面六角形の竿がつく。竿の先端は丸く短い。	8号蔵骨器内
	110	簪	側差 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	18.2 0.65 0.3～0.5	重量は13.2ｇ。女性用副簪。大きめの耳掻き状のカブ。太めの頭で竿の1.5倍以上の長さがあり、頭と竿の境界がはっきりして、頭と比べて竿は細い。竿の先端の尖りはほとんどみられない。	7号蔵骨器内
	111	簪	側差 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	18.8 0.45 0.25～0.35	重量は10.5ｇ。女性用副簪。細めのやや長い耳掻き状のカブ。細めの頭からやや太めの竿で、竿の上部が平たく加工される。先端は丸い。竿の真ん中部分でやや曲がる。	13号蔵骨器内
	112	銭貨	寛永通寶 青銅製	—	直径 厚さ 孔径	2.43 0.14 0.61	重量は3.3ｇ。古寛永。背面は無文である。摩滅のためか字が潰れていて不明瞭で、特に「通」の字は銷もあってほとんど判読できない。	15号蔵骨器内
	113	銭貨	寛永通寶 青銅製	—	直径 厚さ 孔径	2.39 0.12 0.62	重量は3.2ｇ。新寛永のマ通。背面は無文である。摩滅が少なく、字がシャープで明瞭にみられる。背は部分的に赤銷に覆われていて、輪が不明瞭。	16号蔵骨器内
	114	銭貨	寛永通寶 青銅製	—	直径 厚さ 孔径	2.31 0.12 0.63	重量は3.1ｇ。新寛永のコ通。背面は無文である。摩滅のためか、字がやや不明瞭。背は青銷に覆われていて、輪が不明瞭で凹凸が薄い。	16号蔵骨器内



1

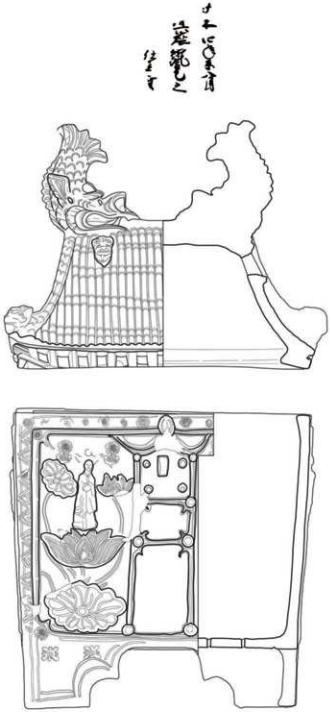
0 20cm
(S=1/6)

第Ⅳ-11図　B区 69号墓　1号厨子 (1)

1

0 20cm
(S=1/6)

図版Ⅳ-11　B区 69号墓　1号厨子（1）



2

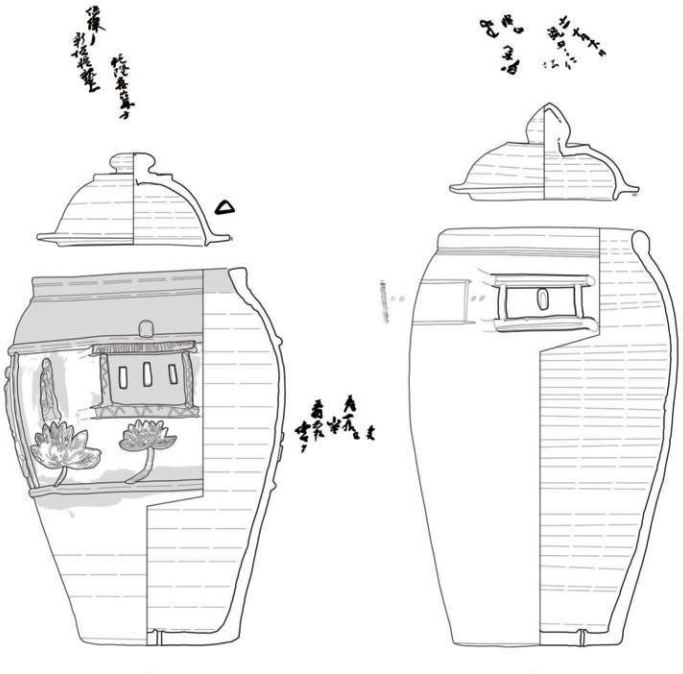
0 20cm
(S=1/6)

第Ⅳ-12図　B区 69号墓　2号厨子（2）

2

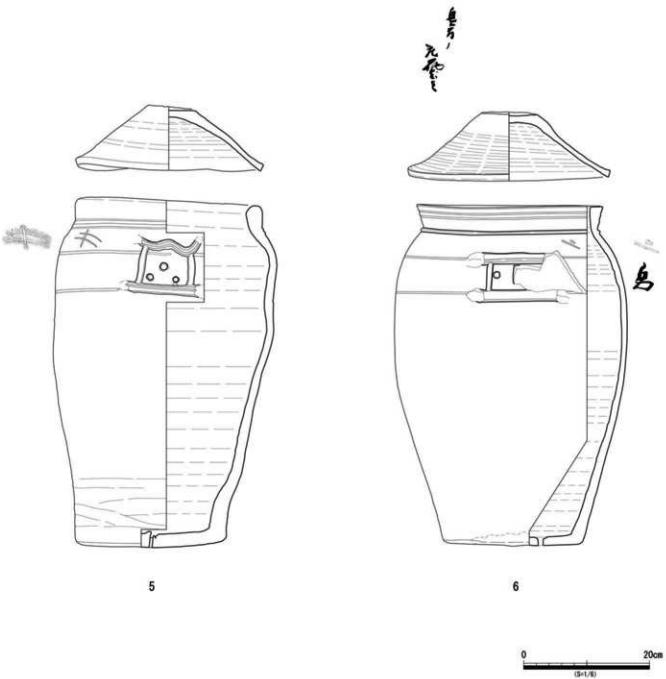
0 20cm
(S=1/6)

図版Ⅳ-12　B区 69号墓　2号厨子（2）



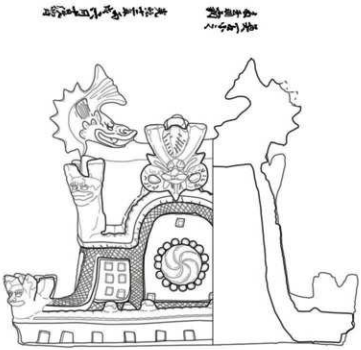
第Ⅳ-13図　B区 69号墓　3号厨子（3）4号厨子（4）

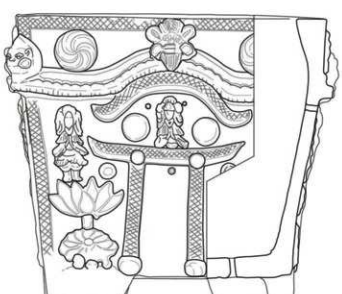
図版Ⅳ-13　B区 69号墓　3号厨子（3）4号厨子（4）



第Ⅳ-14図　B区 69号墓　7号厨子（5）11号厨子（6）

図版Ⅳ-14　B区 69号墓　7号厨子（5）11号厨子（6）





7

0 20cm
(S=1/6)

第Ⅳ-15図　B区 69号墓　9号厨子（7）

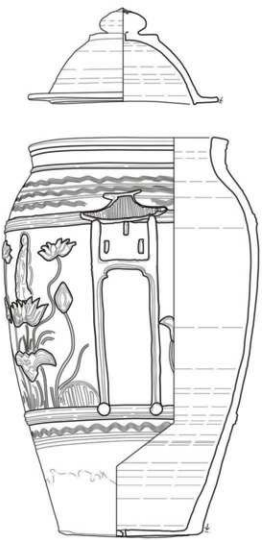
銘書(底・四面)

銘書(身・口縁部)

7

0 20cm
(S=1/6)

図版Ⅳ-15　B区 69号墓　9号厨子（7）



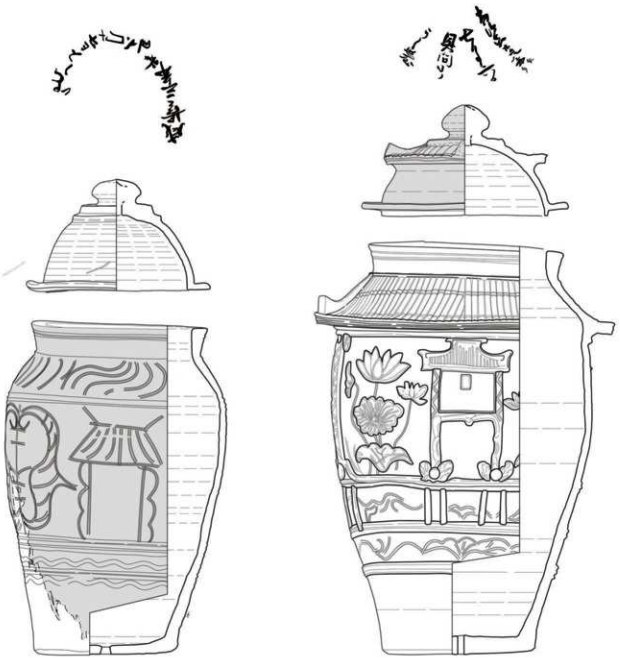
8

9

0 20cm
(S=1/6)

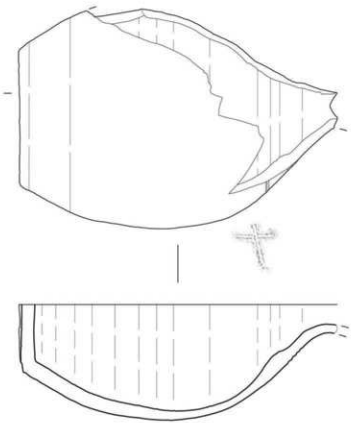
第Ⅳ-16図　B区 69号墓　12号厨子（8）13号厨子（9）

図版Ⅳ-16　B区 69号墓　12号厨子（8）13号厨子（9）



第Ⅳ-17図　B区 69号墓　14号厨子（10）15号厨子（11）

図版Ⅳ-17　B区 69号墓　14号厨子（10）15号厨子（11）



12

13

第Ⅳ-18図　B区 69号墓　16号厨子（12）22号厨子（13）

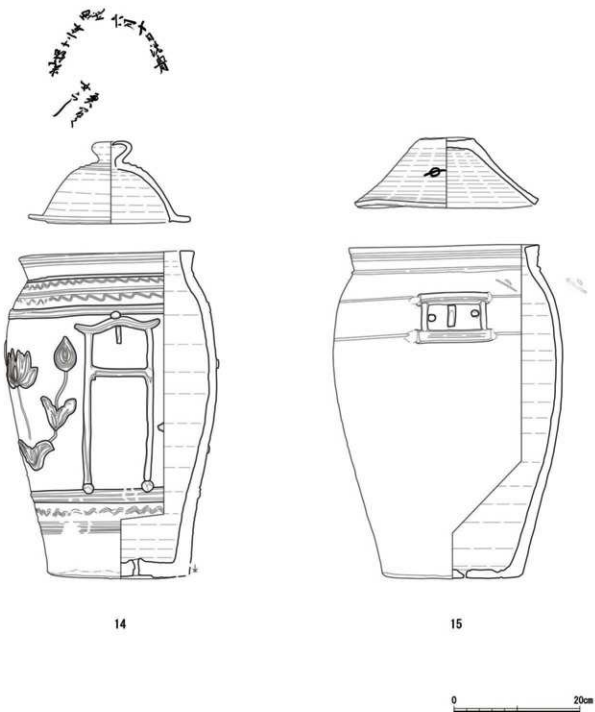
12

0 1m
(S=1/3)

13

0 20cm
(S=1/6)

図版Ⅳ-18　B区 69号墓　16号厨子（12）22号厨子（13）



第Ⅳ-19図　B区 69号墓　17号厨子（14）21号厨子（15）

図版Ⅳ-19　B区 69号墓　17号厨子（14）21号厨子（15）

図版Ⅳ-20　B区 69号墓　5号厨子（16）6号厨子（17）

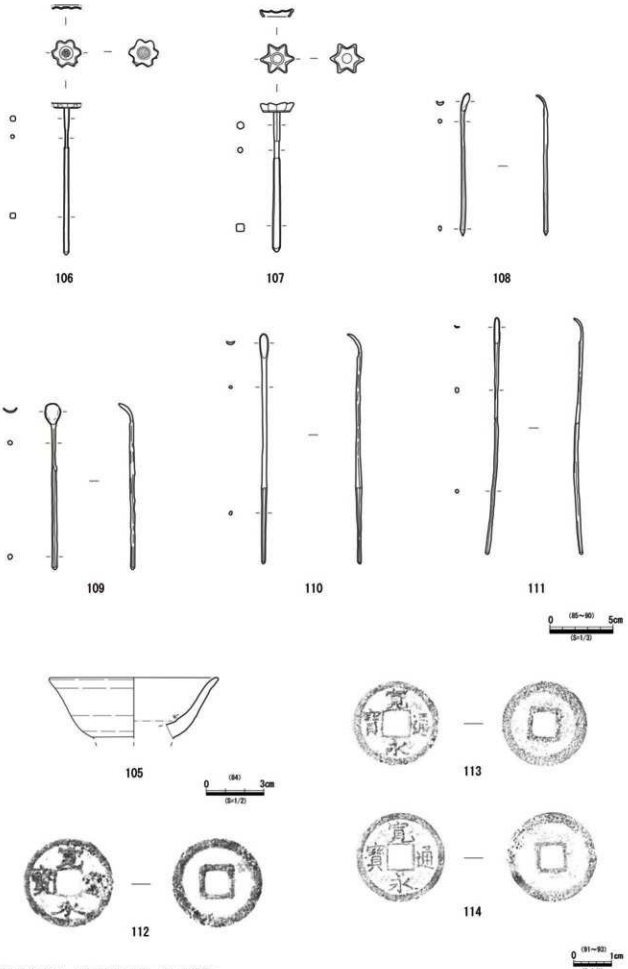
図版Ⅳ-21　B区 69号墓　8号厨子（18）10号厨子（19）

図版Ⅳ-22　B区 69号墓　18号厨子（20）19号厨子（21）

22

0 20cm
(S=1/6)

図版Ⅳ-23　B 区 69 号墓　20 号厨子（22）



第Ⅳ-20図　B区 69号墓　出土遺物

図版Ⅳ-24　B区　69号墓　出土遺物

第Ⅴ章　神山後原丘陵古墓群（D 区）の調査成果

第１節　基本層序

Ⅰ層：表土や米軍による造成などで、墓廃絶後の堆積層。

Ⅱ層：墓使用から墓廃絶までの堆積層。墓使用時の地表面と考えられる。検出箇所により下記のように細分される。

Ⅱａ層：三味台の使用時の床面。

Ⅱｂ層：墓庭の使用時の床面。

Ⅱｃ層：シルヒラシの床面でレキ層。

Ⅲ層：墓を構築するさいの造成や石積み構築に伴う造成土。検出箇所により下記のように細分される。

Ⅲａ$_1$層：三味台の石列の造成土。

Ⅲａ$_2$層：墓庭の造成土。

Ⅲａ$_3$層：墓門の石列の造成土。

Ⅲａ$_4$層：排水のためとおもわれるレキが多く、しまりのない造成土。

Ⅲｂ$_1$層：石積みの造成土。クチャブロックを含む。

Ⅲｂ$_2$層：他から持ってきたクチャによる造成土。沈まないためとおもわれる。

Ⅲｃ層：シルヒラシ造成土。岩盤の上に敷かれる粘性の強めの粘質土。

Ⅲｄ$_1$層：モルタルの土台となる造成土。表面にモルタルを貼るために扁平な石を敷いていたとおもわれるが、検出時にモルタルが剥がれていたので石がほとんど残っていなかった。

Ⅲｄ$_2$層：墓屋根のマウンド状を形成する造成土。転圧を受けている。

Ⅲｄ$_3$層：褐色の粘質土とレキ混じりの砂質シルトが交互に堆積する造成土。

Ⅲｄ$_4$層：ｄ$_3$層よりしまりの良い造成土。

※確認掘削により、ｄ$_4$層より下はレキ造成を確認している。

Ⅳｂ層：マージの地山。統一層序Ⅶ層に相当。

Ⅴ層：石灰岩の岩盤。統一層序Ⅷ層に相当。

第２節　遺構

掘込式の破風墓である。石灰岩丘陵の斜面を利用して構築しており、北東向きに墓口を造る。米軍の基地造成のために墓庭の約 1/4 が破壊される。

屋根が切妻形で、上に高く水平の眉が短く突き出て後ろの屋根も短い。相方の石積みで囲いモルタルで全体を覆うが、ほとんどが剥がれ落ちている。屋根の左右にも石敷きを構築し、モルタルを施している。眉の横に長方形状の臼が設置され、水はけのために間に小さな石を挟んでいる。臼からモルタル貼りの石積みが庭積みの上の小さな円柱状の臼まで伸びている。

墓正面は切石の布積みで表面全体にモルタルを施す。左右の袖石は高めに造られていて、正面同様に表面全体にモルタルで覆う。袖石天井にもモルタルを施すが、一部剥がれ落ちている。墓口は高さ約 1.1 m、幅約 0.6 mで、羨道の奥行きは 0.9 mになる。門石は一枚の石灰岩で上下に何かをかけるための加工が施されている。

三味台は２段あり、墓前はいびつな長方形の一枚石を寝かせてその隙間に相方で石を入れていく。南隅

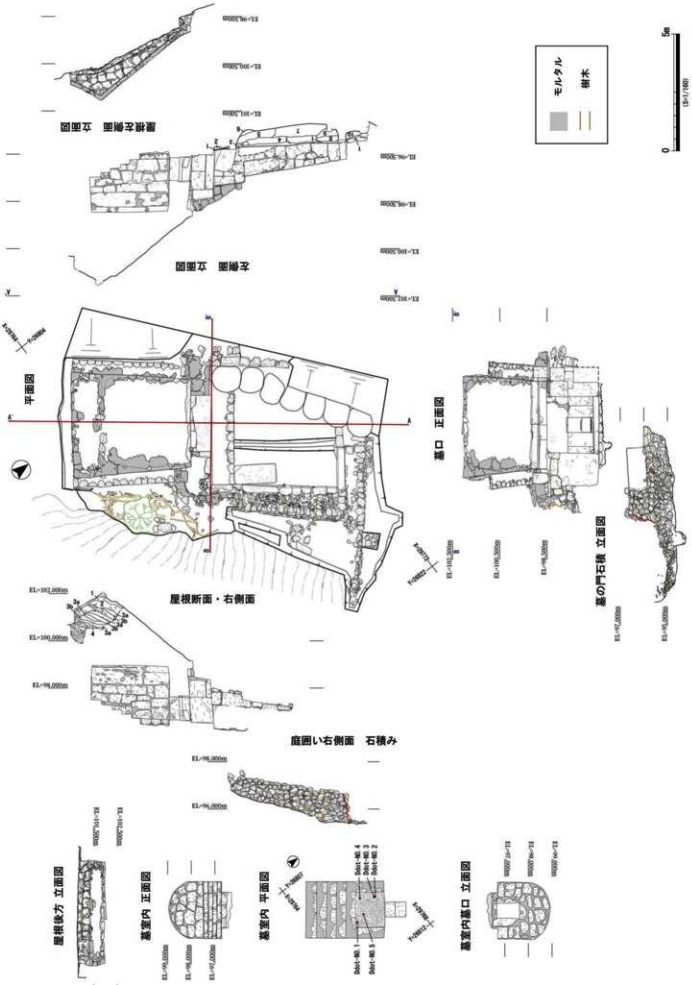
に炭が堆積していてカビアンジとおもわれるが、そこに蓋として使用されていた石はミニチュアサイズの石厨子の蓋を模していた。三味台の前に切石による石列を段状に一段配しており、その内側を石列の上面までレキを含む造成土を充填した造りになっている。2段共に、奥行き約1mになっている。

墓室内は約2.5mの高い天井に平坦コの字の5段で岩盤の上に構築される。墓室の一番ダナはコの字状に石灰岩の切石を配して、石と石との隙間をセメントで埋める。一番ダナの上に切石を配したタナを4段構築する。タナの上に構築する前後左右の壁面は切石を相方積みして、天井は布積みでアーチ状に形成する。目地をセメントで埋め、石積みの石にはノミによる加工痕が明瞭に残る。シルヒラシは幅約1.5m、奥行き約1.2mの略長方形の平面形で平たい石による石敷きを施す。そこから鉄釘等を検出した。墓室内は空で厨子は移葬されたとおもわれるが、墓口は門石と御香炉石できっちり閉められていた。

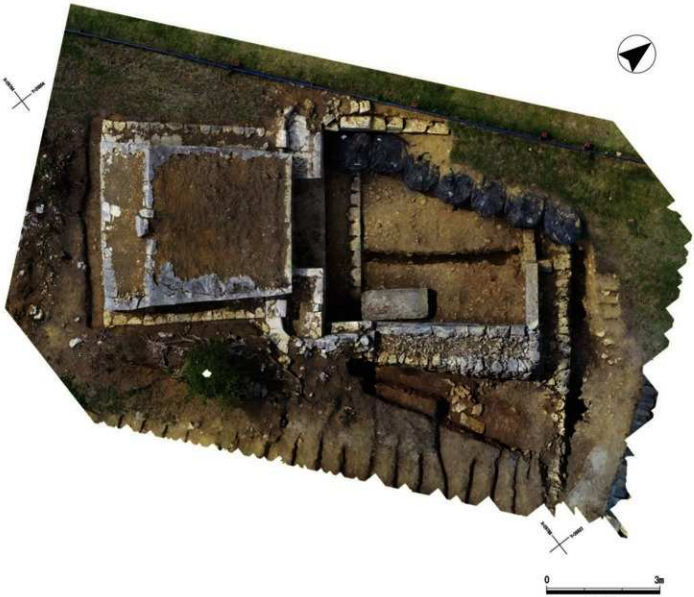
墓庭は幅約5.0m、奥行き約4.5mでやや横長の長方形になっている。庭囲いは先も述べたが左側は米軍造成により破壊されている。右側のみの残存で、3段構成になっている。内側は切石の相方積みで、L字状になり短い部分は1枚石の大きい長方形を横にして配置される。長いほうの石積みの外側に造成土を盛り、野面積みの石積みをめぐらせる。庭囲いの外に墓道とおもわれる造成土と野面の石積みで構成されたものがみられたが、一人分の道幅で石積みが途中で崩れていることから現調査では墓道かどうかは判断がつかなかった。

第Ⅴ-1表　D区古墓 基本層序対応関係表

	調査時	報告
Ⅰ層	墓庭　1層	Ⅰ
Ⅱ層	墓庭　2層	Ⅱa
	墓庭　4層	Ⅱb
	シルヒラシ　1層	Ⅱc
Ⅲ層	墓庭　3層	$Ⅲa_1$
	墓庭　5・6層	$Ⅲa_2$
	墓庭　8・10層	$Ⅲa_3$
	墓庭　7・9層	$Ⅲa_4$
	石積みトレンチ　1層	$Ⅲb_1$
	石積みトレンチ　2層	$Ⅲb_2$
	シルヒラシ　2層	Ⅲc
	墓屋根トレンチ　1層	$Ⅲd_1$
	墓屋根トレンチ　2層	$Ⅲd_2$
	墓屋根トレンチ3a・3b層	$Ⅲd_3$
	墓屋根トレンチ　4層	$Ⅲd_4$
Ⅳ層	石積みトレンチ　3層	Ⅳb層



第Ⅴ－１図　Ｄ区　遺構平面図・立面図



図版Ⅴ－１　Ｄ区　遺構平面オルソ

着手前状況〔北東から〕

墓口正面 検出状況〔北から〕

図版Ⅴ－２　Ｄ区-1

墓口正面近影 検出状況

墓室内 掘削前現況〔北から〕

墓室内 掘削前現況〔北から〕

墓室内 掘削前現況〔西から〕

墓室内 掘削前現況〔東から〕

墓室内 掘削前現況〔南から〕

墓室内 掘削前現況〔南から〕

墓室内 シルヒラシ土層〔西から〕

図版Ⅴ－３　Ｄ区－2

墓室内 シルヒラシ 完掘状況〔南から〕

羨道 右側面 検出状況〔北西から〕

カビアンジ墓石 検出状況〔北から〕

墓外 遺物出土状況〔南東から〕

サンミデー 土層〔西から〕

墓庭 完掘状況〔南から〕

墓口 完掘状況〔北から〕

庭囲い石積 検出状況〔北東から〕

図版Ⅴ－４　Ｄ区－3

墓の門 石積〔北から〕

庭囲い石積 検出状況〔東から〕

庭囲い石積 検出状況〔南東から〕

右袖石・右庭囲い〔西から〕

屋根 石列 検出状況〔西から〕

屋根後方 検出状況〔南から〕

屋根 土層断面〔南から〕

屋根後方 堆積状況〔東から〕

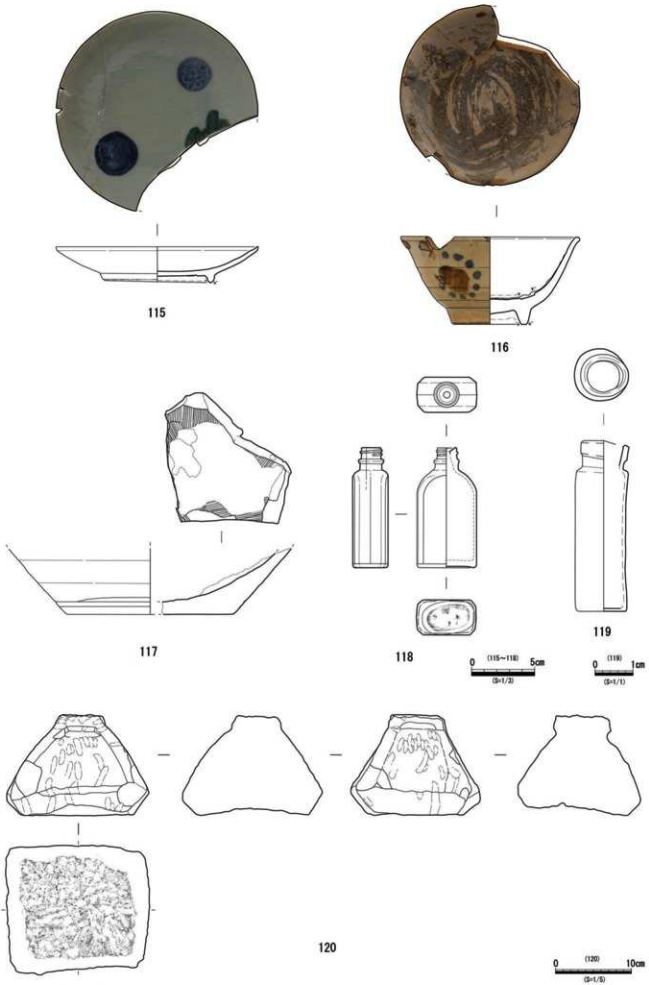
図版Ⅴ－５　Ｄ区－4

第３節　遺物

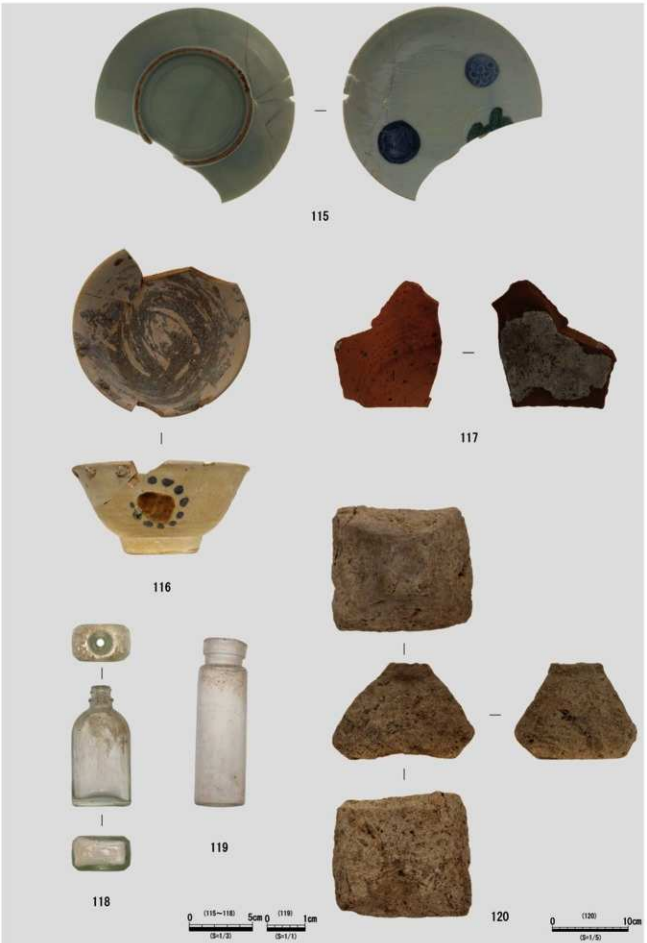
Ｄ区の古墓は、墓の改葬がしっかりと行われているとおもわれ、墓室内にはほとんど遺物がなく、きっちり墓口も閉められていた。Ｄ区では 69 点の遺物が出土した。もっとも多く出土したのは平瓦が 13 点、次いで沖縄産施釉陶器が 11 点、沖縄産無釉陶器 7 点となる。他にガラス製品、プラスチック製のクシや小杯等が出土している。出土した厨子はマンガン焼き締め厨子片、上焼ツノ型厨子片で改葬のさいに破棄されたものとおもわれる。またカビアンジの上に置かれた小型の石厨子蓋が出土したが、転用なのか石厨子の蓋を模倣したものなのか今後検討を要する。他にシルヒラシより鉄製の釘と青銅製の釘が出土していて、風葬のさいの棺箱の釘とおもわれる。接収前の改葬が行われたとおもわれるので、ガラス製品やプラスチック製品等の出土品は米軍の可能性が高い。

第Ｖ－２表　Ｄ区　出土遺物観察表

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量（cm/g）		観察事項	出土地点
第Ｖ－２図・図版Ｖ－６	115	本土産磁器	皿	口縁～底部	口径 器高 底径	16.0 2.8 8.4	全体に施釉し、高台を釉剥ぎして丸い高台端部を露出する。内面に型成形による文を全体に施し、3つの丸文に「松」「竹」「梅」をそれぞれに施文する。	4 墓上部 清掃中
	116	沖縄産施釉陶器	碗 Ⅲ類Ｂｂ有	口縁～底部	口径 器高 底径	14.0 6.95 5.75	口縁はゆるい外反で、胴部にナデ調整痕が残る。やや厚い白化粧のに透明釉を施すが、生焼けのため透明度がほとんどない。胴部内面は蛇の目釉剥ぎし、高台端部は白化粧ごと釉剥ぎする。高台にアルミナ痕が付着する。胴部に点花文を3つ配する。内面全体にモルタルが付着する。	13 墓外 盛土一括
	117	沖縄産無釉陶器	擂鉢	胴部～底部	口径 器高 底径	— 5.2 13.2	外に開く胴部に平坦の底部。胴部・底部ともに丁寧なナデ調整。あまい焼成。胴部内面は擂目を潰すようにモルタルが付着。擂鉢以外の目的での使用も考えられる。	3 墓外
	118	ガラス製品	薬品瓶？	口縁～底部	口径 器高 底径	1.6 9.5 4.3×2.8	ネジ栓の口縁で口唇がやや内面やや下方に外傾して口縁内径を狭める。頸部に1条の突帯を成形する。なで肩のやや長い胴体で、底部は上げ底。底部に「4」「6」の数字と記号状のエンボスがみられる。	10 墓上一括
	119	プラスチック製品	瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	0.8 4.5 1.3	用途不明の小型の瓶。円筒の胴部。	7 墓外 盛土一括
	120	石製家型	蓋	—	上部径 器高 下部径	7.1 13.3 14.0	寄棟形の小型のサンゴ製の蓋。粗い造りで、棟は四角に成形され全体がおにぎりの様な体部で、屋根と垂木との間にによい機線がみられる。ノミ状工具で成形後、全体を平滑に仕上げる。下部はノミ痕が明瞭で中央が凹む。カビアンジを蓋するように使用されていた。	23 カビアンジ


115
116
117
118
119
120
0 (115～118) 5cm
(S=1/3)
0 (119) 1cm
(S=1/1)
0 (120) 10cm
(S=1/5)

第Ⅴ－２図　Ｄ区 出土遺物


115
117
116
118
119
120
0 (115~118) 5cm
(S=1/3)
0 (119) 1cm
(S=1/1)
0 (120) 10cm
(S=1/5)

図版Ⅴ－６　Ｄ区 出土遺物

第VI章　自然科学分析の成果

パリノ・サーヴェイ株式会社

第1節　平成30年度　市道宜野湾11号整備予定地の現地調査

はじめに

市道宜野湾11号は、戦後米軍の接収により普天間飛行場が建設されたため、消失した宜野湾街道（普天間並松）の付け替え道路として国道330号の交通量の緩和を目的に整備されている。

これまでにも調査地周辺では、試掘調査が行われており、遺構・遺物の確認と共に、旧地形の検討や自然科学分析を実施し情報を蓄積してきた。

本業務は平成30年度市道宜野湾11号予定地の発掘調査に伴うもので、現地調査と共にサンプリングを実施し、今後の自然科学分析も視野に入れた情報の収集を目的としている。

1．普天間飛行場の概要

普天間基地は、琉球層群からなる更新世の段丘面上に位置する。宜野湾市域では、更新世の段丘面が中位段丘上位面（標高90m以上）・下位面（50～90m）と低位段丘上位面（30～40m）・下位面（10～30m）の4面に区分されている（上原，2000）。今回の調査地である普天間基地は、中位段丘上位面および下位面に立地している。段丘面の高度分布から、本段丘面は、木庭（1990）の中位段丘面（ESR年代でほぼ20万年前）に対比されることが推定される。中位段丘面上には、島尻マージと称される赤・黄色土が厚く堆積している。中位段丘面の東部には、中新世後期～更新世初期の泥岩を主とする島尻層群からなる丘陵が広がっている。島尻層群は、中位段丘上位面と下位面を境界とする段丘崖付近にも露出している。今回の調査地点は、中位段丘上位面～段丘崖に相当する区域に位置している（上原，2000）。

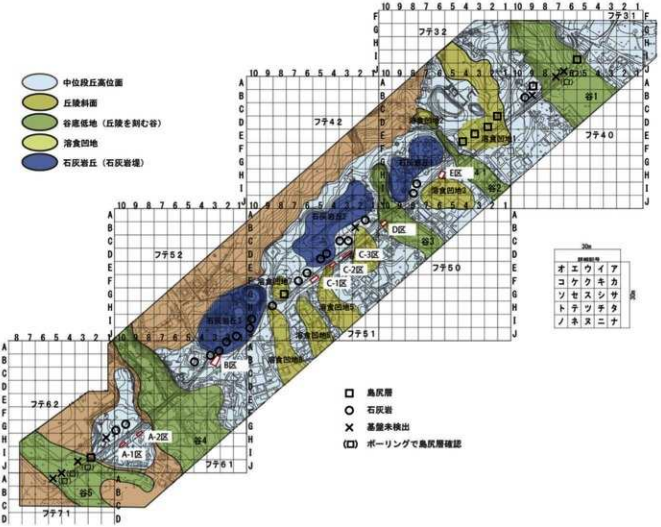
今回の調査地点は、沖縄古来の土壌分類名称では島尻マージの黒土マージにいずれも分類される。これは現代の土壌分類では、成帯内性土壌の石灰質土壌の斑紋型テラフスカ様土に分類される（テラ・フスカとは、ラテン語の「褐色の土」を意味する）。

斑紋型テラフスカ様土は、中位段丘上位面に広く分布し、土層が厚く、下層には角塊状構造が発達し、構造単位の表面には表層から移動集積した粘土によって薄い皮膜が形成され、下層下部と母材上部に多数の鉄やマンガンの斑紋があることで特徴づけられる。しかし、土壌の母材由来については諸説があり、真相はあきらかにされていない。ところで、マンガン斑は一見して有機物と見間違い易く注意が必要であるが、マンガン斑の集積は土層が緻密で排水のやや不良な状態を示している。

2．調査地の地形と層序の概観

この地域の地形は、調査における堆積物の観察および現地踏査、地形図判読などから、いくつかの地形単位に区分される。今回の調査区は基地南東側の台地面であり、北西側には段丘崖斜面が確認できる。調査地周辺は、石灰岩堤、埋没の痕跡を示す谷状凹地、埋没したドリーネの可能性がある溶食凹地が、これまでの試掘調査などで確認されている。これらの地形面は、宜野湾市史における中位段丘Ⅰ面（中位段丘高位面）、石灰岩丘、丘陵斜面、丘陵上を刻む谷、谷底低地にそれぞれ対比される（上原，2000）。

第VI-1図の地形分類図は、上原（2000）を元にこれまでの試掘調査成果を踏まえて加筆をしたものである。調査区は基地の南東側の中位段丘Ⅰ面（中位段丘上位面）位置する。調査区の北西側には石灰岩丘（堤）が



第Ⅵ－１図　調査地周辺の地形分類

連なり、石灰岩丘の南西側と基地境界線の間が調査範囲となっている。この台地面ではマージが厚く累重する。特にフテ 51 区の台地部で顕著であり、平均層厚は 2 m程度、フテ 40 付近では最大層厚は 3m を超える。ただし、多くの箇所でマージ上位が改変を受け、本来の層厚は不明な点が多い。基盤は基本的に琉球層群の石灰岩からなるが、一部、島尻層群上位にマージが累重する箇所も見られる。

石灰岩丘（堤）は、北東～南西方向に走向する琉球層群によって構成される基盤岩の高まりである。石灰岩丘上では、基盤層である琉球層群が浅い深度で検出される、あるいは現地表面直下に琉球層群が露出している。基盤岩は、人為的攪乱層であるⅠ・Ⅱ層ないし、マージの薄層により覆われる。

谷壁斜面および谷底部では、基盤が島尻層群によって構成される傾向がある。この傾向は、これまでの調査時に観察されたものと同様である。島尻層群を基盤とする谷底部では、基盤上位に直接Ⅱ層が累重する。谷壁斜面部では、マージの累重も見られる。この斜面のマージは分層が困難なものが多く、下位に向けた移動なども推測される。谷壁斜面上部では 4m 近いマージが直接島尻層群上位に累重する箇所もある。

本調査区には５つの谷地形が認められ、便宜上、北側より谷１－５とした。また、溶食凹地および石灰岩丘に関しても番号を付し整理した（第Ⅵ- １図）。

３．調査経過

現地での試料採取は発掘調査の進捗状況やその成果に合わせ実施した。試料採取は、発掘担当者と協議し、分析が必要と考えられる箇所において実施した。試料採取の実施日は、7 月 19 日、9 月 14 日、10 月 3 日である。

また、現地における観察および記載は、6月5日、6月20日、7月11日、7月26日、9月26日、9月27日、10月2日に実施している。

試料はA-2区のピット（AS-027、AS-037、AS-040、AS-049）、東壁、北壁、C-2区の礫敷き西壁、C-3区の東壁、E区西壁から採取した。採取した試料は第Ⅵ-1表の試料一覧に示し、その採取箇所は附編に示した。

4．現地調査による成果

(1) A-2区（基本層序）

地形分類図によると、A-2区はマージを基盤とする台地上にあり、比較的平坦な地形を呈している。基本層序からも、マージを母材とした厚い耕作土が確認でき、人の生活に適した地域であったと言える。耕作土は、マージ上位の腐植質な土壌として確認できる。その上位も淘汰の良い砂質の耕作層となっている。表層を含む上部40cmは、3cm以下の石灰岩片などを含み客土にも似るが、基質は砂質で団粒構造を呈し、均質であることから、新しい時期の耕作土の可能性がある。

(2) A区（ピット）

試料採取は、柱穴と想定される4基（AS-027、AS-037、AS-040、AS-049）である。柱穴の掘り込み面は削平されて不明であるが、確認される法量は最上部の直径が85㎝～40㎝、深さが20㎝～60㎝を測る。AS-040、AS-049の2基は中央部にやや細い柱痕が明瞭に確認される。直の状態であることや外側の埋土も乱れていないことから、抜かずに放置された可能性もある。AS-027、AS-037の2基については、中央部の最下部に柱の痕跡が確認されるが上部程幅広くなり、外側の埋土も前者の2基に比較すると乱雑の様相を呈することから、柱を取り除く際の攪乱の可能性が想定できる。

また、これら遺構は、平面形は非常に大きいことが特徴である。掘り込み面が上位にあり大型の土坑を呈していたか、そのほかの理由で大きく掘りこんだか、現状では理由を見いだせない。今後の周辺の調査事例を注視したい。

(3) C-2区（礫敷き遺構）

C-2区では、礫敷き遺構が確認された。現状では、道を呈するような連続性は確認できない。上位の堆積を考えると攪乱を受けた可能性もある。基地内の既調査では、C区付近に礫敷き遺構が確認されている。さらに、基地外にある現在の道路とも重なることからも、当時からこの場所に道が存在した可能性がある。今回、礫敷き遺構の連続性は確認できなかったが、このようなことから、一連の遺構(礫敷きの道)の可能性もがあり、引き続き周辺の調査が望まれる。

(4) C-2区（西側谷底部盛土）

最下部ではマージが確認されている。マージ上位はやや暗色で非常に淘汰の良く混入物が少ない。耕作土の可能性もあるが、地形分類図でも示されているように、溶食凹地に位置することを考えると周辺の流れ込みも想定される。この上位は混入物が多く、サイズの異なる土塊と石灰岩片が共に混在し、2次的な層位と考えられる。一定の時間をもって堆積する谷埋土ではなく、土塊が形を残していることを考慮すると、一時的もたらされた客土と想定される。この整地層の基質は腐植質で耕作土と類似することから耕作土が想定される。

(5) C-3区(基本層序)

下部にマージが確認できる。上位は耕作土で非常に砂質である。これまでの普天間飛行場の試掘調査の成果を考慮すれば、近世から現代の比較的新しい時期の耕作土と想定される。とくに耕作土上部は、団粒構造が顕著である。耕作土は比較的薄い。これは東側に埋没する谷が確認されることから、この谷に向けての流

出が顕著であったと想定される。現表土は堆積状況から考えて整地層である。

この調査区には、長軸で 4m 程度の暗色部が確認される。この遺構は住居跡などが想定されたが、下部の掘削を行ったところ、遺構の根拠となるような層界が確認できなかった。地表面で定常的に水が使用され、水の浸透によるマンガンなどの化学成分の沈着なども想定される。

(6) E 区

E 区は、地形分類図の通り溶食凹地に接している。下部は島尻層群泥岩が母材の谷埋め堆積物である。その上位は粘質ではあるが母材がマージである。この境界は不整合となっており、掘削後に周辺マージを投入した可能性がある。この堆積は、均質であることから耕作地の造成の可能性もあるが、このことを見極めるためには、広範囲の調査が必要である。

最下部は、調査終了後に下部を重機で深堀をしたが、青灰色の粘土質の堆積となるものの混入物やその粘土の顔つきから島尻層群ではなく、基盤はさらに下位になると想定する。

5．今後の展開

分析試料は、目的を想定して採取している。

A-2 区の遺構については各層のサンプルを採取している。遺構の時代・時期を検討するために放射性炭素年代測定が検討される。また、遺構の用途の検討のために、微細物分析を行ない、遺構の機能時の痕跡を探ることが肝要である。調査を行ったピットでは可能性が低いもの、植栽痕の可能性なども考慮される場合は、花粉分析や植物珪酸体分析などの植物に関わる情報の収集も有効である。

A-2 区、C-3 区など基本層序では、遺物の出土が少なかったことを考慮すると、ピットと同様に堆積層の年代測定により年代値を抑えること重要となる。また、基本層序の花粉分析による古環境の検討は、一般的に有効な手法であるが、亜熱帯地域の沖縄では花粉の溶解が想定され、A-2 区、C-3 区のような好気的環境下ではなじまない。ただし、花粉分析で得られる微粒炭は、無機物であることから残りが良く、その増減により人の影響を考えることができることから、有効な手法の一つと考える。また、土壌の理化学的な分析も耕作を考えるうえで重要な手法である。農耕を行なう上での施肥などの情報を得ることが出来る。一方、古環境の検討においては、微細物分析が有効となる。有機物である花粉とは異なり、微細物分析から回収される炭化種子などは分解に対して強く、有効である。その他微細な遺物も当時の生業を考えるうえで重要な情報となる。

C-2 区の石敷き遺構は、年代測定など基本層序と同様な分析が想定されるが、石灰岩の大きさや形状など、微細物分析を含めた状況の記載は必要である。

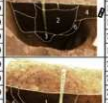
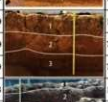
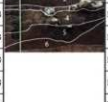
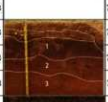
E 区の下部は、溶食凹地縁辺部の低地堆積物である。台地上の好気的環境下にある A-2 区や C-3 区と異なり、湿地では花粉などの微化石の保存は良好な傾向があることから、古環境の検討が望まれる。また、ここでは、島尻層群泥岩を母材とする溶食凹地の堆積物を削平し、マージ母材の耕作土？が確認できることから、古環境の検討と合わせて、土地利用を想定した耕作の痕跡の検討も望まれる。

引用文献

上原冨二男（2000）宜野湾市の地形・地質・水.「宜野湾市史　第 9 巻　資料編 8　自然」, p.55-124, 宜野湾市教育委員会文化課.

木庭元晴（1990）琉球列島第四紀のサンゴ礁形成と島弧変動. サンゴ礁地域研究グループ編 「熱い自然サンゴ礁の環境誌」, p.155-175.

第Ⅵ－１表　試料一覧

地区	採取地	試料番号	試料の質	採取日	調査状況	土壌の状態				備考
						土色			岩質	
A-2区	AS-027	No.1	土壌	2018.07.19		10YR	4/6	褐色	砂質シルト	遺構の中央部と外側では差は見られない。 柱痕は確認できない。 母材は淡い腐植土でマージ塊が疎らに混じる。 5mm>の黒色塊がある。炭・腐植・マンガンか不明である。
		No.2	土壌	2018.07.19		10YR	4/6	褐色	砂質シルト	
		No.3	土壌	2018.07.19		10YR	4/4	褐色	砂質シルト	
		No.4	土壌	2018.07.19		10YR	4/6	褐色	砂質シルト	
		No.5	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/4	褐色	砂質シルト	
		No.6	土壌	2018.07.19		10YR	4/6	褐色	砂質シルト	
	AS-037	No.1	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4	褐色	砂質シルト	中央部(No.1)の砂質(極細粒砂)シルト。 腐植が主体で10～5mmのマージが混じる。 下部の(No.2、No.3)は粘質の腐植土で全体に粘土質シルト。 外側(No.4、No.5、No.6、No.7)はマージを母材とした埋土。明瞭のマージが霜降り状混じる。 この遺構が柱穴とするならば、直径は60cmは非常に大きい。 他の用途も含める類例の検討が必要である。
		No.2	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/3	褐色	粘土質シルト	
		No.3	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4	褐色	粘土質シルト	
		No.4	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/6	褐色	シルト	
		No.5	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/6	褐色	シルト	
		No.6	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4	暗褐色	シルト	
		No.7	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/6	褐色	シルト	
	AS-040	No.1	土壌	2018.07.19		10YR	2/3	黒褐色	粘土質シルト	中央部(No.1、No.2、No.3)は砂質シルト。炭を多量に含む。下部(No.3)は孔隙が多い、まだらにマージ粒を含む。 外側の一部(No.8)は腐植が多く、マージは少ない。 柱穴とするならば、中央部の柱痕は小さい。一方で遺構全体は大きく、柱痕が斜めに傾斜していることが特徴的である。
		No.2	土壌	2018.07.19		10YR	2/2	黒褐色	粘土質シルト	
		No.3	土壌	2018.07.19		10YR	3/4	暗褐色	粘土質シルト	
		No.4	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/4	褐色	シルト	
		No.5	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4	暗褐色	シルト	
		No.6	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4	暗褐色	シルト	
		No.7	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4	暗褐色	シルト	
		No.8	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4	暗褐色	シルト	
		炭	炭	2018.07.19		No.1の最下部より採取				
	AS-049	No.1	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4	暗褐色	砂質シルト	中央部(No.1)は層界にマンガンの濃集らしきものがある。 外側(No.2、No.3、No.4、No.5)はマージ(Ⅳ・Ⅵ)を母材とする埋土を想定。 遺構全体的に粘質強い。 焼土粒、炭、マンガン(2mm>)が散在。 中央部は柱痕と想定される。柱痕の層界は明瞭であることから、抜かずにそのまま放置の可能性も考えられる。
		No.2	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/4	暗褐色	粘土質シルト	
		No.3	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/4	褐色	粘土質シルト	
		No.4	土壌	2018.07.19		10YR	3/4	暗褐色	粘土質シルト	
		No.5	土壌	2018.07.19		10YR	3/4	暗褐色	粘土質シルト	
	東壁	No.1	土壌	2018.07.19		10YR	3/3	暗褐色	砂質シルト	孔隙が多い。現在の耕作土。
		No.2	土壌	2018.07.19		10YR	3/3	暗褐色	砂質シルト	焼土、ニービ、炭が疎らに入る。砂含む。 30mm>の石灰岩が混ざる。
		No.3	土壌	2018.07.19		10YR	3/4	暗褐色	砂混り粘土シルト	海浜の良い耕作土。
		No.4	土壌	2018.07.19		10YR	3/4	暗褐色	粘土質シルト	Ⅵ層母材。初期の耕作層もしくは短期間の耕作層。下端との境は不明瞭な不整合である。
		No.5	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/6	褐色	シルト	マージはⅥ層に似る。
	北壁	No.1	土壌	2018.07.19		10YR	3/4	暗褐色	砂質シルト	現在の耕作土。 孔隙多い。
		No.2	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4	褐色	砂質シルト	炭、焼土が多い。東壁の耕作土と同じ砂が多く、海浜が良い。下端との境は不整合。
		No.3	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4	褐色	粘土質シルト	マージはⅤ層に似る。
C-2区	礫敷き北壁	No.1	土壌	2018.10.03		10YR	4/4	褐色	砂質シルト	西側の谷を埋めるための盛土。 上位は上部の礫敷き遺構である(現代)。
		No.2	土壌	2018.10.03		10YR	4/6	褐色	砂質シルト	西側の谷を埋めるための盛土。
		No.3	土壌	2018.10.03		10YR	4/6	褐色	砂質シルト	下部の礫敷き遺構。
		No.4	土壌	2018.10.03		10YR	4/6	褐色	砂質シルト	礫を敷設するための整地層。
		No.5	土壌	2018.10.03		10YR	3/4	褐色	砂質シルト	谷を埋めるための盛土。
		No.6	土壌	2018.10.03		7.5YR	4/6	褐色	粘土質シルト	マージと想定。
C-3区	南壁	No.1	土壌	2018.10.03		7.5YR	3/4	暗褐色	砂質シルト	団粒構造を呈し耕作土と想定される。腐植質。本層上位は整地土である。
		No.2	土壌	2018.10.03		7.5YR	3/4	暗褐色	砂質シルト	マージにも似るが、わずかながら混入物も確認されることから、耕作土と想定。一時的なものか?
		No.3	土壌	2018.10.03		7.5YR	4/6	褐色	シルト	マージと想定。
E区	西壁	No.1	土壌	2018.09.14		10YR	4/6	褐色	粘土質シルト	削平後の盛土である(2回目)。 下位と同様に耕作のための盛土の可能性もある。
		No.2	土壌	2018.09.14		10YR	4/6	褐色	粘土質シルト	
		No.3	土壌	2018.09.14		10YR	4/6	褐色	粘土質シルト	母材はマージ。 谷埋め堆積物の削平後(1回目)、耕作のために盛土をした可能性あり。海浜が良いことを考慮すると、耕作が行われた可能性あり。
		No.4	土壌	2018.09.14		10YR	4/6	褐色	粘土質シルト	
		No.5	土壌	2018.09.14		10YR	4/4	褐色	粘土質シルト	
		No.6	土壌	2018.09.14		10YR	3/4	暗褐色	シルト質粘土	谷埋め堆積物(母材は島尻層群泥岩)。
		No.7	土壌	2018.09.14		10YR	3/3	暗褐色	シルト質粘土	谷埋め堆積物(母材は島尻層群泥岩)。調査後の重機掘削で青灰色の粘土を確認(混入物や粘土の質から島尻層群の基盤はさらに下位と想定。

第２節　令和元年度　市道宜野湾 11 号整備予定地における自然科学分析

はじめに

市道宜野湾 11 号は、戦後米軍の接収により普天間飛行場が建設されたため、消失した宜野湾街道 (普天間並松) の付け替え道路として国道 330 号の交通量の緩和を目的に整備されている。

これまでにも調査地周辺では、試掘調査が行われており、遺構・遺物の確認と共に、旧地形の検討や自然科学分析を実施し情報を蓄積してきた。

本報告では、平成 30 年度に実施した市道宜野湾 11 号予定地の発掘調査に伴う現地調査の際に採取した土壌試料を対象に、遺構の時期や用途、耕作や整地に伴う検討を目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析・微粒炭分析、微細物分析を実施する。

１．試料

試料は、平成 30 年度の発掘調査の際、弊社社員が現地に赴き、発掘担当者と協議の結果分析が必要と考えられる箇所において実施した。試料は A-2 区のピット (AS-027、AS-037、AS-040、AS-049)、東壁、北壁、C-2 区の礫敷き西壁、C-3 区の東壁、E 区西壁から採取した。現地調査による成果については、前報を参照願いたい。

採取した土壌、並びに抽出した炭化物を対象に、放射性炭素年代測定 9 点、花粉分析・微粒炭分析 12 点、微細物分析 11 点をを実施する。試料の層相、採取位置などの詳細、および分析項目一覧を第Ⅵ- 2 表に示す。

２．分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料は AMS 法で実施する。炭化物試料は表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理：AAA)。濃度は HCl、NaOH 共に最大 1mol/L である。一方、試料が脆弱で 1mol/L では試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の NaOH の状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

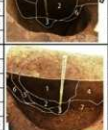
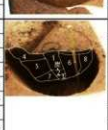
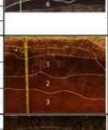
土壌試料は、後代の根などをピンセットで除去したあと、1M の塩酸を加えて含まれる炭酸塩を溶かし、その後中性になるまで水洗を繰り返す。試料をすりつぶして乾燥させ、分析用試料とする (HCl と記す)。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いて、14C の計数、13C 濃度 (13C/12C)、14C 濃度 (14C/12C) を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局 (NIST) から提供される標準試料 (HOX- Ⅱ)、国際原子力機関から提供される標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-C1) の測定も行う。

δ 13C は試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とし

第Ⅵ－２表　試料一覧および分析項目一覧

地区	採取地	試料番号		AMS	花粉・微粒炭	微細物	備考	分析備考
A-2区	AS-027	No.1					遺構の中央部と外側では差は見られない。 柱痕は確認できない。 母材は淡い褐植土で〜マージ地が確らに混じる。 5mm>の黒色塊がある。炭・腐植・マンガンが不明である。	遺構の用途、時期の検討
		No.2		1				
		No.3				1		
		No.4						
		No.5						
		No.6						
	AS-037	No.1					中央部(No.1)の砂質(施細粒)シルト。 腐植が主体で10〜5mmのマージが混じる。 下部の(No.2、No.3)は粘質の腐植土で全体に粘土質シルト。 外側(No.4、No.5、No.6、No.7)はマージを母材とした埋土。 明暗のマージが霜降り状混じる。 この遺構が柱穴とするならば、直径は60cmは非常に大きい。 他の用途も含める類例の検討が必要である。	遺構の用途、時期の検討
		No.2						
		No.3		1		1		
		No.4						
		No.5						
		No.6						
		No.7						
	AS-040	No.1		1			中央部(No.1、No.2、No.3)は砂質シルト。炭を多量に含む。下部(No.3)は孔隙が多い、まだらにマージ粒を含む。 外側の一部(No.8)は腐植が多く、マージは少ない。 柱穴とするならば、中央部の柱痕は小さい。一方で遺構全体は大きく、柱痕が斜めに傾斜していることが特徴的である。	遺構の用途、時期の検討
		No.2						
		No.3				1		
		No.4						
		No.5						
		No.6						
		No.7						
		No.8						
		炭						
	AS-049	No.1		1		1	中央部(No.1)は層界にマンガンの濃集らしきものがある。 外側(No.2、No.3、No.4、No.5)はマージ(Ⅳ・Ⅵ)を母材とする埋土を想定。 遺構全体的に粘質強い。 埋土粒、炭、マンガン(2mm>)が散在。 中央部は柱痕と想定される。柱痕の層界は明瞭であることから、抜かずにそのまま放置の可能性も考えられる。	遺構の用途、時期の検討
		No.2						
		No.3						
		No.4						
		No.5						
	東壁	No.1					孔隙が多い。現在の耕作土。	耕作とその時期の検討
		No.2			1		埴土、ニーピ、炭が確らに入る。砂含む。 30mm>の石灰岩が混ざる。	
		No.3		1	1	1	陶汰の良い耕作土。	
		No.4			1	1	Ⅵ層母材。初期の耕作層もしくは短期間の耕作層。下層との境は不明瞭な不整合である。	
		No.5					マージはⅥ層に似る。	
	北壁	No.1					現在の耕作土。 孔隙多い。	耕作とその時期の検討
		No.2		1	1	1	炭、埴土が多い。東壁の耕作土と同じ砂が多く、陶汰が良い。下層との境は不整合。	
		No.3					マージはⅤ層に似る。	
C-2区	礎敷き北壁	No.1					西側の谷を埋めるための盛土。 上位は上部の礎敷き遺構である(現代)。	整地層の検討
		No.2					西側の谷を埋めるための盛土。	
		No.3					下部の礎敷き遺構。	
		No.4				1	礎を敷設するための整地層。	
		No.5			1	1	谷を埋めるための盛土。	
		No.6					マージと想定。	
C-3区	南壁	No.1				1	団粒構造を呈し耕作土と想定される。腐植質。 本層上位は整地土である。	耕作とその時期の検討
		No.2		1	1	1	マージにも似るが、わずかながらも混入物も確認されることから、耕作土と想定。一時的なものか？	
		No.3					マージと想定。	
E区	西壁	No.1					削平後の盛土である(2回目)。 下位と同様に耕作のための盛土の可能性もある。	耕作とその時期の検討 当時の環境の検討
		No.2			1			
		No.3		1	1		母材はマージ。	
		No.4			1		谷埋の堆積物の掘削後(1回目)、耕作のために盛土をした可能性あり。陶汰が良いことを考慮すると、耕作が行われた可能性あり。	
		No.5			1			
		No.6		1	1		谷埋の堆積物(母材は島尻層群泥岩)。	
		No.7			1		谷埋の堆積物(母材は島尻層群泥岩)。調査後の重機掘削で青灰色の粘土を確認(混入物や粘土の質から島尻層群の基盤はさらに下位と想定。	
合計点数				9	12	11		

1)AMS：放射性炭素年代測定、花粉・微粒炭：花粉分析・微粒炭分析、微細物：微細物分析

た年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach,1977)。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5,730±40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の 14C 年代を反映している) 等を用いて作られている。暦年較正に用いるソフトウエアは Oxcal4.3(Bronk,2009)、較正曲線は Intcal13(Reimer et al.,2013) を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値 (1 年単位) を記す。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (14C の半減期 5,730±40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の 14C 年代を反映している) 等を用いて作られており、最新のものは 2013 年に発表された Intcal13(Reimer et al.,2013) である。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値 (1 年単位) を記す。

(2) 花粉分析・微粒炭分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛，比重 2.2) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する (化石の少ない試料ではこの限りではない)。同定は、当社保有の現生標本や島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木･小澤 (2007) 等を参考にする。

また、花粉プレパラート中に含まれる微粒炭 (微細な炭化植物片) の含量が、自然植生に対する人類干渉の指標として有効であるとされていることから (安田 ,1987 など)、試料中に含まれる微粒炭の含量も求める。微粒炭は花粉プレパラート内に残存するものを対象とし、同定基準は山野井 (1996)、井上ほか (2002) 等を参考にする。計数は、山野井 (1996) などを参考にし、長径が約 20μm 以上の微粒炭を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭量は、山野井 (1996) などを参考とし、分析土壌量 (cc)、分析残渣量 (ml)、プレパラート作成量 (μl) を測定し、堆積物 1cc あたりに含まれる個数を一覧表に併せて示す。この際、有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。

(3) 微細物分析

土壌試料から炭化種実等を分離・抽出するために、試料 70 ～ 1,000g を常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（約 20 回)。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料 (炭化物主体) と水に沈んだ試料 (砂礫主体) を、

それぞれ粒径 4mm、2mm、1mm、0.5mm の篩に通し、粒径別に常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実の他、主に径 2mm 以上の炭化材や土器片などの遺物を抽出する。

種実同定は、現生標本や石川 (1994)、中山ほか (2010)、鈴木ほか (2018) 等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表と図で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。

種実以外は、土器片は個数と重量、最大径、炭化材は重量と最大径、炭化材主体、植物片、植物片主体、砂礫主体は粒径別重量を一覧表に併記する。分析後は、抽出物と残渣を容器に入れて保管する。

3．結果

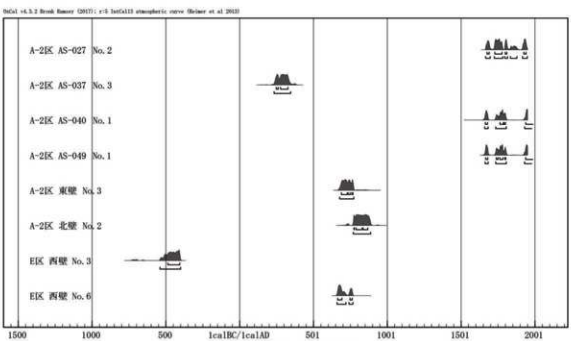
(1) 放射性炭素年代測定

結果を第VI－３表、第VI－２図に示す。試料の測定年代（補正年代）は、A-2 区の AS-027 No.2 が 155 ± 20yrBP、AS-037 No.3 が 1,750±20yrBP、AS-040 No1 が 190±20yrBP、AS-049 No.1 が 185±

第VI－３表　放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	δ13C (‰)	暦年較正用	暦年較正年代									Code No.	
							年代値							確率%		
A-2区 AS-027 No.2	炭化物	AAA	155±20	−28.72±0.34	153±20	σ	cal AD	1676 − cal AD	1691	274	−	259	calBP	10.6	pal− 12480	YU− 10962
							cal AD	1729 − cal AD	1777	221	−	173	calBP	36.1		
							cal AD	1799 − cal AD	1810	151	−	140	calBP	8.6		
							cal AD	1925 − cal AD	1941	25	−	9	calBP	12.9		
						2σ	cal AD	1667 − cal AD	1698	283	−	252	calBP	15.9		
							cal AD	1725 − cal AD	1783	225	−	167	calBP	39.5		
							cal AD	1796 − cal AD	1815	154	−	135	calBP	10.9		
							cal AD	1835 − cal AD	1878	115	−	72	calBP	10.3		
							cal AD	1916 − cal AD	1949	34	−	1	calBP	18.7		
A-2区 AS-037 No.3	炭化物	AAA	1,750±20	−28.61±0.48	1,752±21	σ	cal AD	249 − cal AD	262	1701	−	1688	calBP	13.7	pal− 12481	YU− 10963
							cal AD	278 − cal AD	328	1672	−	1622	calBP	54.5		
						2σ	cal AD	234 − cal AD	346	1716	−	1604	calBP	95.4		
A-2区 AS-040 No.1	炭化物	AaA	190±20	−25.45±0.39	192±20	σ	cal AD	1665 − cal AD	1680	285	−	270	calBP	15.9	pal− 12482	YU− 10964
							cal AD	1764 − cal AD	1787	186	−	163	calBP	23.8		
							cal AD	1792 − cal AD	1801	158	−	149	calBP	7.9		
							cal AD	1939 − cal AD	−	11	−	−	calBP	20.5		
						2σ	cal AD	1660 − cal AD	1684	290	−	266	calBP	20.0		
							cal AD	1735 − cal AD	1806	215	−	144	calBP	52.2		
							cal AD	1931 − cal AD	−	19	−	−	calBP	23.2		
A-2区 AS-049 No.1	炭化物	AaA	185±20	−28.19±0.39	186±20	σ	cal AD	1667 − cal AD	1681	283	−	269	calBP	15.0	pal− 12483	YU− 10965
							cal AD	1739 − cal AD	1750	211	−	200	calBP	8.6		
							cal AD	1763 − cal AD	1784	187	−	166	calBP	21.4		
							cal AD	1797 − cal AD	1803	153	−	147	calBP	5.0		
							cal AD	1938 − cal AD	−	12	−	−	calBP	18.2		
						2σ	cal AD	1663 − cal AD	1684	287	−	266	calBP	18.7		
							cal AD	1735 − cal AD	1806	215	−	144	calBP	54.5		
							cal AD	1930 − cal AD	−	20	−	−	calBP	22.3		
A-2区 東壁 No.3	土壌	HCL	1,265±20	−25.79±0.36	1,264±21	σ	cal AD	690 − cal AD	730	1260	−	1220	calBP	44.4	pal− 12484	YU− 10966
							cal AD	736 − cal AD	751	1214	−	1199	calBP	15.8		
							cal AD	761 − cal AD	768	1189	−	1182	calBP	8.0		
						2σ	cal AD	678 − cal AD	774	1272	−	1176	calBP	95.4		
A-2区 北壁 No.2	土壌	HCL	1,200±20	−21.21±0.31	1,199±20	σ	cal AD	775 − cal AD	777	1175	−	1173	calBP	2.2	pal− 12485	YU− 10967
							cal AD	789 − cal AD	830	1161	−	1120	calBP	37.6		
							cal AD	837 − cal AD	868	1113	−	1082	calBP	28.4		
						2σ	cal AD	770 − cal AD	888	1180	−	1062	calBP	95.4		
C-3区 南壁 No.2	土壌	HCL	5,705±25	−21.80±0.42	5,705±26	σ	cal BC	4580 − cal BC	4571	6529	−	6520	calBP	4.7	pal− 12486	YU− 10968
							cal BC	4560 − cal BC	4493	6509	−	6442	calBP	63.5		
						2σ	cal BC	4613 − cal BC	4461	6562	−	6410	calBP	95.4		
E区 西壁 No.3	土壌	HCL	2,400±20	−17.83±0.33	2,399±21	σ	cal BC	487 − cal BC	407	2436	−	2356	calBP	68.2	pal− 12487	YU− 10969
						2σ	cal BC	541 − cal BC	401	2490	−	2350	calBP	95.4		
E区 西壁 No.6	土壌	HCL	1,310±20	−18.54±0.33	1,308±20	σ	cal AD	665 − cal AD	693	1285	−	1257	calBP	48.7	pal− 12488	YU− 10970
							cal AD	748 − cal AD	763	1202	−	1187	calBP	19.5		
						2σ	cal AD	660 − cal AD	720	1290	−	1230	calBP	69.3		
							cal AD	741 − cal AD	768	1209	−	1182	calBP	26.1		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
4)AAAは酸－アルカリ－酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理、HCLは塩酸処理を示す。
5)暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。
6)暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
7)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、2σ は95%である。



※C-3区 南壁 No. 2については、極端に古い値を示したため、図より除いている。

第Ⅵ－２図　暦年較正結果

20yrBP、東壁 No.3 が 1,265 ± 20yrBP、北壁 No.2 が 1,200±20yrBP、C-3 区の南壁 No.2 が 5,705±25yrBP、E 区の西壁 No.3 が 2,400±20yrBP、同じく西壁 No.6 が 1,310±20yrBP の値を示す。

暦年較正年代は、測定誤差を 2 σとして計算させた結果、A-2 区の AS-027 No.2 が calAD 1,667 ～ 1,949、AS-037 No.3 が calAD 234 ～ 346、AS-040 No1 が calAD 1,660 以降、AS-049 No.1 が calAD 1,663 以降、東壁 No.3 が calAD 678 ～ 774、北壁 No.2 が calAD 770 ～ 888、C-3 区の南壁 No.2 が calBC 4,613 ～ 4,461、E 区の西壁 No.3 が calBC 541 ～ 401、同じく西壁 No.6 が calAD 660 ～ 768 である。

(2) 花粉分析・微粒炭分析

結果を第Ⅵ－４表に示す。いずれの試料からも花粉化石はほとんど検出されず、堆積物 1cc 当たりに含まれる花粉・胞子数も 100 個体未満であった。わずかに検出された種類は、木本花粉のマツ属 (マツ属複維管束亜属を含む)、コナラ属アカガシ亜属、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科である。

また、微粒炭数も全体的に少なく、E 区の西壁 No.7 で 300 個 /cc、A-2 区の東壁 No.2 ～ No.4、E 区の西壁 No.4 で 200 個 /cc であり、それ以外の 7 試料ではいずれも堆積物 1cc あたり 100 個未満であった。なお、微粒炭はいずれも母材推定が困難な不明型であり、木材組織や草本由来の構造を有するものは確認されなかった。

(3) 微細物分析

結果を第Ⅵ－５表に、試料 1kg あたりに換算した種実遺体群集組成を第Ⅵ－３図に示す。また、種実遺体各分類群の写真を図版Ⅵ－２に示して同定根拠とする。

分析に供された全 11 試料 5.97kg を通じて、被子植物 5 分類群 (イネ、コムギ?、イネ科、カタバミ属、ツボクサ)22 個の種実遺体が同定された。3 個 (A-2 区 AS-037 の 1 個と C-2 区 No.5 の 2 個) は炭化した微細片で同定ができなかった。種実以外は、炭化材 0.31g、炭化材主体 0.20g、植物片 0.72g、植物片主体 0.48g、砂礫主体 326.11g、土器片 1 個 1.75g(径 1.7cm) が確認された。炭化材は A-2 区 AS-049 No.1 で

第Ⅵ－４表　花粉分析・微粒炭分析結果

種　類	A-2区 東壁 No.2	A-2区 東壁 No.3	A-2区 東壁 No.4	A-2区 北壁 No.2	C-2区 礫敷き北壁 No.5	C-3区 南壁 No.2	E区 西壁 No.2	E区 西壁 No.3	E区 西壁 No.4	E区 西壁 No.5	E区 西壁 No.6	E区 西壁 No.7
木本花粉												
マツ属複維管束亜属	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－
マツ属(不明)	－	2	－	－	1	－	－	－	1	－	－	－
コナラ属アカガシ亜属	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－
草本花粉												
イネ科	－	1	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
カヤツリグサ科	－	1	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－
ヨモギ属	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
キク亜科	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－
タンポポ亜科	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－
不明花粉												
不明花粉	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－
シダ類胞子												
イノモトソウ属	14	16	5	－	－	－	1	－	－	－	－	－
他のシダ類胞子	3	11	2	－	7	6	10	－	1	9	18	3
合　計												
木本花粉	0	2	1	1	3	0	0	0	1	0	0	0
草本花粉	0	3	0	0	0	0	1	0	1	1	2	0
不明花粉	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	17	27	7	0	7	6	11	0	1	9	18	3
合計(不明を除く)	17	32	8	1	10	6	12	0	3	10	20	3
微粒炭数(個/cc)	200	200	200	<100	<100	<100	<100	<100	200	<100	<100	300
花粉・胞子数(個/cc)	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	0	<100	<100	<100	<100

1)微粒炭数、花粉・胞子数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。
2)<100:100個未満。

第Ⅵ－５表　微細物分析結果

分類群	部位・状態/粒径			A-2区 AS-027 No.3	A-2区 AS-037 No.3	A-2区 AS-040 No.3	A-2区 AS-049 No.1	A-2区 東壁 No.3	A-2区 東壁 No.4	A-2区 北壁 No.2	C-2区 礫敷き北壁 No.4	C-2区 礫敷き北壁 No.5	C-3区 南壁 No.1	C-3区 南壁 No.2	備考
草本種実															
イネ	穎(基部)	炭化	破片	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－	(個)
	穎	炭化	破片	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	(個),残存長1.2mm
	玄米	炭化	破片	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	(個),残存幅1.7mm
コムギ?	穎果	炭化	破片	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	(個),残存径1.5mm
イネ科	果実		破片	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	(個),腹面
カタバミ属	種子		完形	－	－	－	－	－	－	－	5	1	2	－	(個)
			破片	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	(個)
ツボクサ	果実		完形	－	－	－	－	－	－	－	1	－	3	－	(個)
不明	不明	炭化	破片	－	1	－	－	－	－	－	－	2	－	－	(個),AS-037:0.85mm,C-2区:2.38mm
炭化材				2.68	2.72	3.66	3.09	3.18	4.69	4.59	3.04	2.63	3.76	3.65	最大径(mm)
	2mm			－	－	0.01	0.01	－	<0.01	0.01	0.01	－	0.03	0.01	乾重(g)
	1mm			<0.01	0.01	0.02	0.11	0.02	0.01	<0.01	<0.01	0.01	0.06	0.01	乾重(g)
炭化材主体	1-0.5mm			－	－	－	0.20	－	－	－	－	－	－	－	乾重(g)
植物片	>2mm			－	－	－	－	－	－	0.17	0.08	0.03	0.02	0.14	乾重(g)
	2-1mm			－	<0.01	－	<0.01	0.01	0.02	0.07	0.02	0.02	0.01	0.13	乾重(g)
植物片主体	1-0.5mm			－	－	－	－	0.02	－	0.12	－	－	－	0.34	乾重(g),炭化材含む
砂礫主体	>8mm			－	－	－	－	－	4.99	－	126.37	5.72	－	－	乾重(g)
	8-4mm			－	－	－	－	－	－	－	77.09	2.55	－	－	乾重(g)
	4-2mm			－	－	－	－	2.78	－	－	29.31	4.78	0.62	－	乾重(g)
	2-1mm			0.41	0.38	0.33	2.00	2.37	1.50	0.87	25.68	5.15	2.58	2.31	乾重(g)
	1-0.5mm			0.52	0.42	0.65	0.89	1.89	0.78	1.46	14.16	3.32	2.34	1.89	乾重(g),炭化材含む
土器片				－	－	－	－	－	－	－	－	1.75	－	－	乾重(g)1個,径17.42mm
分析量				100	100	70	300	800	500	300	800	1000	1000	1000	乾重(g)

最も多く、0.12g を量る。次いで C-3 区の南壁 No.1 が多く、0.09g を量る。炭化材の最大径は 4.7mm(A-2 区東壁 No.4) を測る。

種実遺体 (不明を除く) の出土個数は、A-2 区の AS-027 No.3(試料 100g) が 1 個、AS-037 No.3(試料 100g) が 4 個、AS-049 No.1(試料 300g) が 1 個、C-2 区の礫敷き北壁 No.4(試料 800g) が 10 個、No.5(試料 1000g) が 1 個、C-3 区の南壁 No.1(試料 1000g) が 5 個であり、A-2 区の AS-040 No.3(試料 70g)、東壁 No.3(試料 800g)、東壁 No.4(試料 500g)、北壁 No.2(試料 300g)、C-3 区の南壁 No.2(試料 1000g) の 5 試料からは検出されなかった。

種実遺体群は、全て草本から成る。栽培種は、A-2 区から、イネの穎 (籾) が 3 個 (AS-027 No.3、AS-037 No.3、AS-049 No.1)、玄米 (炭化米) が 2 個 (AS-037 No.3) と、コムギ? の穎果が 1 個 (AS-037

No.3) の、計 6 個が確認され、全て炭化した破片である。

栽培種を除いた分類群は、イネ科の果実が 1 個 (C-2 区の礫敷き北壁 No.4)、カタバミ属の種子が 11 個 (C-2 区の礫敷き北壁 No.4、No.5、C-3 区の南壁 No.1)、ツボクサの果実が 4 個 (C-2 区の礫敷き北壁 No.4、C-3 区の南壁 No.1) の、計 16 個が確認された。いずれも明るく開けた場所に生育する人里植物に属し、中生植物 (湿生植物と乾生植物の中間の性質をもち、適潤な立地に生育する植物) を主体とする。

第Ⅵ－３図　各地点の種実遺体群集

4．考察

(1) A-2 区ピット

対象としたピット AS-027、AS-037、AS-040、AS-049 は、調査所見から柱穴と想定されている。年代測定結果を見ると、AS-027 No.2、AS-040 No1、AS-049 No.1 はほぼ同時期の値を示し、補正年代で 190 ～ 155±20yrBP、暦年代で 17 世紀後半以降 (calAD 1,660 以降) であった。これに対し AS-037 No.3 は補正年代で 1,750 ± 20yrBP、暦年代で 3 世紀前半～ 4 世紀中頃 (calAD 234 ～ 346) と古い値を示した。このことから、AS-027、AS-040、AS-049 は同時期の遺構と言える。これに対し AS-037 は時期の異なる遺構、あるいは古い時代の炭化物が混入するような堆積過程であった可能性がある。調査所見によれば、AS-037 が柱穴とするならば直径が大きく、他の用途も含める類例の検討が望まれている。この点を踏まえると、AS-037 は他の 3 遺構と堆積過程や性格の異なる遺構であった可能性がある。

微細物分析の結果では、栽培種のイネ、コムギ？が確認された。A-2 区の AS-027、AS-037、AS-049 より穎 (籾)、AS-037 より玄米 (炭化米) が確認されたイネ、AS-037 より確認されたコムギ？などの穀類は、当時利用された植物質食料と示唆され、火を受けたとみなされる。イネ、コムギは、当社がこれまでに実施した市道宜野湾 11 号の分析調査においても確認されている。

(2) A-2 区基本層序

地形分類図によると、A-2 区はマージを基盤とする台地上にあり、比較的平坦な地形を呈している。基本層序からも、マージを母材とした厚い耕作土が確認でき、人の生活に適した地域であったと言える。耕作土の可能性がある東壁 No.3、北壁 No.2 の放射性炭素年代測定結果は、補正年代で 1,265 ～ 1,200±20yrBP、暦年代で 7 世紀後半～ 9 世紀後半 (calAD 678 ～ 888) の値を示す。これらの層準は、マージ上位の砂質な腐植質な土壌であり、団粒構造を呈し均質であることから、耕作土の可能性が想定されている。一般に耕作はグスク時代頃から始まることを考慮すると、若干古い年代である。年代測定は、いずれも土壌で実施していることから、当時の生活面に由来する腐植を測定しているが、それ以前の腐植を反映した可能性も否定できない。層位の対比や周辺の情報を収集し、検討する必要がある。

植物化石について見ると、木本類のマツ属、コナラ属アカガシ亜属、草本類のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの花粉化石が僅かに検出されており、種実遺体は 1 個体も検出されていない。マツ属は海岸沿いから丘陵上などに生育する種類であり、アカガシ亜属も暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素である。どちらも現在の周辺にも普通に生育する種類であることから、当時の森林植生に由来すると思われる。また、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などは、林縁や開けた草地などに生育することから、調査地周辺の草地

に由来する。なお、耕作に関する可能性があるものは、今回確認できなかった。

(3) C-2 区礫敷き遺構

C-2 区では礫敷き遺構が確認されたが、現状で道を呈するような連続性は確認されていない。植物化石について見ると、花粉化石ではマツ属 (複維管束亜属を含む) が確認された。沖縄に自生するマツ属複維管束亜属はリュウキュウマツ 1 種であることから、今回の試料もリュウキュウマツの可能性が高く、周辺の二次林や森林に由来する。種実遺体では草本で中生植物のイネ科、カタバミ属、ツボクサが確認された。これらは調査区周辺域の明るく開けた、やや乾いた草地環境に生育していたと考えられ、これまでの分析調査においても確認されている。

(4) C-3 区基本層序

C-3 区の南壁 No.2 は、測定年代で 5,705±25yrBP という耕作土を想定するには非常に古い値が得られている。この年代は前期貝塚時代に比定される。

本層準は、炭や焼土が確認され、淘汰の良い砂質であることから耕作土と想定された。一方で、本層準の母材は、褐色から明褐色を呈し、下位の地山のマージに類似する。このことを考慮すると、今回の年代は、耕作層を検討するには古い年代であるが、腐植の少ないマージ母材の堆積物であることを考慮すると、当時の堆積年代を示す可能性も否定できない。

堆積年代については、さらなる情報を蓄積し慎重に検討したい。

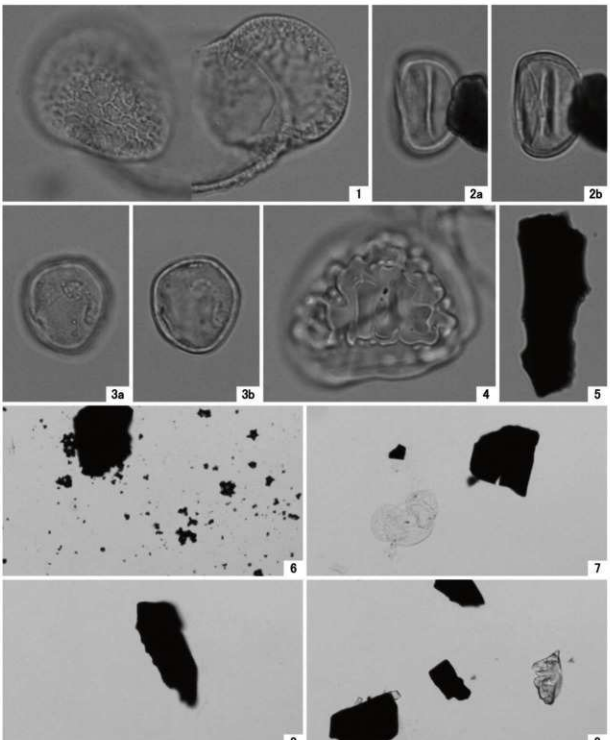
植物化石は、南壁 No.1 から草本で中生植物のカタバミ属、ツボクサが確認され、調査区周辺域の明るく開けた、やや乾いた草地に由来すると考えられる。

(5) E 区基本層序

E 区は、地形分類図の通り溶食凹地に接している。調査所見によれば、下部は島尻層群泥岩が母材の谷埋め堆積物であり、その上位は粘質ではあるが母材がマージとされている。この境界は不整合となっており、掘削後に周辺マージを盛土した可能性が指摘されている。

放射性炭素年代測定結果を見ると、西壁 No.3 が補正年代で 2,400±20yrBP であるのに対し、より下位の西壁 No.6 が 1,310 ± 20yrBP の値を示し、地層の累重関係と年代値が逆転する。前述のように西壁 No.6 は島尻層群泥岩が母材の谷埋め堆積物であり、西壁 No.3 は谷埋め堆積物を掘削後に周辺マージを盛土した可能性が指摘される。このことから、西壁 No.3 は盛土の際に古い時期の土壌が入れられた可能性が高く、堆積年代を反映していないと推測される。よって、E 区の西壁は 1,310±20yrBP 前後からそれ以降の堆積物と推測される。なお、西壁 No.6 の暦年代は 7 世紀後半～ 8 世紀後半 (calAD 660 ～ 768) であり、前述の A-2 区の北壁 No.2 と非常に近い年代である。

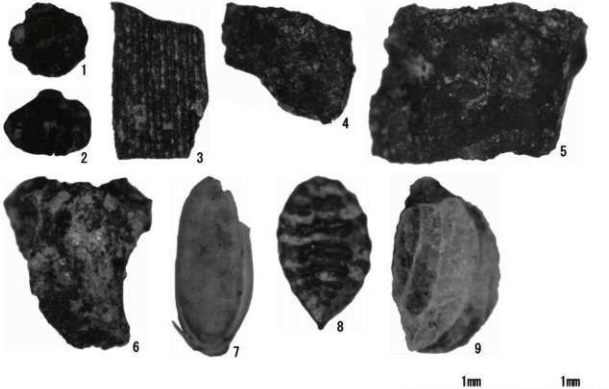
花粉分析結果では、木本類のマツ属、草本類のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科が僅かに検出されている。これらは周囲の森林植生や草地植生を反映すると考えられる。



1. マツ属(A-2区 東壁:No. 3)
2. コナラ属コナラ亜属(A-2区 東壁:No. 4)
3. カヤツリグサ科(A-2区 東壁:No. 3)
4. イノモトソウ属(A-2区 東壁:No. 3)
5. 微粒炭(A-2区 東壁:No. 3)
6. 分析プレパラート内の状況(A-2区 北壁:No. 2)
7. 分析プレパラート内の状況(C-2区 礫敷き北壁:No. 5)
8. 分析プレパラート内の状況(C-3区 南壁:No. 2)
9. 分析プレパラート内の状況(E区 西壁:No. 4)

50μm (1-5)　50μm (6-9)

図版Ⅵ－１　花粉化石・微粒炭



1. イネ 穎(基部)(A-2区 AS-049:No.1)
2. イネ 穎(基部)(A-2区 AS-037:No.3)
3. イネ 穎(A-2区 AS-027:No.3)
4. イネ 玄米(A-2区 AS-037:No.3)
5. イネ 玄米(A-2区 AS-037:No.3)
6. コムギ? 穎果(A-2区 AS-037:No.3)
7. イネ科 果実(C-2区 礫敷き北壁:No.4)
8. カタバミ属 種子(C-2区 礫敷き北壁:No.4)
9. ツボクサ 果実(C-3区 南壁:No.1)

図版Ⅵ－２　種実遺体

引用文献

Bronk, R. C.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

藤木利之・小澤智生 ,2007, 琉球列島産植物花粉図鑑 . アクアコーラル企画 ,155p.

井上　淳・吉川周作・千々和一豊 ,2002, 琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について . 日本第四紀学　会講演要旨集 ,32,74-75.

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

中村　純 ,1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 (2010 年改訂版). 東北大学出版会 ,678p.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M.,Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G.,Hughen, K.A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A.,Scott,E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J.,2013,IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon,55,1869–1887.

島倉巳三郎 ,1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 ,60p.

Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文 ,2018, 草木の種子と果実―形態や大きさが一目でわかる 734 種　増補改訂― . ネイチャーウォッチングガイドブック , 誠文堂新光社 ,303p.

山野井　徹 ,1996, 黒土の成因に関する地質学的検討 . 地質学雑誌 ,102,526-544.

安田喜憲 ,1987, 文明は緑を食べる , 読売新聞社 ,227p.

第３節　令和２年度　市道宜野湾 11 号整備予定地における自然科学分析（69 号墓）

はじめに

市道宜野湾 11 号は、戦後米軍の接収により普天間飛行場が建設されたため、消失した宜野湾街道 (普天間並松) の付け替え道路として国道 330 号の交通量の緩和を目的に整備されている。2020 年 12 月に一部は供用が開始された。これまでにも調査地周辺では、試掘調査が行われており、遺構・遺物の確認と共に、旧地形の検討や自然科学分析を実施し情報を蓄積してきた。

本報告では、市道宜野湾 11 号予定地から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施する。

１．試料

試料は、市道宜野湾 11 号整備予定地から検出された炭化材 1 点である。令和元年度に実施した宜野湾シリガーラ流域古墓群内の古墓（69 号墓）の墓室内タナのトレンチより出土した。

２．分析方法

試料の周囲を削り落として付着物等を取り除き、50mg 程度に調整する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1mol/L である。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置 (NEC 社製) を用いる。スタンダードとして、米国国立標準局（NIST）の標準試料 (HOX- Ⅱ)、国際原子力機関の標準試料 (IAEA-C6 等)、バックグラウンド試料 (IAEA-Cl) の測定も行う。δ13C は試料炭素の 13C 濃度 (13C/12C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、OxCal4.4(Bronk,2009)、較正曲線は IntCal20 (Reimer et al.,2020) である。

３．結果

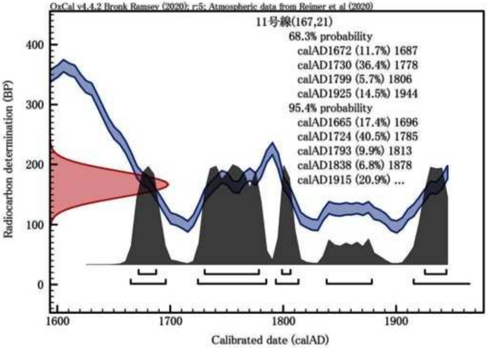
結果を第Ⅵ - 6 表、第Ⅵ - 4 図に示す。樹種はマツである。保存状態は良く、定法での分析処理が可能で、測定に必要なグラファイトが得られている。1950 年を基点とし、165 年前の年代測定が出た（20 年前後の誤差あり)。1760 年代～ 1800 年代の造墓の可能性がある。

暦年較正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、その後訂正された半減期（14C の半減期 5730±40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、IntCal20 (Reimer et al.,2020) を用いる。2σの値は、calAD1665 ～と広範囲であるが、これは第Ⅵ - 4 図でみられるように、この時期の較正曲線が蛇行しているのが原因である。

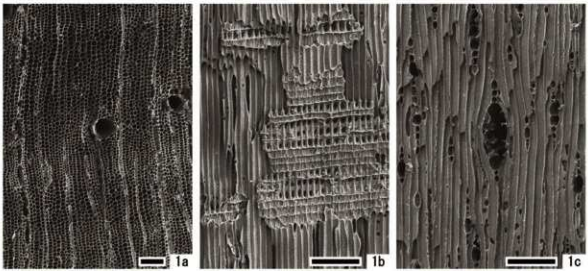
第Ⅵ－６表　放射性炭素年代測定結果

試料名	樹種	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
						年代値		確率%		
11号線	マツ属複維管束亜属	AAA (1M)	165±20 (167±21)	-30.59 ±0.47	σ	cal AD 1672 - cal AD 1687	279 - 263 calBP	11.7	YU-12736	pal-13178
						cal AD 1730 - cal AD 1778	220 - 172 calBP	36.4		
						cal AD 1799 - cal AD 1806	152 - 144 calBP	5.7		
						cal AD 1925 - cal AD 1944	25 - 6 calBP	14.5		
					2σ	cal AD 1665 - cal AD 1696	286 - 255 calBP	17.4		
						cal AD 1724 - cal AD 1785	226 - 166 calBP	40.5		
						cal AD 1793 - cal AD 1813	157 - 137 calBP	9.9		
						cal AD 1838 - cal AD 1878	112 - 72 calBP	6.8		
						cal AD 1915 - cal AD 1950	35 - calBP	20.9		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4)AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。
5)暦年の計算には、OxCal v4.4を使用
6)暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
7)較正データーセットは、IntCal20を使用。
8)較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
9)統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である



第Ⅵ－４図　暦年較正結果



1. マツ属複維管束亜属

a:木口　b:柾目 c:板目
スケールは100μm

図版Ⅵ－３　炭化材

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-chulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal k BP). Radiocarbon, 62,1-33.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

第Ⅶ章　結語

第Ⅵ章までの調査成果について述べてきた。今回調査した遺跡は「赤道渡呂寒原古墓群（E 区）」「神山後原丘陵古墓群（C・D 区）」「宜野湾シリガーラ流域古墓群（B 区）」「宜野湾後原遺物散布地（A 区）」の 4 箇所である。

A 区では、全体の 9 割の遺物が出土しており、他の調査区と比較すると遺構も多く検出された。遺物の内訳をみると沖縄産施釉陶器（2281 点）が最も多く、その中でも小碗が最多であり碗の 4 倍以上出土している。碗も小碗もⅠ類が多く、次いでⅢ類となる。Ⅱ類がもっとも少なく、Ⅰ類の 1/5 以下の出土となっている。Ⅰ類は他の器種でも多く見られ、壺・鍋・酒器はⅠ類のみの出土で、皿・瓶・火入・火炉でもⅠ類が多く、器種不明でもⅠ類が多い。沖縄産施釉陶器ではⅠ類が優位ではあるものの、急須・香炉ではⅢ類が多く、鉢はⅡ類が多く出土した。次いで出土量が多いアカムヌー（2027 点）では鍋がもっとも多くみられ、次いで急須、鉢の順に多い。本土産磁器では小碗の出土が一番多く、次に多い皿は沖縄産より多く出土している。碗の出土点数の 3/4 は砥部産であった。多くの陶磁器が出土しているが、土器はなく、青磁や褐釉は少量であり沖縄産施釉陶器やアカムヌーが多く出土していることから、グスク期までは遡らず近世末～近代（戦前）頃の遺跡と見られる。ピット群が確認されている A-1 区からの出土が多く、ピットと合わせて周辺で人々が生活していた様子が示唆できる。

一方でA -2 区はアカムヌーの出土がなく、本土産磁器が沖縄産施釉陶器より多いことから基地接収後も活動が想定される。

C 区では戦前のものと見られる溝状遺構が検出された。排水用の溝と見られるが、西側に隣接する洞穴の吸込み口には向っておらず、南北方向に走っている。軸としては航空写真で確認できる道と同方向のため、道に関連する遺構の可能性も示唆される。

C-1 区では 197 点、C-2 区では 196 点、C-3 区では 20 店の遺物が確認されている。C-1 区では一番多い遺物が沖縄産施釉陶器で、次いで本土産磁器・アカムヌーとなる。C-2 区では本土産磁器が最も多く、次いで沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器となる。A 区と同様に遺物から活動時期を示唆すると、C-1 区では沖縄産施釉陶器とアカムヌーが多いことから戦前、C-2 区では本土産磁器が多いことから戦後も周辺で活動があったと考えることもできるが、C-2 区は米軍基地造成の影響で攪乱を受けているため、その影響も考えられる。

B・D 区については亀甲墓と破風墓の調査を行った。B 区の 123 号墓と D 区の古墓については改葬済みで被葬者に関する情報は得られなかったが、B 区の 69 号墓については未改葬で厨子甕が残存していたことから被葬者の情報を得ることが出来た。その中で最も古いものとして「乾隆五捨六年」と記載された銘書である。乾隆 56 年は 1791 年で今から 230 年以上も前のものとなる。年号に続けて干支が「子」と記載されているが、乾隆 56 年は「亥」年となるため、十二支を誤って記した可能性も高いと見られる。明治 38 年の銘書が最も新しく、それ以降の年号は見られない。2019 年 7 月 11 日時点の厨子の配置が墓使用時から動いていないと想定すると、21 号厨子が最後に入れられた可能性も示唆できるが、明治 38 年後は新しい厨子はほとんど追加されず、戦後の混乱でお墓の継承がなされることがないまま現在に至ると見られる。

以上が本緊急発掘調査の報告となる。今回は市道宜野湾 11 号道路整備事業のため行われた調査で、普天間飛行場の東側沿いの返還に伴うものであった。普天間飛行場の全体の面積からするとわずかではあるが、

これまで基地の中だったことで窺う事の出来なかった宜野湾市の歴史の一端を知ることができた。一方で、E区の切石集積のようにかつてあったであろう古墓や、A･C区では米軍基地造成の影響で地山まで攪乱され、当時の足跡をたどることもできない状況も見られた。普天間飛行場内にはまだまだ多くの遺跡が未調査のままである。今後さらなる発見が期待される。

第Ⅶ－１表　69号墓 厨子甕銘書一覧

番号	蓋/身	銘書内容
2	蓋	□□四年未八月/呉屋□□之/仕立□
3	蓋	乾隆五捨六年子/□□□/新垣掟親雲上　※身と蓋が別と見られる
3	身	□□様/山□/□村正□/□□□　※身と蓋が別と見られる
4	蓋	［　　］日［　　］［　　］□ 花
5	蓋	巳年十月廿九日死去/知花ノ女/子人/う田？
6	蓋	知花ノ女子うし/□子女子/うし/知花女子/う田？
10	蓋	□□□ /甲？□□月□九日骨洗/知花ノ□□□□/ うし□□
9	蓋	奥間小□□/□玉那覇/光緒十二年丙戌六月十日洗骨
9	身	□玉那覇光緒十二年丙戌六月十二日洗骨
11	蓋	奥間ノ/□屋筑登上之
13	蓋	咸豊三年癸□六月十七日/□呉屋洗骨
14	蓋	咸豊三年癸□六月十七日・・・
15	蓋	大清嘉慶八年癸亥七月□六日/奥間小ノ/うし呉屋
17	蓋	光緒十二年丙戌六月十日洗骨/奥間之/女うし
18	蓋	明治廿五年辰八月廿八日洗骨奥間小戸良/宮城/妻□□
18	身	奥間小戸良宮城/妻蒲戸
19	蓋	明治散廿八年巳旧七月七日洗骨/玉/那/覇/加□/三十才/ □□□/洗骨/□時/三十六/玉那覇/蒲□/□□□

（凡例：□は判読できない。・は文字が消えているもの。）

第Ⅶ－２表　遺物集計表

種類	地区	A-1区	A-2区	A区計	B区	R01 B区	C-1区	C-2区	C-3区	C区計	D区	E区	計
中国産	青花	23		23			1			1			48
	褐釉	130	1	131			5	1		6		1	275
		23		23									46
外国産磁器								1		1			2
本土産	磁器	360	48	408	4		22	36	2	60	3	3	946
	陶器	5	1	6	1								13
沖縄産	施釉	2281	29	2310		5	79	32	6	117	11	10	4880
	無釉	1376	17	1393		2	23	21	2	46	7	5	2892
	ｱｶﾔｷｰ	2072	4	2076		1	29	19	7	55		1	4264
	瓦質	1		1									2
	須陶	38		38									76
瓦	平瓦	9		9			3	9		12	13		55
	丸瓦	2		2			1	2		3	4		14
	不明	27		27				8		8	4		74
歳骨器	石製 蓋					1					1		2
	石製 身					1							1
	赤焼 蓋					1							1
	赤焼 身					1							1
	ｶﾞｰｼﾞｬｰ蓋					3							3
	ｶﾞｰｼﾞｬｰ身					3							3
	ﾏﾝｶﾞﾝ 蓋				2	12					1		15
	ﾏﾝｶﾞﾝ 身	1		1	5	12					4		23
	ｻﾌ型 蓋					3					5		8
	ｻﾌ型 身					3					3		6
	転用					2							2
円盤状製品	青花	1		1									2
	沖施	3		3									6
	沖無	4		4			1			1			10
	瓦	1		1									2
石類	石灰岩	3	1	4							1		9
	不明	61		61									122
	ﾍﾟﾚﾝ状							1		1			2
銭貨	近世銭	1		1		6							8
	近代銭	1		1									2
	現代銭					5							5
	無文銭	1		1									2
	外貨							1		1			2
	不明							1		1			2
鉄製品	釘	1		1			3	7		10	3		25
	鋲							1		1			2
	蓋							1		1			2
	札												0
	鉄滓							1		1			2
	ｽﾗｯｸ	1		1									2
	針金	3		3									6
	不明	46	1	47			3	14		17		1	129
青銅製品	簪	2		2		8							12
	煙管	4		4									8
	釘										1		1
	不明	3		3			4	4		8			22
ガラス製品	飲料品	16		16				1		1	1		35
	調味料	1		1									2
	化粧品	5	1	6				1		1			14
	薬品	10		10			2	3		5			30
	瓶	16		16				2	1	3	3		41
	ﾗﾝﾌﾟ笠	2	2	4									8
	不明	104	16	120				11		11			262
プラスチック	ｽﾀﾝ	1		1				1		1			4
	小杯										1		1
	歯ブラシ	1		1									2
	クシ										1		1
	不明	14		14	1			2		2			33
タイル		4	1	5			2			2	2		16
獣骨	獣歯	17		17									34
	ﾁｮｳﾁﾝ								1	1			2
	ｲﾉｼｼ					1							1
	不明	65		65			1	1		2		1	135
貝類	巻貝	6		6			1	4		5			22
	二枚貝	7	1	8				2		2		1	21
炭化物		2		2			1	1		2			8
種子片		1		1									2
焼土		101		101			14	4	1	19			240
その他		6		6			2	3		5		2	24
計		6863	123	6986	13	70	197	196	20	413	69	25	14975

第Ⅶ－３表　沖縄産施釉陶器集計表 -1

種別・器種				区名	A-1区	A-2区	R01 B区	C-1区	C-2区	C-3区	D区	E区	小計	合計
碗	Ⅰ類	イ	口縁	A	57			3				1		
				B	7			3	1					
			口～底	A a	5									
				B a	1									
			胴部	a	10									
				b	2									
			胴部		100									
			胴部（有文）					2		1				
			胴～底	a	33									
				b	5									
			胴～底		3									
			底部	a	5								305	
			底部		13									
		ロ	口縁	A	9			1						
				B	2			1						
			胴部	b	1									
			胴部		10									
			胴～底	a	1									
				b	5									
			底部	b	1									
			底部						1					
			胴部		1									
			底部	a	6									
			底部		12			2						
	Ⅱ類	イ	胴部	②	1						1			535
		ロ	口縁	①B	1									
				②B	2									
			口～胴	②Bb	1								23	
			胴～底	②b	4							1		
			胴部	②	8			1						
			底部	①	1									
				②	1							1		
	Ⅲ類	有文	口縁	A	1									
				B	29	2					3			
			口～底	Bb	1						4			
			口～胴	Bb	5									
			胴部	b	5	1					1			
			胴部		14	1		1						
			胴～底	b	5									
			底部		1									
		口縁		A					2				207	
				B	34	1		1	1	1				
		口～胴		Bb	11									
		口～底		Bb	2									
		胴部		b	22									
		胴部			12			3	1					
		胴～底		b	17		1							
		底部		b	2									
		底部			15			4	2	1				
小碗	Ⅰ類	イ	口縁	A	37				1	1				
				A文	1									
				B	9									
			口～胴	Bb	1									
			胴部		6									
		ロ	口縁	A	19			1					99	
				B	18									
			口～胴	A	1									
			胴部		2									
		ハ	口縁	A	1									
				B	2									
			胴部		1									

種別・器種				区名	A-1区	A-2区	R01 B区	C-1区	C-2区	C-3区	D区	E区	小計	合計
小碗	Ⅱ類	イ	口縁	①A	2									
				①B	1									
				①A文	1									
		ロ	口縁	①A	1									
				①B	10							1		
				②B	8				1				43	
			口～胴	①Bb	1									
			胴部	①	2									
				②	2				1					
			胴～底	②	1									
		ハ	口縁	①B	3									
				②B	7									
			胴部	②	1									
	Ⅲ類	有文	口縁	A	3									
				B	2				3					
			口縁		2									
			口～胴	Ab	1									
				Bb	2									
			胴部	b	2	1								
			底部	a	1									
			底部		1									
		口縁		A	11								96	238
				B	31	1								
		口～胴		Ab	6									
				Bb	4									
		胴部		b	3				1					
		胴部			3									
		胴～底		b	9				1					
		胴～底			3									
		底部			4					1				
碗または小碗	Ⅰ類	イ	口縁	A	155									
				B	13									
			胴部	b	14									
			胴部		103						1			
		ロ	口縁	A	5								317	
				B	1									
			胴部		19									
		胴部			3									
		底部			3									450
	Ⅲ類	有文	口縁	A	2									
				B	16									
		口縁		A	10									
				B	92	2							133	
		胴部		b	6									
		胴部			4									
		底部			1									
小杯	田類	口～胴		B	1			1						2
鉢	Ⅰ類	イ	胴部		1									
		ロ	口縁	A	2									
			胴部		1					1			8	
			胴～底		2									
			底部		1									
	Ⅱ類	イ	胴部	②	1									
		ロ	口縁	②A	3	2		1		1				35
			口～底	②										
			口～胴	②A	3								1	
			胴部	②	5	1							3	
			胴～底	②	1								2	27
		ハ	口縁	②A	2									
			胴部	①								1		

第Ⅶ－４表　沖縄産施釉陶器集計表 -2

種別・器種					区名	A-1区	A-2区	R01 B区	C-1区	C-2区	C-3区	D区	E区	小計	合計
皿	Ⅰ類	イ	口縁	有文	口～底	1								15	18
					口～胴	1									
			胴部			2									
			口縁	A		2									
			口～底	B		1									
			口～胴			1									
			胴～底			4									
			底部			1									
		ロ	口縁			1			1						
	Ⅲ類	有文	口～底	B		1								3	
			胴～底			1									
		底部										1			
急須	Ⅰ類	イ	胴部	有文		1								24	88
			蓋	袴											
			蓋	体部											
			口縁								1				
		ロ	口～胴			1									
			注口			1									
			胴部			9			2						
			把手			2									
			胴～底			1									
			底部			3									
		ハ	口縁			1									
			注口			1									
			把手			1									
	Ⅲ類	有文	胴部			30			5	1				64	
			底部			1									
		蓋	袴						1						
		注口				2									
		把手				1									
		胴部				14	1								
		胴～底				3									
		底部				5									
瓶	Ⅰ類	イ	胴部	有文		2								8	13
			底部			1									
		ロ	口縁			1			1						
			胴～底			2									
		ハ	胴～底			1									
	Ⅲ類	有文	胴部			3								5	
			底部			1									
	胴部					1									
香炉	Ⅰ類	イ	口縁			1								2	5
			口～胴			1									
	Ⅱ類	ロ	口～胴	②文		1								1	
	Ⅲ類	有文	口縁			2								2	
火入	Ⅰ類	イ	胴～底			1								16	22
			胴部			1									
		ロ	口縁			3			1						
			口縁	有文		5									
			胴部			3									
			胴～底			1									
		ハ	胴部			1									
	Ⅲ類	口縁				3								6	
		胴部				1									
		胴～底				2									
火炉	Ⅰ類	ロ	口縁							1				1	2
	Ⅲ類	口縁				1								1	

種別・器種					区名	A-1区	A-2区	R01 B区	C-1区	C-2区	C-3区	D区	E区	小計	合計
酒器	Ⅰ類	イ	口縁			1								15	17
			口縁			2									
		ロ	口～胴			1									
			胴部			6									
			胴～底			1									
		ハ	胴部			3									
		底部				1									
	Ⅲ類	有文	胴部			1								2	
		底部				1									
鍋	Ⅰ類	ロ	口縁			11				1				17	
			口～胴			1									
			胴部			4									
壺	Ⅰ類	イ	口～胴			2								7	
		ロ	口縁			1									
			胴部			4									
徳利	Ⅰ類	イ	胴部			1								1	
盃	Ⅰ類			イ		4								7	12
				ロ		2									
	Ⅰ類					1									
	Ⅲ類					2								5	
		有文				3									
不明	Ⅰ類	イ	口縁			4					1			449	976
			胴部	有文		11				3	5	1			
			胴部			253									
			底部			3									
		ロ	口縁			3									
			口縁	有文		4									
			胴部			94	1		1	8	3				
			胴部	有文		3									
			底部			8				1					
		ハ	胴部			42				2					
			底部			3									
	胴部					22								50	
	底部					25				3					
	Ⅱ類	イ	胴部	①		7								87	
				②		5	1								
		ロ	胴部	①		10					1				
				②		23				1	2				
			底部	②		1									
		ハ	胴部	①		1	1								
				②		9	1								
				②		24									
	Ⅲ類	有文	口縁			2								390	
			胴部			86				1	1				
	胴部					269	9			10	4				
	底部					7					1				

第Ⅶ－５表　沖縄産無釉陶器集計表

種別・器種		区名	A-1区	A-2区	R01 B区	C-1区	C-2区	C-3区	D区	E区	合計
壺	口縁	Ⅰ類	5								119
		Ⅱ類	2								
		Ⅱａ2類	1								
		Ⅱｂ類	2								
		Ⅰorⅱ	6								
		Ⅲ類	2						1		
		Ⅳ類	12								
	口～胴	Ⅰ類	1								
	頸部（有文）				1						
	胴部（有文）		70								
	胴底		12			1	1				
	把手		1			1					
甕	口縁	Ⅰ類	1								19
	口～胴	Ⅲ(有)	1								
	胴部（有文）		11								
	胴底		2								
	胴～底		2								
	底部		1	1							
擂鉢	口縁	Ⅰａ類	2								184
		Ⅰｂ類	2								
		Ⅱ類	5								
		Ⅲ類	6								
		Ⅳ類	23	1					1		
	口～胴	Ⅲ類	2								
		Ⅳ類	3								
	胴部	ⅢorⅣ	1								
		ⅢorⅣ	1								
	胴底		120	1		4					
	胴～底		5			1			1		
	底部（脚台）		4							1	
鉢	口縁	Ⅰａ類	3								35
		Ⅰｂ類	1			1					
		Ⅰ類	5								
		Ⅱ類	1								
		Ⅱａ類	2								
		Ⅲ(有)	1								
		Ⅲ類	5								
		Ⅳ類	1								
	口～胴	Ⅰａ類	1								
		Ⅲ類	1								
		Ⅳ類	2								
	口縁		2								
	胴部	Ⅰａ類	1								
	胴底			1			1				
	胴～底						1				
	底部（脚台）		3					1			
鍋	口縁		1								2
	底部		1								
急須	口縁	Ⅰａ類	3								9
	口縁		1								
	注口		3								
	把手		1						1		
蓋			1								1
火炉	口縁	Ⅱａ類	1								6
		有文	2								
	口縁		1								
	胴部	Ⅱａ類	1								
	底部		1								
瓶	口縁		1								2
	胴部		1								
徳利	口縁		1				1				1
火入	口～底		1								1
不明	有文	口縁	3								1061
		胴部	12								
	口縁		18				1				
	胴部		928	1	1	14	15	1	2	4	
	胴～底		12								
	底部		48						1		

第Ⅶ－６表　アカムヌー集計表

種別・器種		区名	A-1区	A-2区	R01 B区	C-1区	C-2区	C-3区	E区	合計
鍋	口縁（把手）	Ⅰ類	73			4	1	1		213
		Ⅰａ類	2							
		Ⅱａ類	37							
		Ⅱｂ類	18							
		不明				1				
	口縁		2							
	胴部		56							
	把手		15			2				
	底部		1							
鉢	口縁	Ⅰ類	7			1				43
		Ⅰａ類	8							
		Ⅰｂ類	2							
		Ⅱ類	1							
	口～底	Ⅰ類	1							
	胴部	Ⅰａ類	2							
	胴～底		15							
	底部		3		1		1	1		
火炉	口縁	Ⅰ類	6			1	1			65
		Ⅱａ類	2							
		Ⅱｂ類	10							
		Ⅱ類	2							
		Ⅳ類	1							
		Ⅴ類	3				1			
	胴部	Ⅱ類	2							
		Ⅴ類	11							
	口縁		1							
	胴部		7		1	2	1			
	把手		4							
	胴～底		1							
	底部		6			2				
急須	口縁	Ⅰ類	1							43
		Ⅰａ類	18							
		Ⅱａ類	7							
		Ⅱｂ類	1							
	胴部	Ⅱ類	2							
	胴部		6							
	注口		2							
	把手		6							
鍋または蓋			1							1
蓋			13							13
擂鉢	胴部		1							1
植木鉢	口縁		8							38
	口～底		1							
	口～胴		2							
	胴部		17							
	胴～底		7							
	底部		3							
不明	口縁		28		1					1764
	胴部		1660	2		25	14	5	1	
	底部		21							
	把手		1							
	胴～底		6							

第Ⅶ－７表　本土産陶磁器集計表

種別・器種				区名	A-1区	A-2区	B区	C-1区	C-2区	C-3区	D区	E区	小計	合計
本土産磁器	碗（瓶部産）		口縁		9								33	172
			口～胴		3				1					
			口～底		1									
			胴部		12				3					
			胴～底		2									
			底部		3									
	碗（瀬戸・美濃産）		口縁		1	2							3	
	碗	有文	口縁		1	1			4				33	75
			口～胴		7	1			5					
			口～底		1	1								
			胴部		2			3	3			1		
			胴～底						1					
			底部		1				1					
		無文	口～胴						3				6	
			口縁					1						
			胴部		1			1						
	小碗（瀬戸・美濃産）		口縁		5	3					1		21	
			口～胴		5									
			口～底									1		
			胴部		2	1								
			胴～底									1		
			底部		2									
	小碗（肥前産）		底部		1								1	
	小碗	有文	口縁		36	7		1	2	1			109	
			口～胴		9	7		1						
			口～底		6	1	1							
			胴部		21	2		1	1					
			胴～底		8	1					1			
			底部		1	1								
		無文	口縁		24	1		2					41	
			口～胴		6	2								
			口～底		1									
			胴部		2									
			胴～底		3									
	碗または小碗	有文	口縁		2	1							6	
			胴部		1									
			底部		1	1								
	小杯	有文	口縁		1								3	
			口～胴		1									
			底部		1									
	皿（瓶部産）		底部						1				1	
	皿（瀬戸・美濃産）		口縁		5								12	62
			口～底		4	1								
			底部		2									
	皿	有文	口縁		23	1				1			48	
			口～胴			1			2					
			口～底		3	1		1			1			
			胴部		4	2			1					
			胴～底					1						
			底部		4	1		1						
		無文	底部						1				1	
	急須		把手		1								1	
	蓋	有文			3				1				4	5
		無文											1	
	瓶	有文	口縁						1				2	3
		無文	底部			1		1						
	植利	有文	胴部		1		2						3	
	袋物	無文	底部		1								1	
	餐皿		口縁		1								3	
			口～胴		1									
			口～底		1									
	不明（瓶部産）		底部						1				1	
	不明（瀬戸・美濃産）		胴部		3	1							4	
	不明	有文	胴部		60	4		3					67	136
		無文	口縁		3								69	
			胴部		51	2		4	3					
			底部		5			1						
本土産陶器	蓋	底～体部					1						1	
	不明	有文	胴部		1								1	6
		無文	胴部		4								5	
			底部			1								

第Ⅶ－８表　中国産陶磁器集計表

種別・器種			区名	A-1区	A-2区	C-1区	C-2区	E区	小計	合計
青花	碗		口縁	3				1	38	137
			口～胴	4						
			胴部	20		2				
			胴～底	2						
			底部	5		1				
	小碗		口縁	6					14	
			口～胴	2						
			胴部	5						
			底部	1						
	碗または小碗		口縁	7					18	
			口～胴	2						
			胴部	9						
			口～胴	1						
	皿		胴～底	1		2			4	
	馬上杯		脚台	1					1	
	不明		口縁	2					62	
			胴部	58	1					
			底部	1						
青磁	碗		胴～底	1					1	25
	皿		胴部				1		3	
			胴～底			1				
			底部	1						
	盤		底部	1					1	
	不明		胴部	18					20	
			底部	2						
褐釉陶器	不明		胴部	23					23	

第Ⅶ－９表　蔵骨器集計表

種別・器種				地区	A-1区	B区	R01 B区	D区	小計	合計
石製	家型			蓋			1	1	3	3
				身			1			
陶製	御殿型	赤焼き		蓋			1		2	15
				身			1			
		ツノ型	蓋	完形			3		13	
				装飾部				4		
			身	完形			3			
				口～胴				1		
				胴部				2		
	甕形	ﾎﾞｰﾝﾁｬｰ		蓋			3		6	45
				身			3			
		ﾏﾝｶﾞﾝ掛		蓋			1		2	
				底付			1			
		ﾏﾝｶﾞﾝ掛け	蓋	完形			12		37	
				体部				1		
			身	脚			2			
				完形				8		
				口～胴			3			
				口～底				4		
				胴部	1		2		3	
				胴～底					1	
転用品	沖無	壺	身	口～底			1		2	2
		壺か甕		胴～底			1			

【参考・引用文献】

宜野湾市史編集委員会編 1985 『宜野湾市史』第五巻資料編四 民俗

宜野湾市史編集委員会編 2000 『宜野湾市史』第九巻資料編八 自然

宜野湾市教育委員会編 2012 『ぎのわんの地名 －内陸部編－』

宜野湾市教育委員会編 2007 『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』（宜野湾市文化財調査報告書第 39 集）

宜野湾市教育委員会編 2008 『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』（宜野湾市文化財調査報告書第 41 集）

宜野湾市教育委員会編 2011 『市内埋蔵文化財調査報告書２』（宜野湾市文化財調査報告書第 47 集）

宜野湾市教育委員会編 2012 『大山前門原第一遺跡』（宜野湾市文化財調査報告書第 49 集）

宜野湾市教育委員会編 2017 『市内埋蔵文化財調査報告書３』（宜野湾市文化財調査報告書第 53 集）

宜野湾市教育委員会編 2017 『普天間飛行場地区埋蔵文化財発掘調査報告書』（宜野湾市文化財調査報告書第 55 集）

沖縄県立埋蔵文化財センター編 2019『神山古集落』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集）

沖縄県立埋蔵文化財センター編 2022『普天間石川原第一遺跡 普天間グスクンニー遺跡 普天間下原古墓群』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 111 集）

沖縄県立埋蔵文化財センター編 2022『基地内文化財９』（沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 112 集）

報告書抄録

ふ　り　が　な	あかみちとろかんばるこぼぐん　かみやまくしばるきゅうりょうこぼぐん　ぎのわんしりがーらりゅういきこぼぐん　ぎのわんくしばるいぶつきんぶち
書　　籍	赤道渡呂寒原古墓群　神山後原丘陵古墓群　宜野湾シリガーラ流域古墓群　宜野湾後原遺物散布地
服　　書　　名	平成30年度・令和元年度　市道宜野湾11号整備における埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	ー
シ　リ　ー　ズ　名	宜野湾市文化財調査報告書
シ　リ　ー　ズ　番　号	第61集
編　著　者　名	金城　りお・池原　悠貴・長濱　健起
発　行　機　関	宜野湾市教育委員会
所　在　地	郵便番号901-2203　沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号　TEL098-893-4430
発　行　年　月　日	2023(令和5)年2月28日

所有遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
赤道渡呂寒原古墓群（あかみちとろかんばるこぼぐん）	沖縄県宜野湾市赤道	472501	293	26°16′24.6″	127°45′04.8″	20180912～0920	143.27㎡	支障除去
神山後原丘陵古墓群（かみやまくしばるきゅうりょうこぼぐん）	沖縄県宜野湾市神山	472501	287	26°16′19.3″	127°45′57.2″	20180611～1003	445㎡	支障除去
宜野湾シリガーラ流域古墓群（ぎのわんしりがーらりゅういきこぼぐん）	沖縄県宜野湾市宜野湾、神山	472501	272	26°16′8.8″	127°45′43.5″	20181011～1018 20190708～0904	388㎡	支障除去
宜野湾後原遺物散布地（ぎのわんくしばるいぶつきんぶち）	沖縄県宜野湾市宜野湾	472501	260	26°16′04.8″	127°45′39.3″	20180423～0724	199㎡	支障除去

所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
赤道渡呂寒原古墓群	古墓	近世～近代	切石集積	沖縄産施釉陶器、本土産磁器	
神山後原丘陵古墓群	古墓	近世～近代	墓、溝状遺構、柱穴痕	沖縄産施釉陶器、本土産磁器、瓦、鉄製品、ガラス製品、貝類等	古墓1基
宜野湾シリガーラ流域古墓群	古墓	近世～近代	墓	沖縄産施釉陶器、本土産磁器、蔵骨器、銭貨、青銅製品、獣骨等	古墓2基
宜野湾後原遺物散布地	生産遺跡、集落跡	近世・近代	柱穴痕、溝状遺構、土坑、畝状遺構	中国産陶磁器、沖縄産施釉陶器、本土産磁器、瓦、簪、煙管、ガラス製品、獣骨等	

要　　約	5地区で調査を計画し、近世～戦後の遺構などが確認できた。A区の宜野湾後原遺物散布地で遺物から近世～近代頃を想定できるピット群と溝状遺構が検出された。B区の宜野湾シリガーラ流域古墓群では破風墓1基と亀甲墓1基を対象とした。銘書がある厨子甕が見られた。C・D区の神山後原丘陵古墓群ではC区でピット数基、溝状遺構が確認され、D区では破風墓1基が対象。墓庭、墓室、屋根など各部の造り及び造成方法などが把握された。E区の赤道渡呂寒原古墓群では古墓跡の検出を想定していたが、破壊が著しく、墓石等の部材が集中している状況が確認された。遺物ではワンプーのほぼ1個体が出土。

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行者）の承諾なく、この報告書を複製して利用できます。
なお、利用にあたっては、出典を明記してください。

宜野湾市文化財調査報告書　第61集

赤道渡呂寒原古墓群
神山後原丘陵古墓群
宜野湾シリガーラ流域古墓群
宜野湾後原遺物散布地

平成30年度・令和元年度
市道宜野湾11号整備における埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年　2023（令和５）年2月28日

編集
発行　沖縄県宜野湾市教育委員会

住所　〒901-2203
沖縄県宜野湾市野嵩１丁目１番２号
TEL 098-893-4430

印刷　文進印刷株式会社
沖縄県島尻郡八重瀬町字宜次706-4
TEL 098-996-3356